

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡群

にし いち り づか
西一里塚遺跡 I

長野県佐久市岩村田字西一里塚遺跡 I 発掘調査報告書

(弥生時代後期集落と環濠)

2014.9

長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡群

にし いち り づか
西一里塚遺跡 I

長野県佐久市岩村田字西一里塚遺跡 I 発掘調査報告書

(弥生時代後期集落と環濠)

2014.9

長野県佐久市教育委員会

報告書の概要

昭和48年の佐久市北部地区圃場整備事業・小規模河川改良事業にともなう西一里塚遺跡Ⅰの発掘調査である。河川改修事業により全く新たに現在の濁り川が設けられている。改修以前の本流の濁り川は北にある平塚集落の北を西流し、千曲川に注いでいた。

発掘調査から40年をへて、調査員であった佐久考古学会員の方々は他界され、大学生の面々も60歳を過ぎている。昭和48年ころは今のような調査の体制は整っていないなかでのことである。調査をせず遺跡を埋もれさせてはならないという考古学に対する情熱だけをもって、寒風吹きさらす佐久平において発掘調査が行われている。「県下初の環ごう」として新聞報道されている。今回、報告書として先人の成果を刊行できることは喜ばしいことである。

西一里塚遺跡Ⅰの主な時代は弥生時代後期で、遺構は竪穴住居址・土坑・環濠を検出している。

竪穴住居址

弥生時代後期の吉田式期と箱清水式期と後期全般にわたる集落で、10棟を調査している。なかでも後期後半新の箱清水式期に全盛期を迎えている。

土坑

骨片・炭化物層を伴う土坑に弥生後期の土器を伴う。土壙墓と考えられる土坑であろう。

環濠

調査区の北に弧を描く大溝がM5号溝址である。

溝は最大値で上幅4m、下幅2.6m、深さ78cmを測る。この溝は南と西に延長して南北115m、東西は西端が確認されていないが今のところ162mまでわかっている。東西方向に長い長楕円形を呈すようである。

環濠出土器は弥生後期の吉田式から箱清水式期、弥生後期末からの土器が出土する。弥生後期後半の箱清水式土器が下部から、その上面に弥生後期末の土器が出土している。

これらよりこの環濠は弥生後期後半に掘られ、弥生後期末を最終として埋もれたようである。



Y2-39 裾付き高杯脚



D1-1 杯



M5-181 S字契
土器(1:2)



西一里塚遺跡弥生後期の集落と環濠(1:2,000)



遺跡遠景（平成16年、県埋蔵文化財センター撮影 北西より）

中央のビニールハウス地点が西一里塚遺跡群にあたる。
道路を挟んで西一里塚Ⅱ・餅田遺跡となる。手前にある発掘中の地点が県の調査地点である。



調査風景（昭和48年、Y1号住居址付近 南より）



Y 5-5



Y 5-6
Y 5号住居址



Y 7・Y 5・Y 6号住居址 (南より)



Y 8-48
Y 8号住居址



Y 7号住居址 南西隅 (南より)



Y 8-17



Y 7号住居址 5・7高坏・壺出土状況



Y 7-5

Y 7-1



Y 7-6



Y 7-15

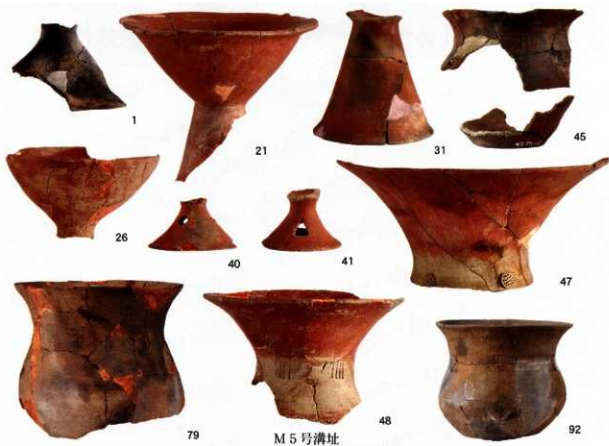


Y 7-7



Y 7-13

Y 7号住居址



M 5号溝址 完掘(東より)



M 5号溝址 C地点土層断面



調査員集合写真(昭和48年) 佐久考古学会員と大学生、地元の協力者の面々

例言

1. 本書は佐久市岩村田に所在する西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅰの埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査原因者及び原因
東信土地改良事務所・佐久建設事務所
長野県営佐久市北部地区圃場整備事業及び小規模河川改良事業による。
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地
西一里塚遺跡Ⅰ（略号 NⅠ）
長野県佐久市岩村田字西一里塚1620・1621
5. 発掘調査期間及び調査面積
発掘作業 昭和48年（1973）10月29日～11月30日
調査面積 960㎡
整理作業 昭和49年（1974）3月20日～29日・昭和49年4月28日～5月6日
遺物洗浄、一部の注記、接合、調査記録の整理などを行っている。
平成25年（2013）5月15日～平成26年9月30日
遺物注記、土器接合、遺物実測、遺物トレース、図面修正、遺構図トレース、
編集・刊行
6. 昭和48年（1973）10月29日～11月30日の発掘作業、
昭和49年3月20日～5月6日・昭和49年12月23日～昭和50年1月10日の整理作業については原因者負担により実施した。
平成25年5月15日～平成26年9月30日の整理作業及び報告書の刊行は全額を国庫補助金及び市費の公費により作成した。（平成25・26年度市内遺跡発掘調査費用）
7. 本書の作成は主として森泉かよ子が行った。
8. 本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

1. 挿図中の遺構の縮尺は竪穴住居址1/80、炉址1/40である。異なる場合は図中に明記してある。
2. 挿図中の遺物の縮尺は、土器1/4、石器は1/4・石器小型品1/2である。
3. 図版中の遺物写真の縮尺は土器ほぼ1/4、石製品ほぼ1/2・1/4である。異なる場合は明記してある。
4. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



地山



掘方・石器磨り面



赤色塗彩



炭化物・黒色塗彩



鉄錆



焼土



石器自然面

目 次

報告書の概要

巻頭図版

例 言

凡 例

目 次

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 自然的環境	4
第2節 基本層序	4
第3節 歴史的環境	5
第III章 遺構と遺物	11
第1節 竪穴住居址	11
1) Y 1号住居址	11
2) Y 2号住居址	12
3) Y 3号住居址	14
4) Y 4号住居址	16
5) Y 5号住居址	16
6) Y 6号住居址	18
7) Y 7号住居址	20
8) Y 8号住居址	22
9) Y 9号住居址	25
10) Y 10号住居址	26
11) Y 11号住居址	27
12) Y 12号住居址	29
第2節 土坑	29
1) D 1号土坑	29
2) D 2号土坑	29
3) D 3号土坑	30
4) D 4号土坑	31
5) D 5号土坑	31
6) D 6号土坑	31
7) D 7号土坑	31
8) D 8号土坑	32
9) D 9号土坑	32
10) D 10号土坑	33
第3節 溝址	33
1) M 1号溝址	33
2) M 2号溝址	33
3) M 3・M 4・M 6号溝址	33
第4節 環壕	35
1) M 5号溝址	35
第5節 グリッド・表探	45
第IV章 総括	48
第1節 遺構	48
1) 竪穴住居址	48
2) 土坑	49
3) 溝址	49
4) 環壕	50
第2節 遺物	54
引用参考文献	55

付表目次

第1表	周弘遺跡一覧表	6
第2表	西一里塚遺跡築濠規模表	49
第3表	検出遺構一覧表	56
第4表	出土遺物一覧表	57

挿図目次

第1図	西一里塚遺跡I位置図	1
第2図	西一里塚遺跡I 昭和48年面番整備前と後の河川	3
第3図	西一里塚遺跡I発掘区設定図	3
第4図	基本層序模式図	4
第5図	西一里塚遺跡群遺構配置図	5
第6図	湖辺遺跡分布図	7
第7図	西一里塚遺跡I全体図	10
第8図	Y1号住居址	12
第9図	Y2号住居址(1)	13
第10図	Y2号住居址(2)	14
第11図	Y3号住居址(1)	15
第12図	Y5号住居址(1)	17
第13図	Y5号住居址(2)	18
第14図	Y6号住居址(1)	19
第15図	Y6号住居址(2)	20
第16図	Y7号住居址(1)	21
第17図	Y7号住居址(2)	22
第18図	Y8号住居址(1)	23
第19図	Y8号住居址(2)	24
第20図	Y9号住居址(1)	25
第21図	Y9号住居址(2)	26
第22図	Y10号住居址(2)	26
第23図	Y11号住居址(1)	27
第24図	Y11号住居址(2)	28
第25図	Y12号住居址	28
第26図	D1号土坑	29
第27図	D2号土坑	30
第28図	D3号土坑	30
第29図	D4～D6号土坑	31
第30図	D7号土坑	32
第31図	D8号土坑	32
第32図	D9号土坑	32
第33図	D10号土坑	33
第34図	M1号溝址	34
第35図	M3・M4・M6号溝址	35
第36図	M5号溝址(1)	36
第37図	M5号溝址(2)	37
第38図	M5号溝址(3)	38
第39図	M5号溝址(4)	39
第40図	M5号溝址(5)	40
第41図	M5号溝址(6)	41
第42図	M5号溝址(7)	42
第43図	M5号溝址(8)	43
第44図	M5号溝址(9)	44
第45図	グリッド・表探(1)	45
第46図	グリッド・表探(2)	46
第47図	グリッド・表探(3)	47
第48図	湯川右岸の跡生後期後半の環濠	50
第49図	土器変遷図(1)	51
第50図	土器変遷図(2)	52
第51図	土器変遷図(3)	53

写真目次

巻頭 1	遺跡遺景・調査風景	
巻頭 2	弥生後期後半 Y5・Y8・Y7	
巻頭 3	弥生後期環濠 M5	
図版 1	遺構	72
図版 2	Y1・Y2 (1)	73
図版 3	Y2 (2)・Y3・Y5	74
図版 4	Y5 (2)・Y6・Y7 (1)	75
図版 5	Y7 (2)・Y8 (1)	76
図版 6	Y8 (2)・Y9 (1)	77
図版 7	Y9 (2)～Y12・D1～D3	78
図版 8	D6～D8・M1・M3・M4	79
図版 9	M5 (1)	80
図版 10	M5 (2)	81
図版 11	M5 (3)	82
図版 12	M5 (4)	83
図版 13	M5 (5)	84
図版 14	M5 (6)・M6・グリッド・表探・石製品 (1)	85
図版 15	石製品 (2)	86
図版 16	石製品 (3)	87
図版 17	石製品 (4)・古銭	88

第 I 章 発掘調査の概要

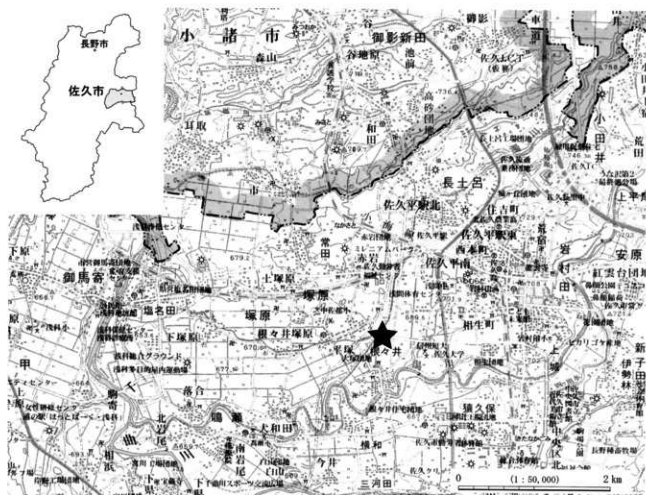
第 1 節 発掘調査の経緯

西一里塚遺跡は佐久市の北東にあって、岩村田市街地の南西約 2 km の地にある。調査地点は本調査の原因であった昭和 48 年の圃場整備・河川改修により現在の南流する濁川が新たに設けられ、その左岸にあたり、当時は桑畑であった。

昭和 48 年 7 月 11 日、県営佐久市北部地区圃場整備事業・小規模河川改良事業に関連し、佐久市教育委員会では県教育委員会の指導主事桐原健氏とともに遺跡の分布調査を行った。その結果、遺物が採集され遺跡の存在が確認された。河川改良及び圃場整備事業により、遺跡の破壊は避けがたく、事前に発掘調査をして遺跡の記録保存を行うこととなった。昭和 48 年 8 月 3 日に調査委託契約を佐久建設事務所長と佐久市教育委員会教育長との間でかわし、昭和 48 年 10 月 20 日に文化庁長官に埋蔵文化財発掘届を出し、発掘担当者を藤沢平治氏に依頼し昭和 48 年 10 月 1 日に承諾を得た。

昭和 48 年 10 月 8 日・12 日に発掘担当者の藤沢平治氏の立会で、ブルドーザーにより耕作土を除去。15 日には遺跡が湿地であるため、仮排水溝を設置した。同年 10 月 29 日に発掘調査に入り、同年 11 月 30 日発掘調査を終了。12 月 1 日に遺跡全体の撮影をしている。『西一里塚遺跡発掘調査概報』を昭和 48 年 12 月 28 日付で刊行している。

本書は平成 25 年度市内遺跡発掘調査事業の一環として刊行した。



第 1 図 西一里塚遺跡 I 位置図

第2節 調査体制

昭和48年度

(事務局)

教育長 細萱勇美

担当 木内 捷

(調査団)

発起担当 藤沢平治 (野沢北高教諭)

調査員 土屋長久 武藤 金 三石延雄 井上行雄 森泉定勝 新村 薫 佐藤 敏 佐藤 守

渡辺章義 嵐岩志雄 新津海三 白倉盛男 小林秀人 高村博文 白田武正 青木幸男

鴨下幸彦 藤井悠紀枝 林 幸彦 川島雅人 大橋広行 古川喜・花岡 弘

岩村川及び平塚地区住民 上田高校生 岩村田高校生、野沢北高校生

調査協力者 百瀬新治 小原ひさ江 矢口忠良 山岡榮了

平成25・26年度

(事務局)

教育長 土屋盛夫

文化財課長 三石宗一

文化財調査係長 比田井清美

文化財調査係 須藤肇司(平成26年3月退職) 小林真奈 富沢一明 上原学 神津一明 久保浩一郎

報告書担当 森永かよ子

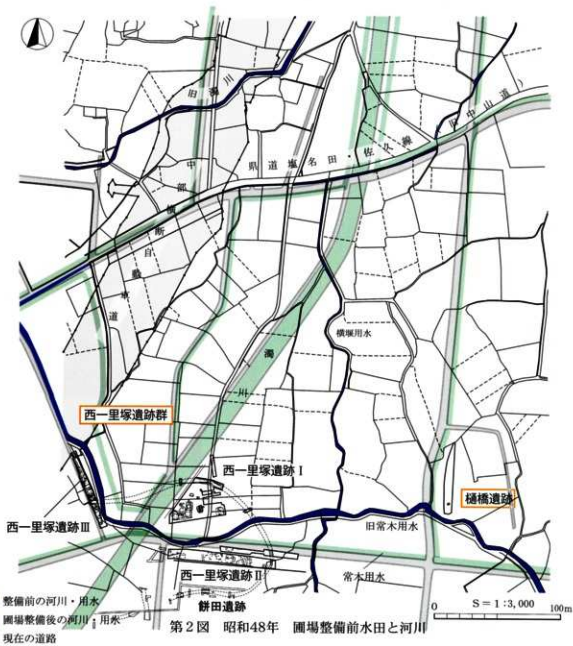
報告書作成分担 土器接合 依田好行・中瀬登、石膏復元 小島真

羽面修正 細谷秀子、デジタルトレース 上原美千代、拓本 柳沢亜矢子

遺物写真 梶益子・田中ひさ子・清水律子・柳澤孝子(石器)

第3節 調査日誌

7/11日	表紙分冊調査	11月18日 (晴れ)	Y2の調査、Y3を切り始める。
10月08日	ブロードーをより後土器土器作業	14日 (晴れ)	Y6をの壁・柱の調査。
12日	ブロードーをより後土器土器作業	15日 (晴れ)	Y2位のセクションベルトの調査、M1清掃・実施、Y6掘り下げ、骨の調査が完了した。口であった。
15日	土器の調査	16日 (晴れ)	骨をかき出し、M1の調査が完了。Y5・Y3掘り下げ。
17日	グッドC決定のため基礎掘削及び	17日 (晴れ)	Y5・Y3・Y4土器調査、Y7掘削。
29日 (晴れ)	発掘調査開始。午前中、昨日の大雨でブルー化した発掘現場を復元作業。グッドE-1穴を掘り下げ、遺構プラン確認。	18日 (晴れ)	Y7を切り始める土器調査。
8日 (曇り)	グッドC-D-3月の調査プラン確認。関係者による土器のみである。	19日 (晴れ)	掘削し、えびす溝、Y5・Y6・Y7位の調査、M5調査のプラン確認。
31日 (晴れ)	佐久平を掘削開始。グッドC-D掘削調査プラン確認。遺構プランがほぼ完成している。	20日 (晴れ)	約2時間あり、土器の骨の調査等。M5調査を5-22日に予定、18・19・20を掘り下げる。
1月 1日 (曇り)	グッドC-D掘削4月の土器土器プラン確認。	21日 (曇り)	M6調査の掘り下げ。室内から土器出土。
2日 (快晴)	ブルームーヴグッドE-L-M-N掘削。グッドA-Bの柱をブロードーで取り除く。	22日 (晴れ)	M6調査の掘り下げ。掘削の広がりを確認するため、西に百レンプ、東に東レンプを掘削。
3日 (曇り)	グッドAの柱土器土器。かき取りの努力を費やす。Y1土器の調査は床面に近い。中央より東の柱に約5cmほどの土器調査を実施。	23日 (晴れ)	M5の掘り下げ完了。Y5・Y6のプラン確認のための調査。
5日 (曇り)	昨日までの高校生の参加がなくなり、発掘が始まる。関係者の快音は、掘り下げるか否か関係者である。	24日 (晴れ)	Y8掘り下げ。D3・D4土器調査。全体調査実施。M6セクション実施。
9日 (晴)	Y1のセクション掘削・セクションベルトの調査、M1の掘削を行う。	25日 (晴れ)	掘削完了。
9日 (晴)	掘削中止。	27日 (晴れ)	掘削し、Y8・Y9・Y10の掘り下げ。D1・D4土器セクション実施。
7日 (晴れ)	豊北地区の調査。豊北山、八ヶ岳が空気に美しく見える。A・Bの調査。Y1土器を掘削。C・F列にY12を掘削。	28日 (晴れ)	高さ次する。Y8・Y10の掘り下げ完了。Y2・Y4・Y9・Y10の調査。
8日 (快晴)	遺構に掘削が完了。グッドD-K-Lの調査。	29日 (晴れ)	Y5・Y10の調査・実施。各生垣が完了。D6・D7土器調査。
9日 (晴れ)	Y1の調査・実施。	30日 (晴れ)	D3・D7土器掘り下げ、Dのセクション実施。全体調査、掘削完了。
10日 (曇り)	土器調査の進行を確認。西一高土器館にサンプルを収める。	12月 1日 (快晴)	遺構土器調査の完了。
11日 (快晴)	高校中・上・高学年の高校生も参加。掘削が完了。グッドM-L-Nの調査、調査実施。		
12日 (晴れ)	グッドA～C19～21のプラン確認を行う。		



第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

西一里塚遺跡は佐久市岩村田地籍に所在し、岩村田駅の南西2kmにあり、河川改修後新設された濁川左岸に位置する。この地点は昭和48年の圃場整備前は桑畑で、北側は水田があり低く、遺跡の南も低くなることから微高地にあたる。従来、濁川は、旧中山道沿いの平塚集落の北側を西に流下していた。

遺跡の東は横堰用水の分流が南北に流れ、南の常木用水に落ちていた。常木用水は西に流化し遺跡を横切って北に流れている。(第2図参照)

標高は684.7mを測る。

佐久平は北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地(佐久山塊)が連なり、南は蓼科山・ハケ岳の山々に囲まれている。中央を千曲川が北流し、千曲川右岸の佐久平北部では浅間山の火山灰が基盤を成している。

浅間山の最も古い山体である黒斑山は、約25,000年前に大規模な水蒸気爆発をしている。その際に黒斑山の東半分が山体崩壊を起こし、土石なだれとなって、群馬県北麓と長野県側の南麓側を覆った。これが「塚原泥流」と呼ばれ、「流れ山」が佐久市塚原地籍を中心に点在している。

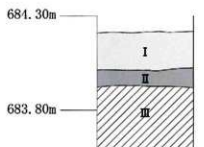
その後、13,000年前には浅間山南麓の大規模な噴火により、軽石流が覆っている。これが「第一軽石流」である。この軽石層の最大の厚さは30mを測るといふ。軽石流は小河川でも浸食され易いため、浅間山麓から放射状に浸食谷が形成され、「田切り地形」を生み出している。田切り地形の上面は畑地、田切り内の低地は水田耕作がなされてきた。この田切り地形がみられるのは佐久市長土呂地籍あたりまでで、南側では消滅していく。この西一里塚地点では湿地帯の低地と微高地となり、それに流れ山からなる地形となる。

第2節 基本層序

本遺跡は周囲に低地があるため微高地にあたる。南北幅200m東西250mほどの微高地に、弥生時代の集落が東西に展開しているようである。本調査区から北西に120m、南は70mほどからは低地となっている。

本調査地点の低いところは耕作土の下に黒色土(10YR2/1)が堆積し、その下が浅間軽石流となる。

- I層 耕作土。
- II層 黒色土(10YR2/1)砂質土。
- III層 黄褐色土層(10YR5/6)



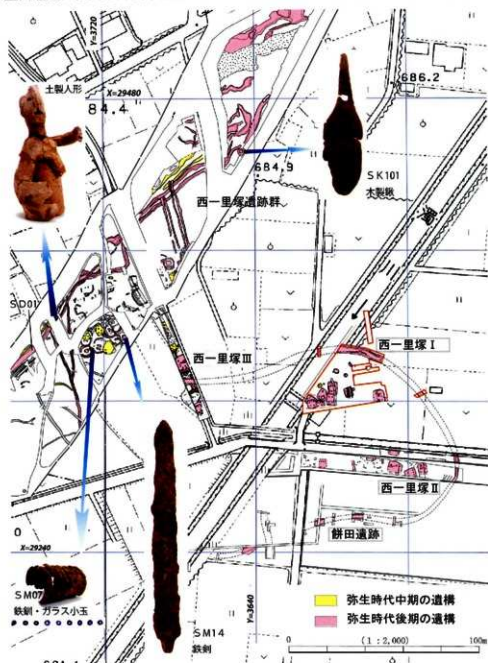
第4図 基本層序模式図

第3節 歴史的環境

本報告書は昭和48年の発掘調査の報告で、その後平成15・18年に西一里塚遺跡Ⅱ・Ⅲが佐久市教育委員会、西一里塚遺跡群が県の埋文センターによって調査されている。

本遺跡から出土する土器の大半は弥生時代後期の箱清水式土器であり、検出した遺構の年代も弥生時代後期とされよう。1棟のみが弥生中期後半の栗林土器を出土し、弥生時代中期とみられる。弥生時代後葉の土器群があり、在地の箱清水の系統を引くものと東海系の「S字甕」が出土し、南関東の装飾壺1点が表採されている。ここでは西一里塚遺跡の中心的時代である弥生時代についての周辺遺跡をみてみたい。

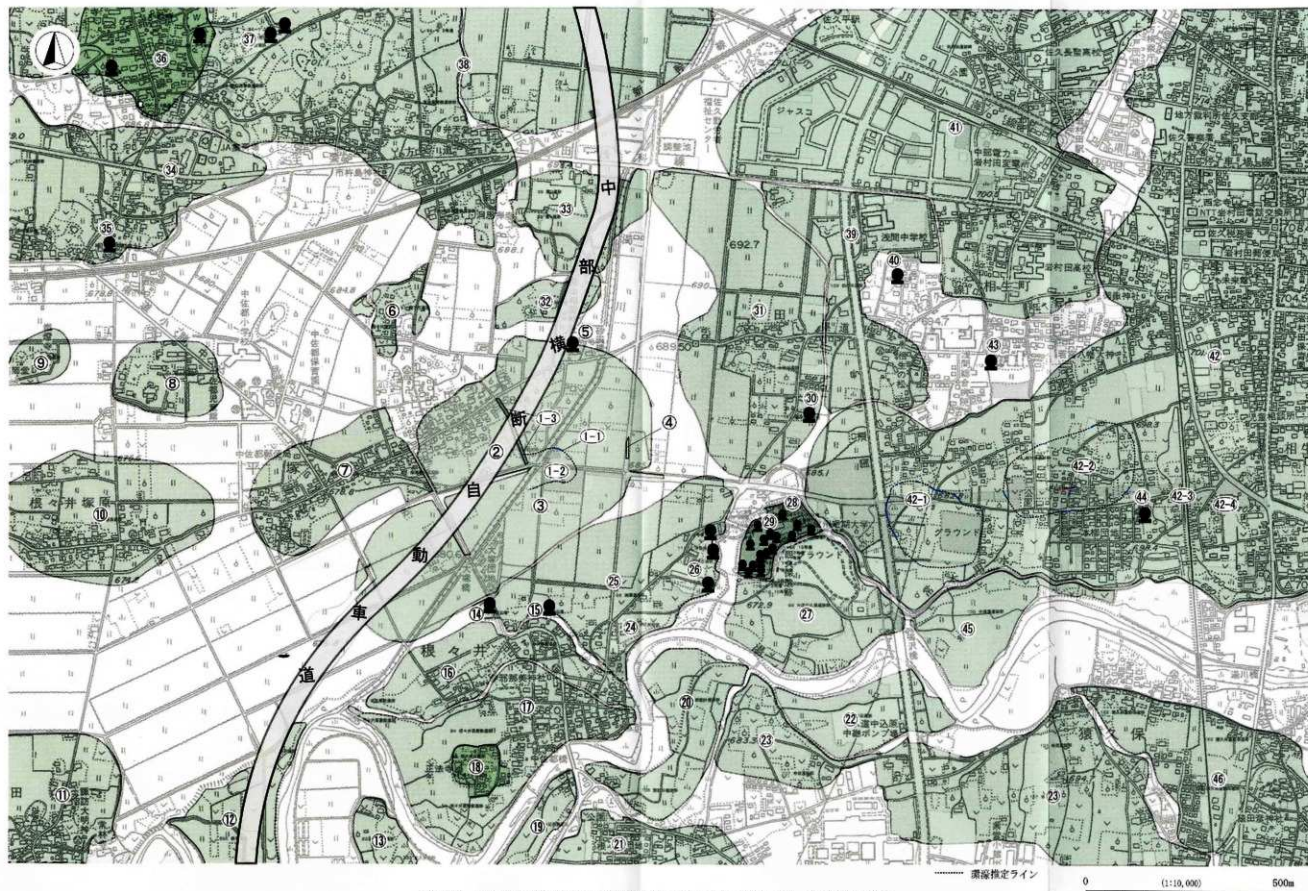
佐久市内では弥生時代前期の遺跡はごくわずかな調査例があるのみである。弥生時代前期の遺物を出土しているのは、岩村田地籍の湯川沿岸の下信濃石遺跡・22仲田遺跡・42-3東大門先遺跡、野沢地籍の東五里田遺跡、佐久市月夜平遺跡（旧白田町）などは千曲川沿岸である。未報告であるが千曲



第5図 西一里塚遺跡群 遺構配置図

施設番号	遺跡名	種別	所在地	時代							近畿府番号	備考
				旧	弥	古	原	中	近	近		
1-1	しいいりて 第一温泉水跡	泉源跡	岩村田		○						92	弥生時代(後期)掘穴住居11・中期1, 土坑7, 溝6, 溝渠1) 平成45(1973)年調査
1-2	第一温泉水跡	泉源跡	岩村田		○						92	弥生時代(後期)掘穴住居9・溝3, 溝渠1)、ピット跡 平成19・18(2003・2004)年調査
1-3	第一温泉水跡	泉源跡	岩村田		○						92	弥生時代(中期)掘穴住居4, 後期掘穴住居8・溝3・溝渠1、近代(Ⅷ1) 平成18(2006)年調査
2	第一温泉水跡(Ⅷ)	泉源跡	岩村田		○	○	○				92	弥生時代(中期)掘穴住居4, 後期掘穴住居8・溝3・溝渠1、近代(Ⅷ1) 平成18(2006)年調査
3	新田遺跡	溝跡	岩村田									弥生時代(後期)溝跡1) 平成47(1972)年調査
4	新田遺跡	溝跡	岩村田		○							弥生時代(後期)掘穴住居7) 平成12(2000)年調査
5	あまのふ 志山古墳	古墳	塚原			○					99	
6	あまのふ 藤子古墳	古墳	塚原				○				91	
7	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			88	
8	あまのふ 宮の前遺跡	古墳	塚原					○			86	
9	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			87	
10	あまのふ 遺跡	古墳	塚原						○		86	
11	あまのふ 大穴古墳	古墳	塚原			○	○				226	
12	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				99	弥生時代(中期)掘穴住居23・後期掘穴住居20) 平安時代(掘穴住居20) 創立18・大穴17, 溝14 平成7・18(2006・2008)年調査
13	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			233	
14	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原						○		109	
15	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原						○		110	
16	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			93	
17	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			94	
18	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原						○	○	96	
19	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			242	
20	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			106	
21	あまのふ 宮の上遺跡	古墳	塚原			○	○	○			240	
22	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			252	古墳時代(掘穴住居20)・奈良平安(掘穴15)・創立10 大穴17, 溝14, 平成7(1995)年調査
23	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			107	平安(掘穴住居1)・弥生時代(掘穴住居20) 平成7(1995)年調査
24	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			108	
25	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○		○	96	弥生時代(中期)掘穴住居43・後期掘穴住居6, 土坑7, 古墳時代(内溝20) 平成9(1997)年調査
26	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			111	
27	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				99	
28	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				98	弥生時代(中期)掘穴住居11・後期掘穴住居58) 古墳時代(中期)掘穴住居20) 創立, 土坑, 溝 1057・50(1982・1985)年調査
29	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原								116	
30	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			112	
31	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				101	
32	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			594	
33	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			30	平安時代(米田跡) 平成4(1992)年調査, 平成16・19(2006・2007)年調査
34	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				27	
35	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			89	
36	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			33	
37	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原						○		34	
38	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				28	
39	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			102	古墳時代(中期)掘穴住居3・塚原1), 水田跡 弥生時代(後期)掘穴住居4) 平成10・18(1998・2006)年調査
40	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原					○			114	
41	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○	○			41	弥生~中世(掘穴住居185) 平安~古墳(内溝17)・創立地跡敷地39 第一号墳跡1~XXI号墳跡
42-1	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				52	
42-2	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				52	北一平塚遺跡1~IV号墳跡
43-5	あまのふ 塚原遺跡	古墳	塚原			○	○				52	東大門先遺跡1・II号墳跡

第1表 周辺遺跡一覧表



第6図 周辺遺跡分布図(弥生後期の西一里塚・西一木柳・北一本柳遺跡聚落)

地区番号	遺跡名	種別	所在地	時代							近久市 遺跡番号	備考
				新	古	中	古	中	近	近		
42-4	西八日町遺跡	溝溝	岩村田				○	○			62	西八日町遺跡1～3(発掘調査)
43	根々井古墳	古墳	岩村田				○				112	
44	西八日町遺跡 東一本柳古墳	古墳	岩村田				○				116	
45	西八日町遺跡 中島古墳群	古墳	岩村田				○	○			100	
46	西八日町遺跡 新市地	新市地	兼久区				○	○			123	

川左岸にはまだ点在するようである。今のところ住居址は発見されず、土坑または遺物の包含層のみである。

弥生中期前半の遺跡は発見されておらず、弥生中期後半になって遺跡が展開する。中期後半の集落は佐久市の北城では湯川・滑津川沿岸の段丘上にみられる。湯川の左岸を下流からさかのぼると寄塚遺跡群寄塚遺跡、宮の上遺跡群、21根々井芝宮遺跡、右岸では川原端遺跡、12森下遺跡、26鳴沢遺跡群五里田遺跡、28北西の久保遺跡、42岩村田遺跡群西一本柳遺跡など多くの遺跡がある。岩村田地籍までさかのぼることができる。

西一里塚遺跡群では、県の埋文センターが調査した中部横断自動車道路路分2西一里塚遺跡群、1-2佐久市の市道改良工事で調査した西一里塚遺跡Ⅱで、弥生中期後半の住居址が検出されている。本報告書のY12住は弥生中期後半の土器が出土する住居址であるが、佐久では他に類例のない円形プランを呈している。西一里塚遺跡の弥生中期の集落は湯川から600mほど北にあり、北側の低地を望む微高地に集落がある。

弥生後期の遺跡は湯川水系の弥生中期に後出して集落を構成し、湯川河岸段丘上では本遺跡を含め川原端遺跡、26鳴沢遺跡群五里田遺跡、28北西の久保遺跡、42-1・2西一本柳・北一本柳遺跡に集落が見られる。そればかりではなく、湯川沿岸から離れた本遺跡の北にある低地を囲んで対岸の岩村田・長土呂地籍に集落を増やし展開している。長土呂・岩村田地籍は田切り地形が終焉し、台地が低地に臨む地点にあたる。

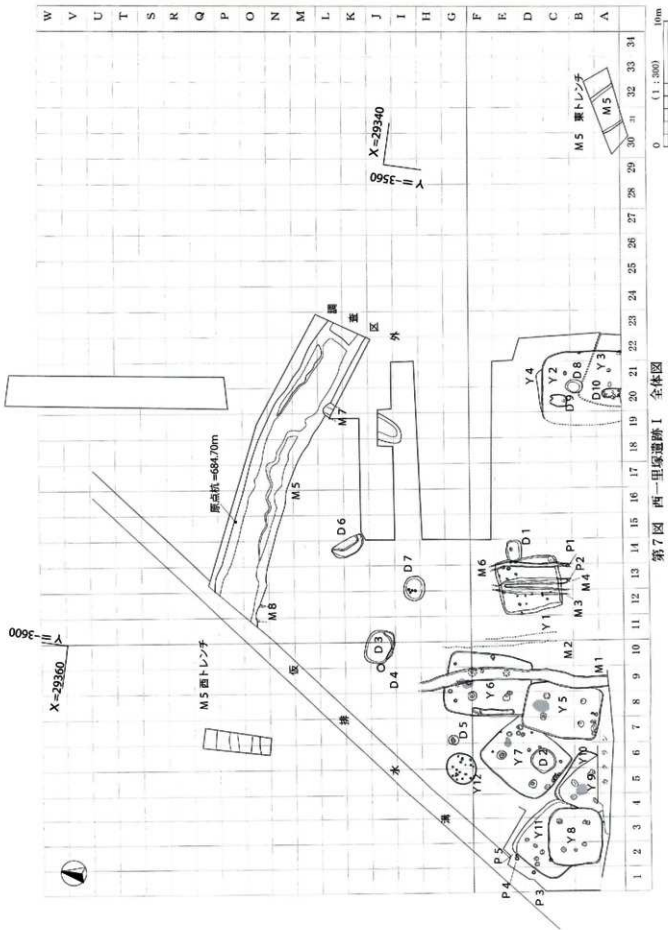
本遺跡の北には低地を挟んで旧中山道沿いの微高地があり、その北は湯川を西に流す低地となっている。33濁り遺跡で時期ははっきりしないものの水田跡が調査されている。現在の濁川の流れは本調査の原因でもあるが、河川改修され新たに進路を南北に変更し、湯川と合流している。

本遺跡では弥生時代後期の集落を囲む大型の溝(M5)が検出され、西一里塚遺跡ⅢのM7、南に隣接する2餅田遺跡に連続し、弥生時代後期の集落を囲む環壕とみられる。

この溝と同じ時期とみられる溝は42-1岩村田遺跡群西一本柳遺跡、42-2北一本柳遺跡に環壕が確認されている。この時期の環壕が800mほどの距離を持って存在していたことは弥生時代後期の集落のあり方として注目される。

また本遺跡の周囲は塚原泥流の残丘上に古墳が構築され、多くの古墳が分布している。14の根々井大塚古墳は古墳前期の墳丘墓としては佐久では最も古いとされている。3餅田遺跡のS字壟などを含め、本遺跡も終末から古墳初頭に近い土器がある。古墳中期の古墳では29北西の久保古墳群があり、これも希少な遺構群である。佐久地方にある大半の古墳は後期であり、29北西久保古墳群の17号墳からは形象埴輪が多量に出土している。本遺跡分布地図に掲載の古墳も後期に属するものである。

西一里塚遺跡では弥生時代中期後半・弥生時代後期が主体で、古墳時代以降の集落はなく、2の中部横断自動車道の北の低地では平安時代の水田跡が検出されている。



第7図 西一里塚遺跡 I 全体図

第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) Y1号住居址(第8図、図版1・2)

E13グリッドに位置し、D1号土坑、M3・M4・M6号溝址に切られる。南北472cm、東西432cm、最大の深さ13cmを測り、隅丸方形を呈す。主軸方位はN-8°-Wを指す。

壁下には周溝が巡っている。P1~P4が主柱穴とみられ、D形に近く、長径16~24cm、短径13~16cm、深さ5~20cmを測る。堀方を掘っていないので、柱痕のプランの径の数値とみられる。壁柱穴はP5・P7・P8があり、これも柱痕のプランであろう。P9・P10・P11・P20はM6号溝址に沿い、P13・P15~P19の6個はほぼ直線に並び、M3と並行する。それぞれM6・M3号溝址に伴うピットであろうか。P12・P21もM4に伴うであろう。P14は分からない。

焼土範囲は中央より東寄りの床面上に64×44cmがある。炭化物範囲は北と東に多く分布し、床面から5~6cm浮いている。南東にあるP6は60×40cmの楕円形で、深さ24cmを測り、貯蔵穴であろう。

出土遺物には弥生土器と炭化物がある。炭化物は木材の炭化したものである。

弥生土器は破片で完形品はない。杯・甕(焼成後穿孔)・蓋・壺・甕・付置盤がある。壺は赤色塗彩と9の無彩色のものとなる。頸部の文様はいずれも様描文で、9が横線文、11・13がT字文、10が葉状文、12が波状文を施す。6の甕は口縁が強く反り、肩部が内湾している。口縁に施文する波状文は重複し、頸部は葉状文ではなく、縦の様描文をいれ、T字文状になっている。

これらより本住居址の年代は弥生時代後期後半の箱清水式期であろう。

2) Y2号住居址(第9・10図、図版2・3・14)

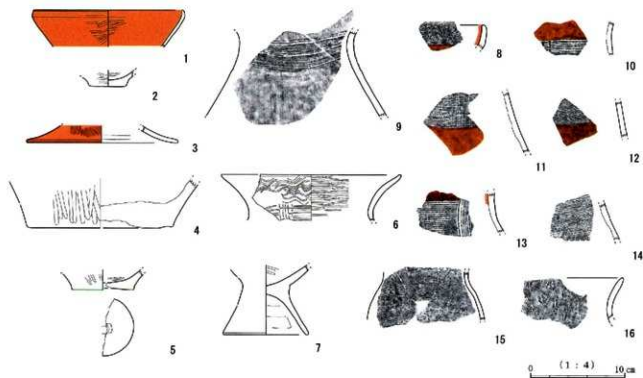
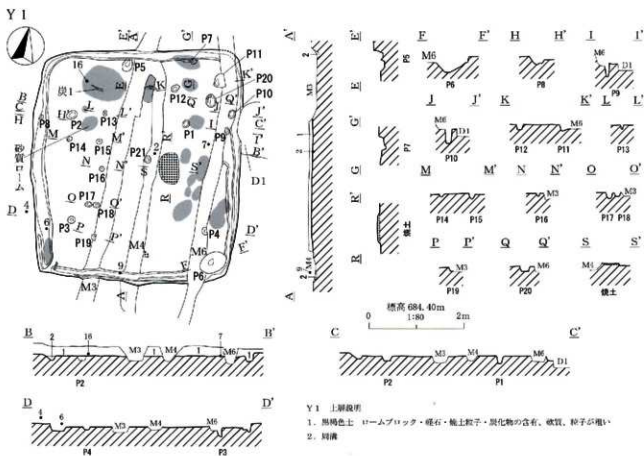
C21グリッドにあり、南は調査区域外である。隅丸長方形を呈すると見られ、D8~D10号土坑に切られ、Y3・Y4号住居址を切っている。主軸方位はN-0°で北方向を指す。南北は609cmを調査し、西壁が明らかなではないため東西幅は推定で580cm、最大深さ20cmを測る。

主柱穴はP1~P4で、楕円形と円形があり、長径24~28cm、短径20~26cm、深さ28・32~44cmを測る。P5は壁柱穴であろうか。炉はD8号土坑により壊されたようである。P1・P2の主柱穴の間に長さ44cm、幅28cmの角礫があるが、炉に関係した石であろうか。

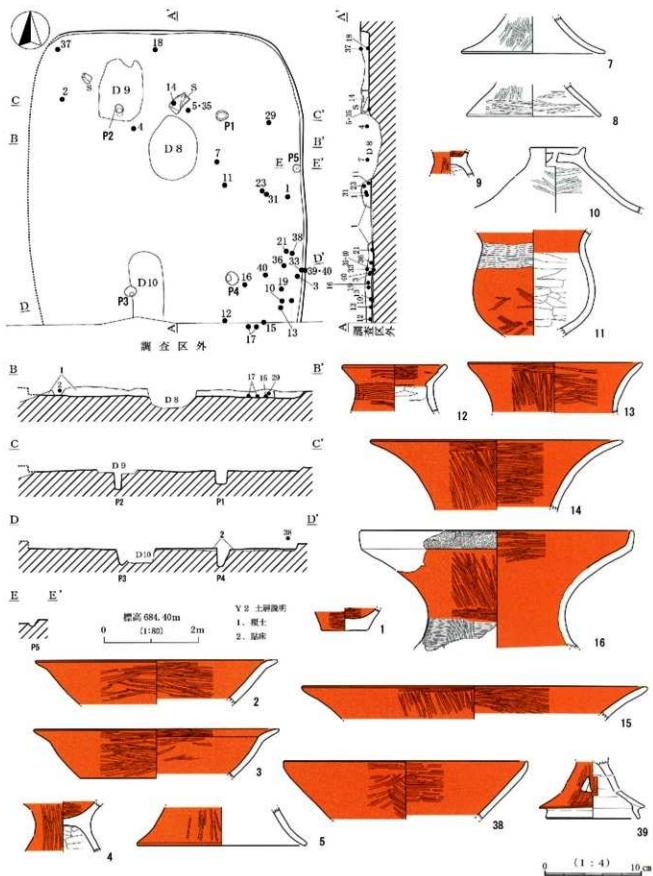
出土遺物には弥生土器、杯・高杯用の土板、磨・煮石、混入の岩鏡貨幣がある。

弥生土器は杯・高杯・蓋・壺・甕がある。住居の東側床面に多くの土器が出土している。杯・高杯・壺類は赤色塗彩され、蓋は無彩色のものが3点ある。39の小型高杯脚は三角透かしを4個持ち、脚柄にはさらに裾を付けている。付けた下部分は無彩色であることから、器台に挿して使用したのであろうか。壺では11の脚の付くものであろうか。胴下部が膨らんで急に窄まる。ミガキは弱く、赤色塗彩は淡い。12の壺は頸部の櫛描葉状文まで赤色塗彩され、内腹には粘土紐の輪痕のみ痕を残している。受け口の壺16は口縁の外反が強く、外腹をもって立ちあがる口縁端部は、外面に櫛描波状文を施し、頸部に櫛描T字文を施す。25~27は弥生時代中期の甕である。甕は口縁の屈曲外反が強く、胴上部が球胴化している。18の甕の内面はミガキ調整が丁寧になされている。16・40は口縁と胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描葉状文を施す。18・19の壺は口縁と胴上部は櫛描斜走文で、頸部に様描葉状文を施す。

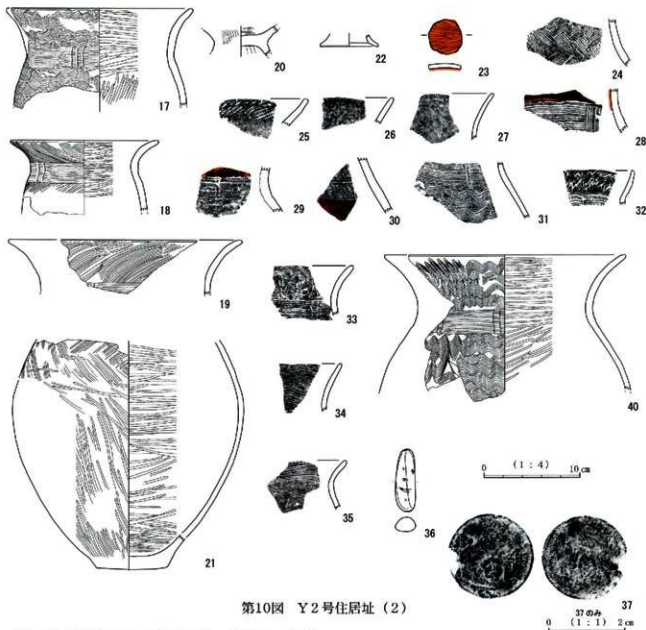
これらより、本住居址の年代は弥生時代後期後半の箱清水式期であろう。



第8図 Y1号住居址



第9图 Y2号住居址(1)



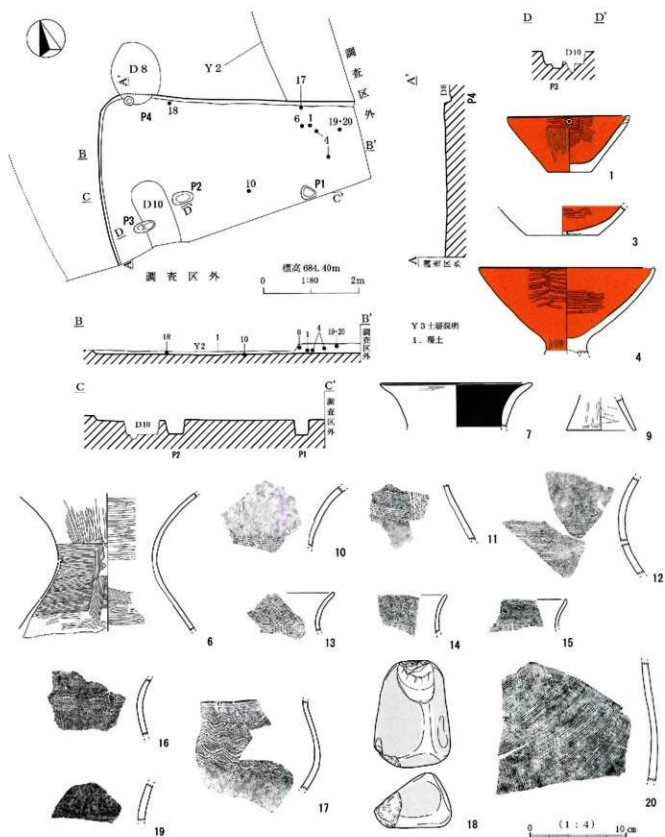
第10図 Y2号住居址(2)

3) Y3号住居址(第11図、図版3・14)

A22グリッドにあり、Y2号住居址、D8・D10号土坑に切られる。住居址の北西部を調査し、東西長564cm、南北長308cmを測り、隅丸長方形を呈すものとみられるが形態は不明である。従って主軸は北壁の北に対する値でN-21°-Eを測る。主柱穴のP1・P2は長径32・44cm、短径28・24cm、深さ32・30cmを測る。P3は長径44cm、短径24cm、深さ96cmで主柱穴と似た規模・形態であり、棟持柱であろうか。とすれば炉はP3の東にあるのであろうか。P4は壁下にあつて壁柱穴であろう。

出土遺物は弥生土器と磨・蔽石が出土している。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある。1の杯は赤色塗彩され、口縁端部に1つ小孔がある。4の高杯の杯部は全体がゆるやかに内湾する素口縁である。6の壺は無彩色の壺で口縁は大きく外反している。頸部は櫛描T字文を幅広く施す。薄手で焼き締まった土器である。7の壺の内面はミガキ調整され黒色を呈する。10~12は無彩色で10・11の頸部は櫛描波状文に縦の櫛描文を施している。櫛描波状T字文とした。15の甕は口縁端部が内湾し、櫛描波状文が1段施文されており、弥生後期前葉の吉田式期のものであろうか。

これらより、本住居址は弥生時代後期前半古の吉田式期であろう。



第11图 Y3号住居址

4) Y4号住居址 (第7図 全体図参照)

D21グリッドにあり、Y2に切られ、北端のプランを確認した。南北48cm、東西306cmを測るが堀下げは出来なかった。重複関係より弥生時代後期後半新より古い住居である。

5) Y5号住居址 (第12・13図、図版1・3・4・15)

D9グリッドにあり、M1号溝址に切られ、Y6・7号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、南北582cm、東西400cm、最大深20cmを測る。主軸方位N-9°-Eを指す。主柱穴はP1~P4でほぼ円形を呈し、長径44~56cm、短径38~54cm、深さ40~48cmを測る。

南壁下にある出入りロピットP5・P6は楕円形を呈し、長径52・42cm、短径28・26cm、深さ20・24cmを測る。P7は貯蔵穴であろうか。長径72cm、短径38cm、深さ12cmを測る。炉は北の主柱穴間にあり、7の壺底部(内径27cm、深さ6cm)を炉底としている。炉の堀方は東西24.5cm、南北22.5cm、深さ5cmを掘り込む。周囲には136×100cm、厚さ5cm程の炭化物範囲がある。

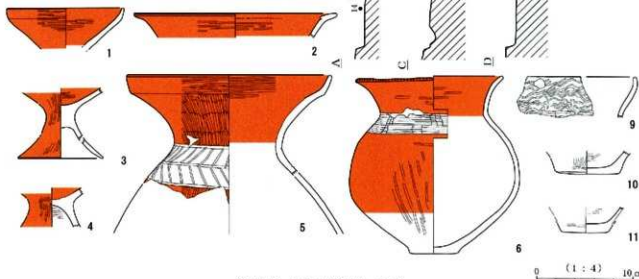
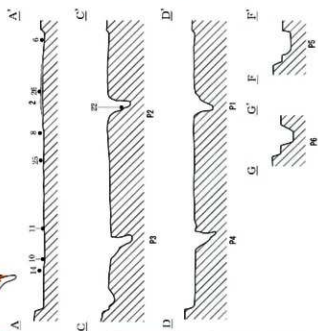
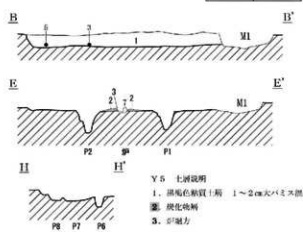
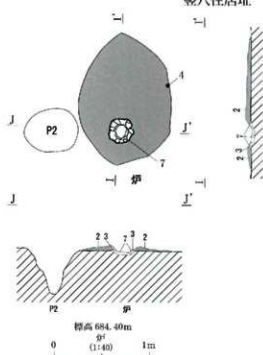
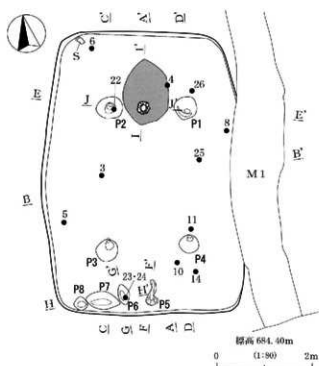
出土遺物には弥生土器、土板、磨・敲石がある。弥生土器には杯、高杯、壺、甕がある。

1の杯は口縁上端が直立し、赤色塗彩されている。2~4の高杯は赤色塗彩され、2の高杯杯部口縁の鏝は内側からの貼付痕(粘土紐)を残したままになっている。3の高杯の赤色塗彩は杯内面にわずかに赤色が残る程度である。5の壺は口縁上部が外縁をもつ受け口の壺で、口縁は大きく外反している。胴上部は球胴形を示す。頸部には篋描矢羽根文が施文される。6は胴部形が球胴形を呈し、口縁は頸部から大きく外反する。器肉は薄く、赤色塗彩されるが従来の弥生土器の赤色塗彩とは異なり淡いもので、所によっては彩色が落ちて地肌になっている。文様は口縁の口唇部に刻み目、頸部というより胴上部に篋描籐文、下にもう一段籋籋籋状文を施文する。下段の籋籋状文は籋描が波状文になっているところもある。8は文様がないので機種は明確ではないが、台付甕とした。脚内面を除いてミガキ調整される。

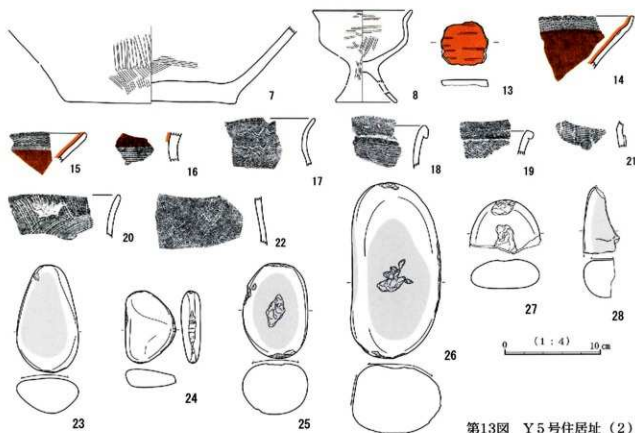
磨面と敲打痕を持つ石が6個あり、何かを加工をしていた住居址であろうか。顕著な使用痕を残している。

これらより、本住居址は弥生時代後期後半新の縄清水式期であろう。

竈穴住居址



第12図 Y5号住居址(1)



第13図 Y5号住居址(2)

6) Y6号住居址(第14・15図、図版1・4・15)

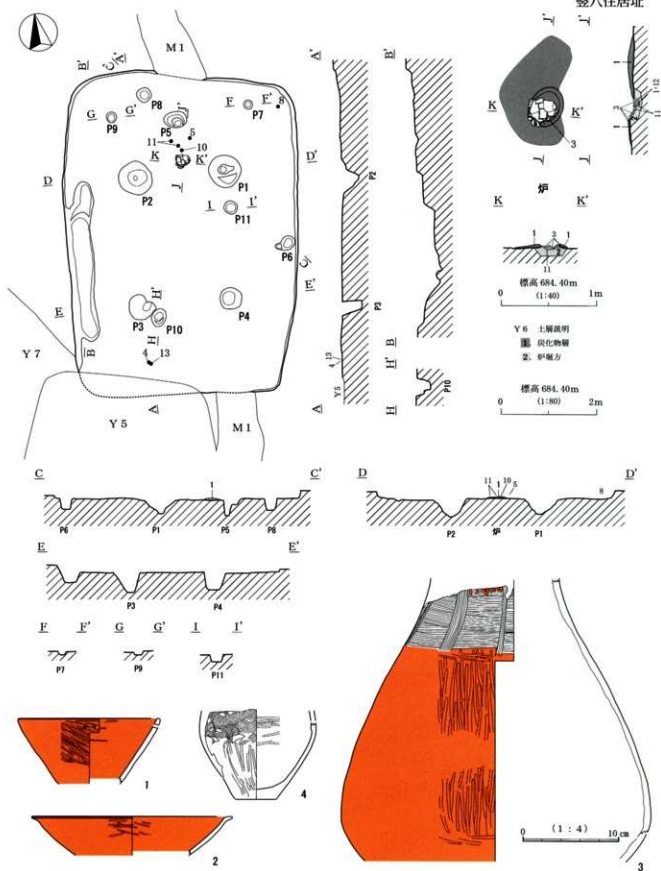
G10グリッドにあり、Y5・Y7号住居址、M1号溝址に切られる。主軸方位はN-7°-Eを指し、隅丸長方形を呈し、南北642cm、東西472cm、壁の最大深19cmを測る。西壁下には周溝がある。主柱穴はP1～P4で円形を呈し、長径46～72cm、短径46～72cmを測る。P1とP2の柱痕の形態は東西に長いプランである。P10はP3の建て替えてであろうか、径36cmの円形で、深さ30cmを測る。P5は炉の北にあって、長径48cm、短径36cm、深さ36cmを測る棟持柱であろう。壁柱穴であろうP6～P9は円形で、径20～32cm、深さ8～28cmを測る。

炉は北側主柱穴の中間にあって、中央よりやや少し北に寄る。長径42cm、短径34cm、深さ10cmの楕円形の堀込みの上面に、1・3・11・12の杯と壺の胴部片を重ねて敷いて炉底としている。炉の北にある11の壺破片と10の甕片も炉底に使用されていたものが散乱したようである。炉の周囲の床には炭化物範囲がみられた。炉の土器は、1の杯片と12壺の胴部片を最下に敷き、次に11の壺をその上に、最上部は3の壺の胴部の内側の丸みを利用して炉底にしている。

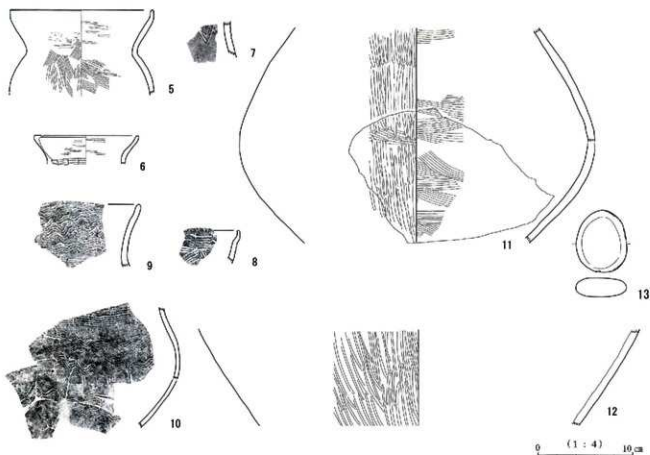
出土遺物には弥生土器と磨石がある。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある。1の杯は赤色塗彩され、直線的に開く口縁部である。2は高杯で、罎が短く内稜をもって水平に伸びる。3の壺は胴部上半分が炉底に使用され、胴形は無花果形で、肩は張っていない。頸部は櫛描T字文、胴部外面は赤色塗彩される。11の壺も炉に利用されたもので、胴下部への稜線を持たない無花果形のものである。無彩色である。5は口縁部が長く内湾気味に開き、端部は内湾する。器形は後期初頭の吉田式の甕と類似する。内外ともにハケ目調整後雑にミガキ調整されている。櫛描波状文は施文されていない。6の甕の口縁も端部は内湾しており、口縁は文様がなく頸部に等間隔の櫛描簾状文が施される。7・8は弥生中期の壺と甕であろうか。

炉に使用された土器は住居の使用時期より若干古いものの住居の使用時期に近いものである。1の底径の割合の大きい口縁が直線的な杯、3の壺の胴肩部の張らない器形に櫛描T字文の施溝などから、本住居址は弥生時代後期前半の吉田式期であろう。

竖穴住居址



第14图 Y6号住居址(1)



第15図 Y6号住居址(2)

7) Y7号住居址(第16・17図、図版1・4・5・15)

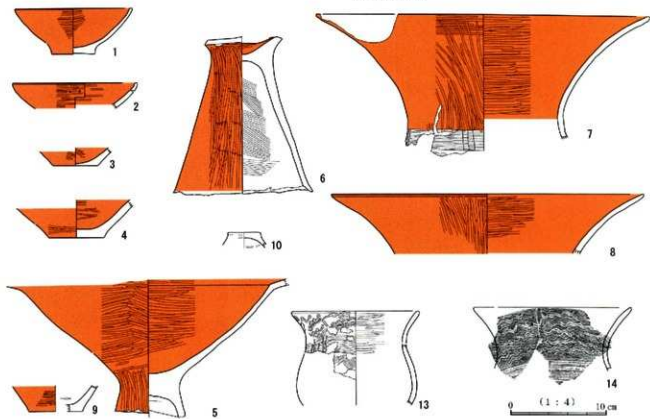
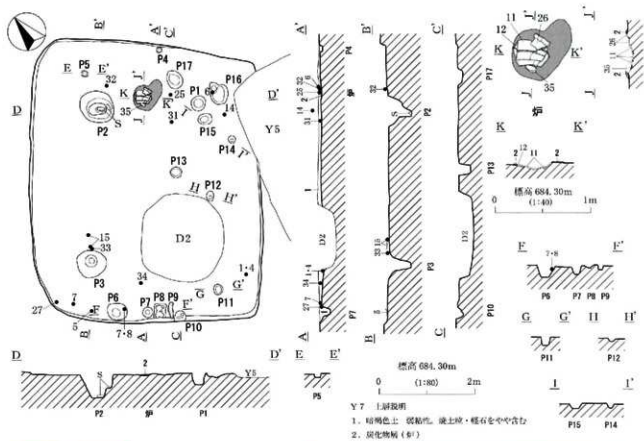
E5グリッドにあり、Y5号住居址・D2号土坑に切られ、Y6号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-40°-Eを指す。南北577cm、東西480cm、最大深8cmを測る。主柱穴はP1~P3で、南東はD2に壊されたようである。P1は円形で径32cm、深さ24cmを測る。P2・P3は長径72・64cm、短径68・56cm、深さ42・48cmを測る。P6は貯蔵穴で42×36cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。P7~P9は出入り口のピットとみられる。P4・P5・P12・P14・P15ピットはほぼ円形で径20cm、深さ8cmと小規模なものである。P16・P17の径は40cm前後と大きいが浅い。

炉は北の主柱穴間の中央よりやや北にあって、東西40cm、南北42cm、深さ7cmの堀込みに、11・12の壺胴部を敷いて炉底としている。

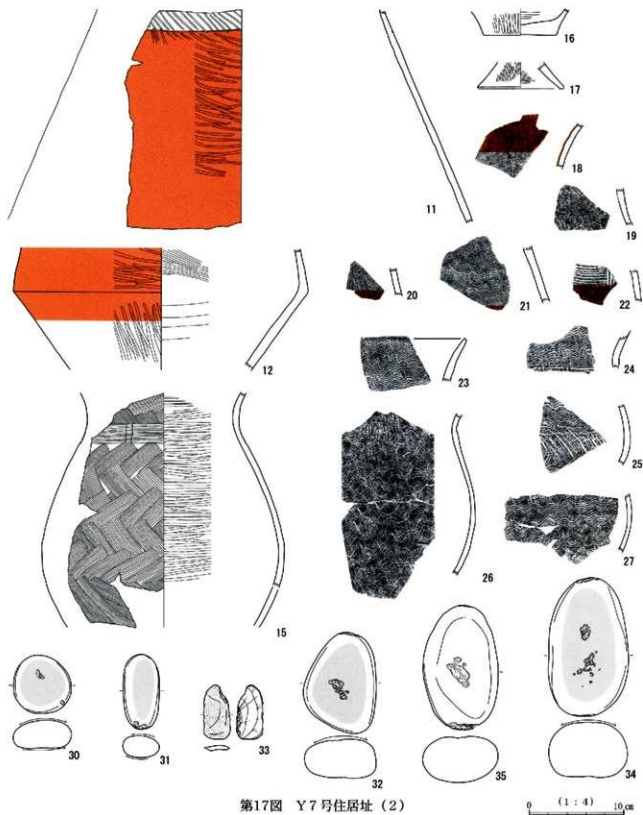
出土遺物には弥生土器と編み物石1個、磨・敲石6個がある。土器は杯・高杯・蓋・壺・甕がある。1の杯は底部が柱状で口縁は内湾気味に開き、内外赤色塗彩される。5・6の杯は大型品で、5の杯部鉤は内縁を持って外に開く。6の脚は高さをもち筒状である。5・6とも器台として最利用されたようである。

7の壺は口縁部径34.8cmを測る大型品で、口縁は大きく外反し、赤色塗彩される。頸部には櫛描簾状文、その下段に櫛描波状文が施文されている。これも南西隅の壁下において口縁を下にして器台として再利用されたようである。甕は櫛描波状文と櫛描斜走文がある。甕の頸部は窄まって口縁が大きく外反する器形である。炉に使用された11の壺は胴上部が直線的で頸部はヘラ描の斜走文が施される。12の胴下部が稜を持って直線的に底部に至るなど、弥生後期後半古段階の土器様相をもっている。

これらより本住居址は弥生時代後期後半古の箱清水式期であろうか。

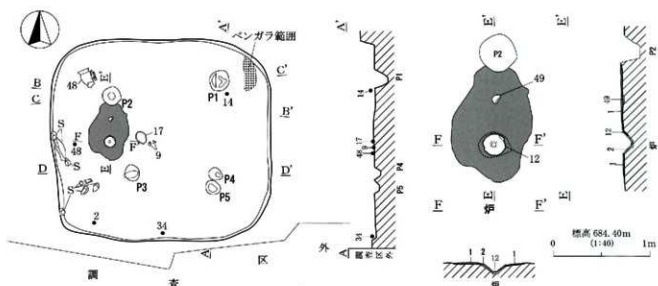


第16图 Y7号住居址(1)



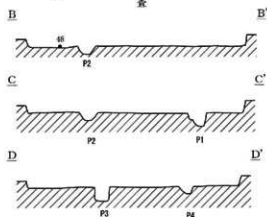
8) Y8号住居址 (第18・19 図、図版1・5・6・15)

C4グリッドにあり、Y9・Y10・Y11号住居址を切る。主軸方位はN-89°-Wを指す。住居址の形態は方形に近い隅丸長方形を呈し、南北412cm、東西456cm、最大深10cmを測る。主柱穴はP1

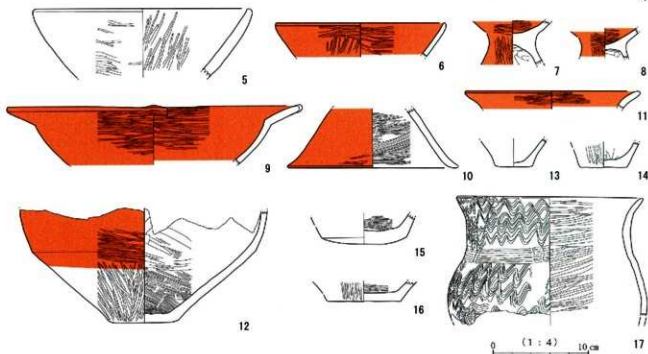
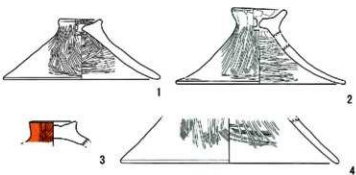


調査

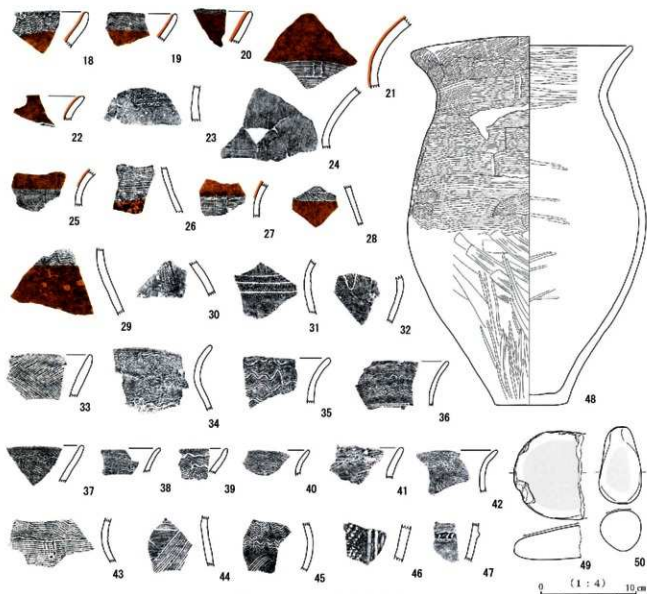
Y8 土層説明
 1. 炭化物層 (9)
 2. 和榎方



標高 684.40m
 (1:80) 2m



第18図 Y8号住居址(1)



第19図 Y8号住居址(2)

～P5で、P4とP5はどちらかが建て替えであろうか。円形で、長径32～44cm、短径26～41cm、深さ12～32cmを測る。炉は住居址の西側のP2とP3の間にある。12の壺底部を埋設して炉底としている。炉は径24cm、深さ11cmを測る。周囲には炭化物範囲が見られる。

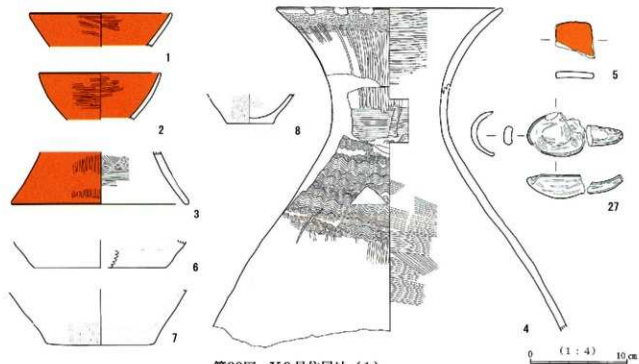
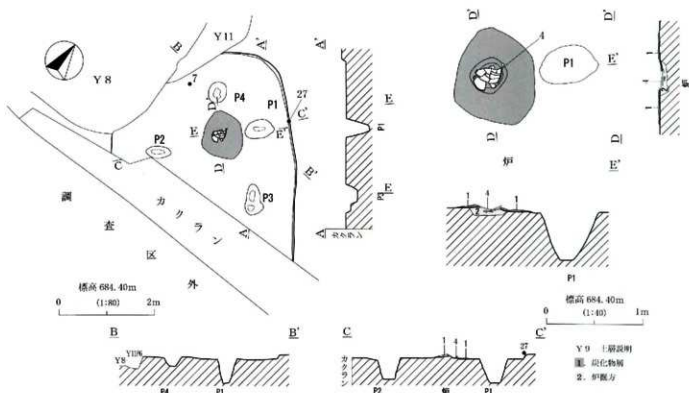
出土遺物には弥生土器・縄文土器片と磨・蔽石がある。

弥生土器は蓋・鉢・杯・高杯・壺・甕がある。蓋は3を除いて無彩色である。2の蓋は裾が大きく外反して広がっている。5の鉢は無彩色で小片であり、本址に伴わない前代のものであろう。9の高杯杯部は内湾して開き、内稜をもって鈔が直線的に外に延びている。12の炉に使用した壺下部は胴部が球胴形に膨らみ、下部に外稜をもち、ほぼ直線的に底部にいたる。17の甕は口縁が筒状で端部が外反する。胴部は球胴形を呈す。48の甕は高38cmの大きい甕で住居址の北東隅からほぼ完形で出土している。口縁は比較的短く外反し、胴部は直線的に中位にかけて膨らみが最大径をもつ。施文は口縁と胴上半に、櫛描波状文というより直線文に近いものである。

これらより本址は弥生時代後期後半新の箱清水式期の住居址であろう。

9) Y9号住居址 (第20・21 図、図版6・7)

C5グリッドにあり、Y8・Y11号住居址に切れられ、Y10号住居を切る。南は擾乱と調査区域外のため明らかではない。住居址は隅丸長方形を呈すものと思われる。主軸方位はN-45°-Wを指す。南北は454cmを調査し、東西376cm、最大深9cmを測る。

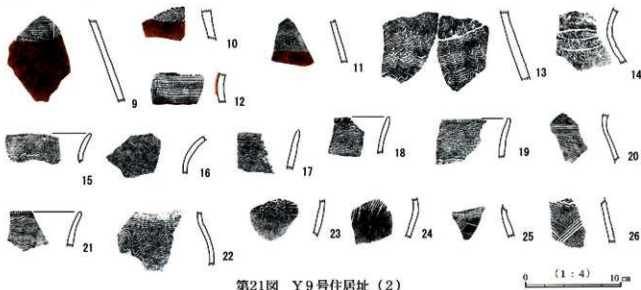


第20図 Y9号住居址(1)

主柱穴はP1～P3で、P3は柱穴が重なっているようである。P1・P2は東西に長い楕円形を呈し、長径60・54cm、短径38・26cm、深さ49・44cmを測る。P3は北側の柱穴が深く24cmを測り、南北に長い。P4は棟持柱であろうかほぼ円形で長径42cm、短径36cm、深さ20cmを測る。炉はP1とP2の北の主柱穴間にあり、4の壺を敷いて炉底としている。周囲には炭化物範囲が見られた。炉堀方は38×35cmの隅丸方形のプランを呈し、深さ9cmを測る。

出土遺物には弥生土器、土製円板、土製匙がある。弥生土器は杯・高杯・壺・甕がある、4の壺は炉底として再利用されていたもので、無彩色で、口縁と胴上部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。灰が多く付着している。5の土板は弥生土器の壺胴部を二次利用し、端部は明らかに磨っている。27の土製匙は推定で長さ10cm、匙幅4.7cm、厚さ1.9cmを測り、無彩色である。ミガキ調整は手捏痕が残り、それほど丁寧ではない。

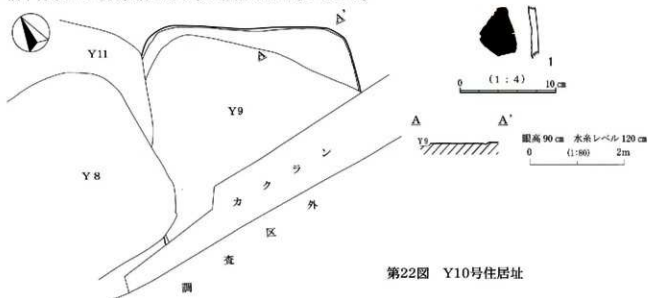
これらより本住居址は4の炉の土器から見ると弥生時代後期前半古の吉田式期ないし、それより弱千新しいであろう。



第21図 Y9号住居址(2)

10) Y10号住居址(第22図、図版7)

B6グリッドにあり、Y9号住居址と重なり切られている。部分的な残存のため、プランと規模は不明確である。また弥生時代の赤色塗彩された壺胴部片があるが、重複関係から、弥生時代後期前半古ないしそれ以前であろうと推定されるものである。



第22図 Y10号住居址

11) Y11号住居址 (第23・24図、図版1・11・15・16)

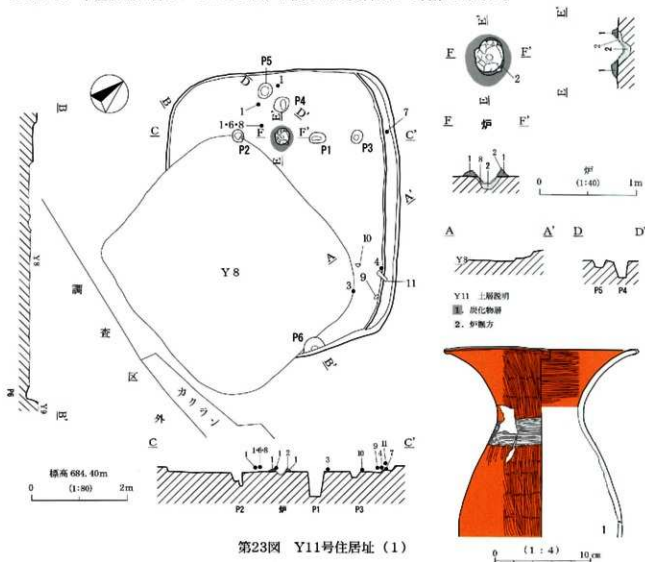
E 2 グリッドにあり、Y 8 号住居址に切れ、Y 9・Y 10 号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-39°-Wを指す。南北536cm、東西436cm、壁最大深21cmを測る。主柱穴はP 1・P 2で楕円形と円形を呈し、長径34・26cm、短径20・24cm、深さ54・32cmを測る。P 4は棟持柱で円形を呈し、径32cm、深さ34cmを測る。P 3・P 5は壁柱穴であろうが長径28・36cm、深さ12・16cmで円形に近い。P 6は南壁にあって、半円形で長径48cm、深さ18cmを測る。

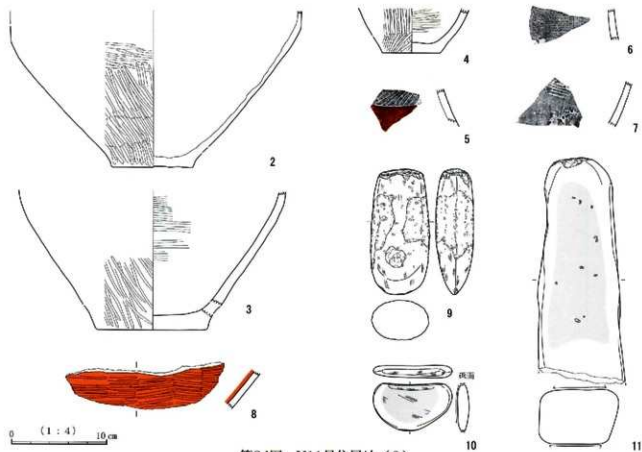
炉は北の主柱穴間にあって、長径39cm、短径29cmを測る楕円形の落ち込みに2の壺脚下部を埋設して炉底としている。2の壺の内側で径30cm、深さ15cmを測る。内面は剥離し、端部は焼けて赤褐色化している。

出土遺物には弥生土器、磨製石斧、砥石、磨・蔽石がある。1の壺は頸部に線の細い櫛描文を施し、他はミガキ・赤色塗彩されている。口縁端部には突起を4個もつ。口縁端部は平に近く伸び、胴上部は張らずにで肩である。最大径を口縁にもつ。2の炉に使用した壺は無彩色であり、胴下部が器高をもち、外稜をもっていない。

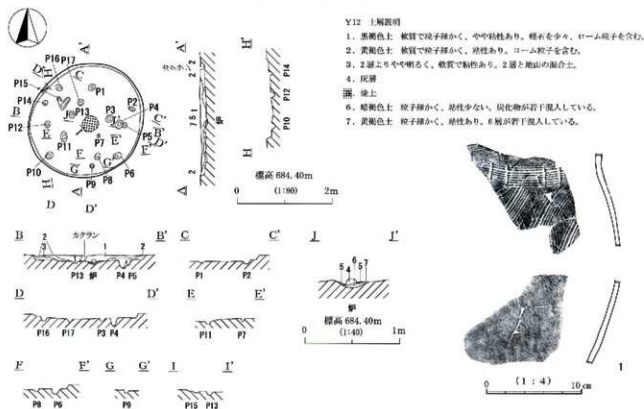
南東の壁下に3点の石が集中しており、9の磨製石斧は長さ13.1cm、幅6.3cmを測り、基部を使って蔽石として転用している。10は砂岩製の砥石で、擦痕がある。11は長さ23.6cm、重さ2.43kg、磨面をもち、上端には打痕が残る。

これらより本址は弥生時代後期後半古の箱清水式期であろうか。Y 9号住居址と重複関係があることから、本住居址が新しいものとしたが、限られた資料なので明確ではない。





第24図 Y11号住居址(2)



第25図 Y12号住居址

12) Y12号住居址(第25図、図版1・7)

G6グリッドにあり、円形を呈し、長軸は242cm、短軸217cm、最大の深さ11cmを測る。長軸方位はN-53°-Wを指す。中央に灰・焼土範囲があり、P1~P17の多数の小ピットがある。ピットはP4・P15を除くと、径8~15cm、深さ5~9cmと浅く小さい。P4は長径19cm、深さ16cmを測り、P15は不定形である。

炉は中央にあり、径34cm、深さ4cmを測り、灰の下に焼土、若干の炭化物粒子を含む層がみられた。

出土遺物には弥生土器がある。弥生土器は甕のみで、頭部に櫛描簾状文、口縁・胴上部に櫛描斜走文を施している。施文が整って深いことなどから、弥生中期の甕片とみられる。

これらより弥生中期の住居址とみられるが規模が小さく、円形の住居址の例が近辺にないことから、必ずしも住居址とすることもないと思われる。

第2節 土坑

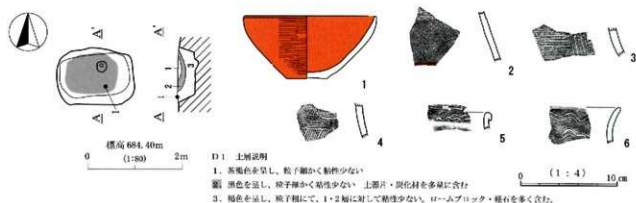
1) D1号土坑(第26図、図版1・7)

E14グリッドにあり、Y1号住居址を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-89°-Eを指す。

底面は平坦である。長軸長163cm、短軸長118cm、深さ40cmを測る。底面には径22cm、深さ6cmの円形ピットがある。覆土の上層に炭化材層が見られた。上面から粉状の骨片が出土している。

出土遺物には弥生土器と炭化材と骨片がある。1の杯は小さな底部から口縁が全体に内湾気味に外傾するもので、内外赤色塗彩される。赤色塗彩は落ち、大半はわずかに顔料を残す程度である。拓本には壺と甕の破片があり、5の甕は折り返し口縁で、折り返し部に波状文が施される。

これらより本土坑は弥生時代後期箱清水期で、Y1号住居址より新しい。



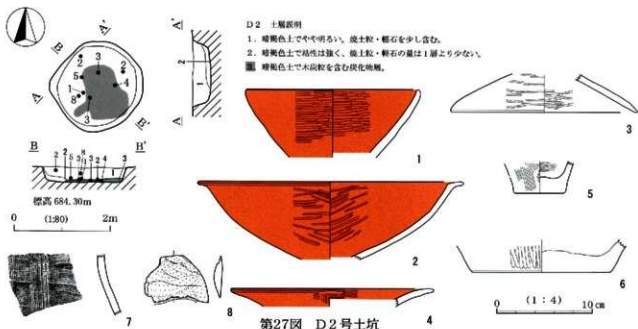
第26図 D1土坑

2) D2号土坑(第27図、図版7・15)

D6グリッドにあり、Y7号住居址を切る。角張った円形を呈す。長軸方位はN-48°-Eを指す。長軸184cm、短軸176cm、深さ38cmを測る。底面には炭化物層が4cmの厚さで堆積していた。炭化物層の上面からは、1~5の杯・高杯・蓋・壺が出土する。上層には焼土粒子も含んでいる。

出土遺物には弥生土器と頁岩製の使用痕のある剥片が出土する。弥生土器は杯・高杯・蓋・壺形土器である。杯・高杯・壺の口縁は赤色塗彩されている。高杯は鈎が内稜をもって短く直に伸びる。

これらより本土坑は弥生時代後期後半箱清水式期で、Y7号住居址より新しい。



D2 土層説明

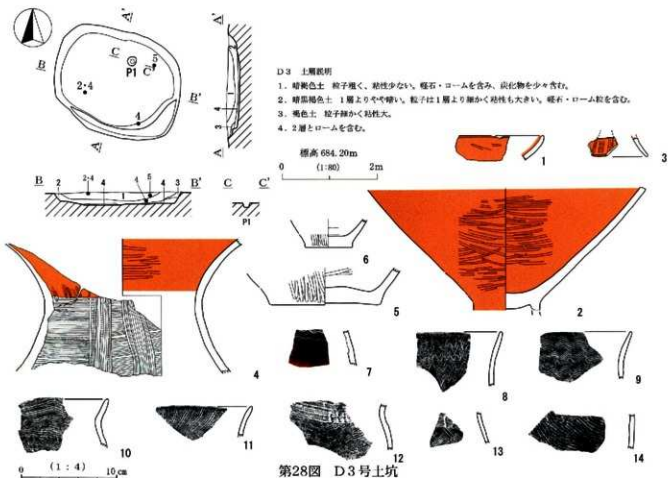
1. 暗褐色土でやや明るい。土粒粗・軽石を少し含む。
2. 暗褐色土で粘性は強く、微上粒・軽石の量は1層より少ない。
3. 暗褐色土で木炭粒を含む炭化焼土。

第27図 D2号土坑

3) D3土坑 (第28図、図版1・7)

J11グリッドにあり、重複関係はない。隅丸長方形を呈し、長軸267cm、短軸221cm、深さ27cmを測る。長軸方位はN-74°-Wを指す。底面は4層上面とみられ、舟底形を呈す。

出土遺物には弥生土器がある。弥生土器は、杯・高杯・壺・甕がある。杯・高杯・壺口縁部は赤色塗彩される。2の高杯杯部は直線的に外傾している。4の壺は口縁が大きく外反して、頸部に櫛描T字文が施される大型の壺片である。甕は櫛描波状文が施文される。14はハゲ目のある薄手の甕である。これらより弥生時代後期箱清水式期の土坑であろう。



D3 土層説明

1. 暗褐色土 粘子塊く、粘性少ない。軽石・ロームを含む、炭化物を少々含む。
2. 暗褐色土 1層よりやや暗い。粘子は1層より細かく粘性も大きい。軽石・ローム粒を含む。
3. 褐色土 粘子細かく粘性大。
4. 2層とロームを含む。

第28図 D3号土坑

4) D 4号土坑 (第29図)

J 10グリッドにあり、径60cmの円形を呈す。深さは7cmと浅く、底面はほぼ平坦である。重複関係はないが、東に隣接してD 3がある。

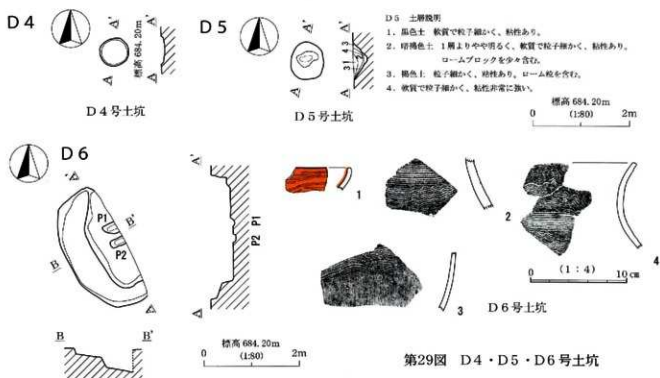
出土遺物はなく、重複関係もないことから時代は不明である。

5) D 5号土坑 (第29図)

G 7グリッドにあり、長軸79cm、短軸69cm、深さ28cmを測る。長軸方位はN-6°-Wである。覆土の堆積・形態から風倒木跡であろうか。遺物は出土していない。

6) D 6号土坑 (第29図、図版8)

K 14グリッドにあり、半城のみ調査している。長軸長264cm、短軸125cm、深さ55cmを測る。底面にP 1・P 2があり、10・6cm底面より低い。形態は半円形を呈す。遺物はなく、覆土が不明であり、重複関係もないことから、性格・時期ともに不明である。

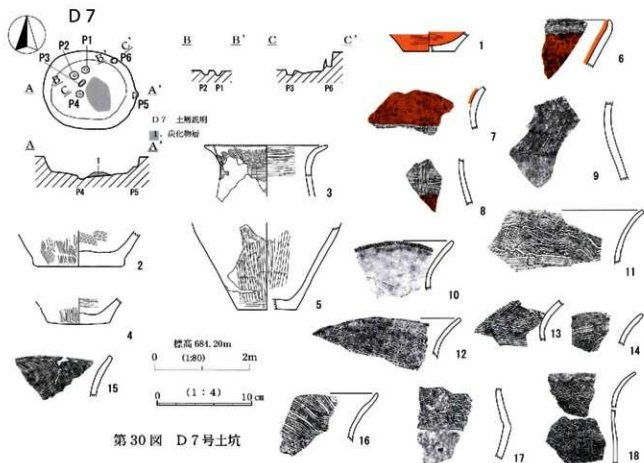


7) D 7号土坑 (第30図、図版8)

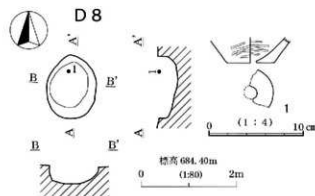
I 13グリッドにあり、長軸199cm、短軸165cmの楕円形を呈し、深さ46cmを測る。長軸方位N-89°-Wを指す。重複関係はない。底面に4個と壁に2個の小ピットがあり、底には炭化物範囲があった。

出土遺物には弥生土器と骨がある。弥生土器は杯・壺・甕があり、壺は赤色塗彩と9・10の無彩色の壺がある。3の甕は櫛描波状文と簾状文が施文され、口縁は強く外反する。全体の器形がわかる資料がないので、詳細はわからない。

これらより本土坑は弥生時代後期箱清水期とみられる。



第30図 D7号土坑



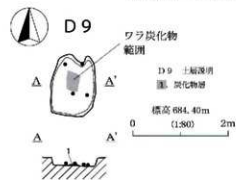
第31図 D8号土坑

8) D8号土坑 (第31図、図版8)

B21グリッドにあり、Y2号住を切る。楕円形を呈し、長軸133cm、短軸106cm、深さ39cmを測る。長軸方位はN-7°-Eを指す。上層から甕が出土する。

出土遺物には弥生土器がある。1は甕で焼成前の穿孔が1孔開く。

土器は1点のみで、覆土もわからないので、時代は弥生時代以降である。



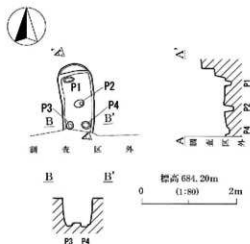
第32図 D9号土坑

9) D9号土坑 (第32図)

C20グリッドにあり、Y2を切る。北辺が窪むがほぼ長方形を呈し、長軸129cm、短軸95cm、深さ20cmを測る。長軸方位はN-4°-Eを指す。底面にはワラ状炭化物の範囲が見られた。

出土遺物はワラ状炭化物と遺物があったようであるが、点が残るのみで、遺物は消失している。

遺物がないため時代はわからないが弥生時代後期またはそれ以降の土坑である。



10) D10号土坑 (第33図)

A20グリッドにあり、南は調査区域外である。Y2・Y3号住居址を切る。長軸長は調査域では142cm、短軸長71cm、深さ51cmを測る。長軸方位はN-4°-Wを測る。

底面には4つの小ピットがある。Y4号住居址に関連するか本土坑にともなうかは不明である。

出土遺物はない。

重複関係から弥生時代後期またはそれ以降の土坑である。

第33図 D10号土坑

第3節 溝址

1) M1号溝址 (第34図、図版1・8・15・16)

グリッドA9～H9まで南北に14.78mにわたって検出される。北は自然消滅、南は調査区域外である。幅は78～106cm、深さ最大で26cmを測り、断面形は箱形である。Y5・Y6号住居址を切る。覆土底面には砂質土が堆積している。

出土遺物には弥生土器がある。土器は鉢・深鉢・杯・甕・台付甕・壺がある。弥生後期の住居と重複関係のあることから二時期が見られる。Y5号住居址の弥生後期後葉とみられるものに3の深鉢、7の甕がある。また、Y6号住居址の弥生後期前半とみられ土器は5の大型壺である。無彩色で頸部にヘラ描横線文を2条巡らせ、その間に櫛描波状文を6段施している。口縁は頸部から直立気味に立ち上がり、上部で外反して開き、端部は内湾する。

土器は弥生時代後期箱清水式土器だけであるため、Y5号住居址よりは新しく近い時期の溝であろうか。

2) M2号溝址 (第7図 全体図参照)

グリッドB11～H10まで南北に延びている。浅いため、プランが明確ではなく、推定線である。長さ12.2m、幅80～100cmを測る。

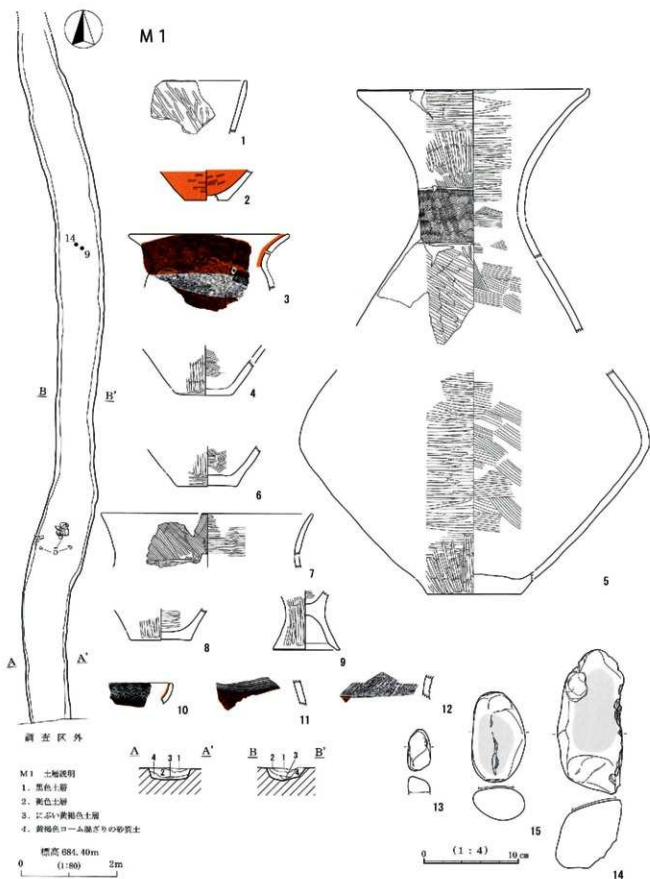
遺構出土遺物はないが、グリッド出土では10甕・11壺・19深鉢・21甕が出土している。(第46図)いずれも弥生時代後期箱清水式の土器群である。

重複関係も無いため時期は不明であるが弥生時代後期とみられる。

3) M3・M4・M6号溝址 (第35図、図版8・14)

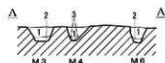
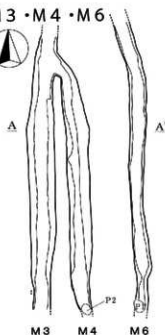
グリッドC12～F13にあり、Y1を切る。長さ600cmを検出し、幅22～58cm、深さ30・34cmを測る。覆土は粒子が細かいようであるが重複する住居の焼土粒子を含んでいる。Y1号住居址でも述べたが、Y1号住居址のP4・P9・P10・P11・P20はM6号溝址に沿い、P13・P15～P19の6個はほぼ直線に並び、M3と並行する。それぞれM6・M3号溝址に伴うピットであろうか。P12・P21もM4に伴うであろう。

出土遺物には弥生土器がある。杯は赤色塗彩され、壺は頸部に櫛描波状文、口縁・胴部は赤色塗彩される。甕は櫛描波状文、斜走文を施される。これらより、Y1号住居址より新しく、近い時期の弥生後期の溝であろう。



第34図 M1号溝址

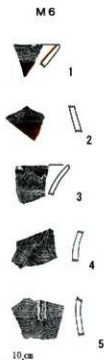
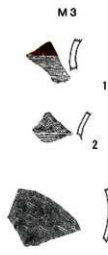
M3・M4・M6



M3・4・6 上層説明

1. 黒褐色土: Y1号住居跡の2層より小粒石少量で軟質、粘土顆粒子、粒子が細かい。
2. 灰褐色土: ロームを含む、1層より軟質、粒子が細かい。
3. 灰褐色土: ロームを含む。

標高 684.40m
0 (1:80) 2m



0 (1:4) 10cm

第35図 M3・4・6号溝址

第4節 環濠

1) M5号溝址 (第36~44図、図版9~13・16・17)

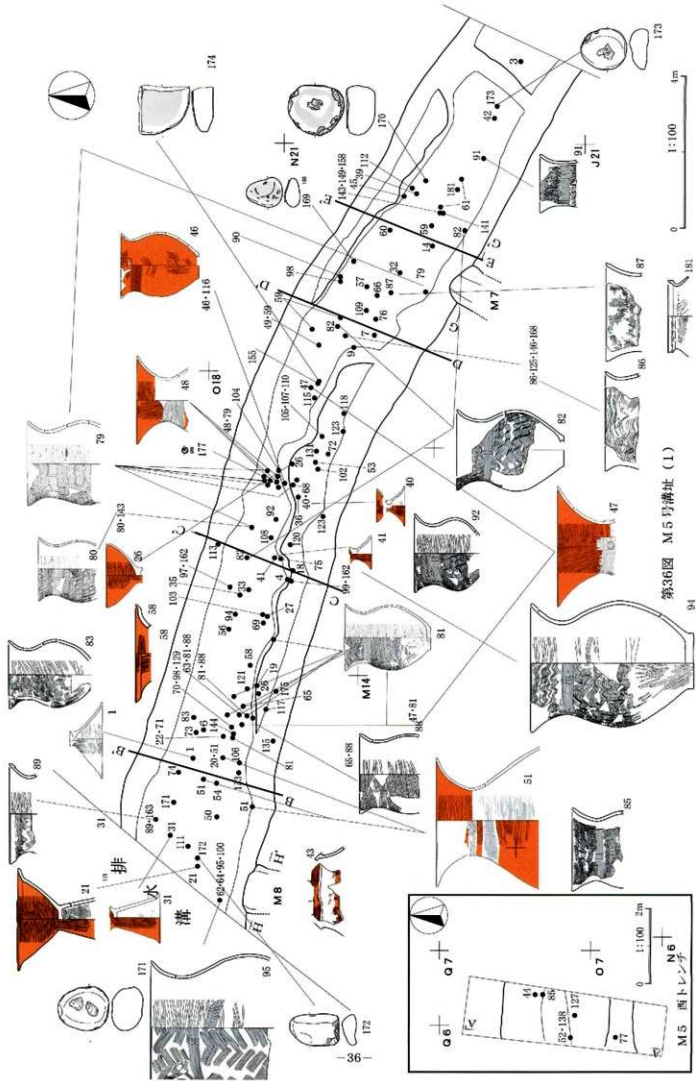
O6~A32グリッドから検出され、中央は連続、西と東はトレンチを設定し調査している。西トレンチはトレンチ幅144cm、溝幅356cm、深さ71cmを測る。中央は連続23.80mを調査し、溝幅338~396cm、深さ60~78cmを測る。東トレンチはトレンチ幅2m、溝幅304cm、深さ45cmを測る。

断面形は台形を呈し、北側が急傾斜に落ち、南側(内側)は緩やかになっている。環濠の下幅は、西のB地点で230cm、E地点で220cm、東に離れたF地点で、252cmを測る。溝底のレベルは西と東でレベル差がなく、ほぼ同じ標高であり溝底の高低差はない。溝幅は検出面にもよるので一概にはいえないが西に上幅は広いようである。

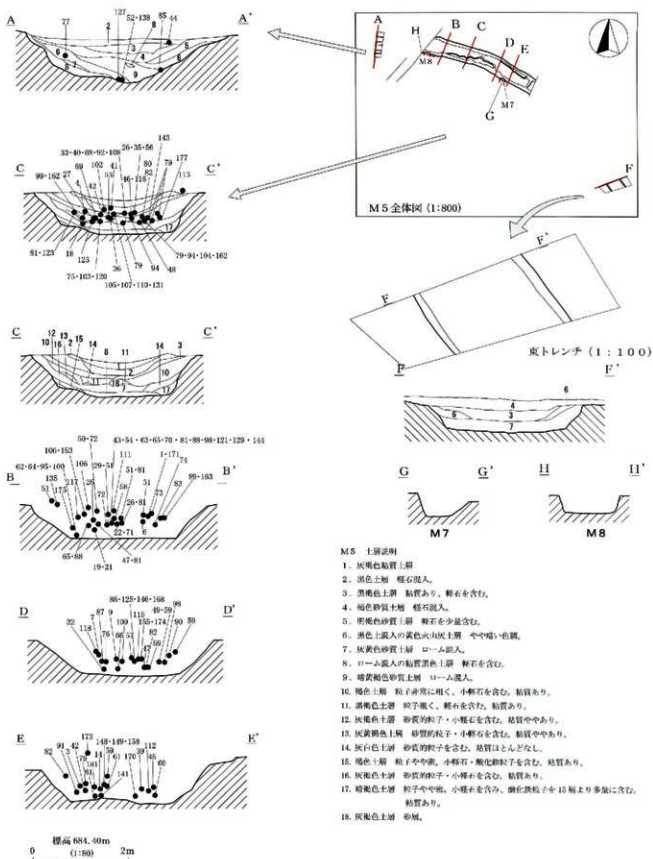
覆土は、底から砂質ローム層、黒褐色土層、褐色土層と互層になって堆積している。溝の覆土からは多数の弥生土器・石器が出土した。遺物はドットからみると、南側(内側)に分布が偏っている。掘底の7・8層はロームの堆積層で遺物はほとんど含まず、遺物包含層は3層の黒褐色土と10~12層の褐色土層、黒褐色土層、灰褐色土層中である。検出面から40~60cmくらいの高さに集中している。

出土遺物は弥生土器と石器があり、弥生土器は蓋・鉢・杯・高杯・深鉢・壺・甕があり、石器は敲打石がある。

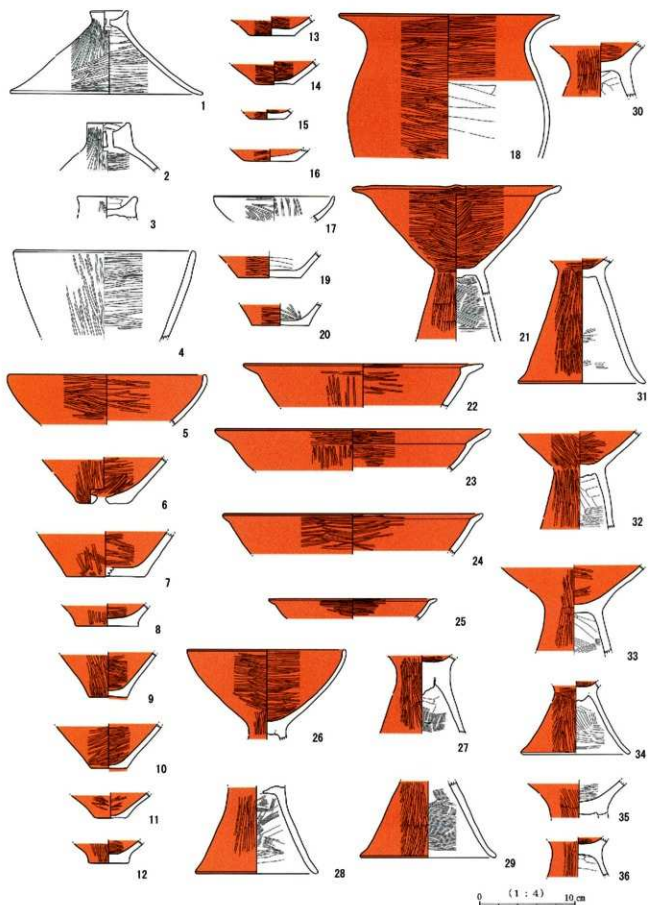
弥生土器は弥生後期前葉の吉田式とみられるものに、24の高杯、53・54の壺、84小甕などがある。24の高杯端部が内稜をもって短く外傾する。53の壺は頸部文様が塗描きの矢羽根文で、下に鋸歯文を施す。無彩色で、胴肩部はなで形を呈している。甕は84の小型甕があり、口縁と胴肩部の形は直線的



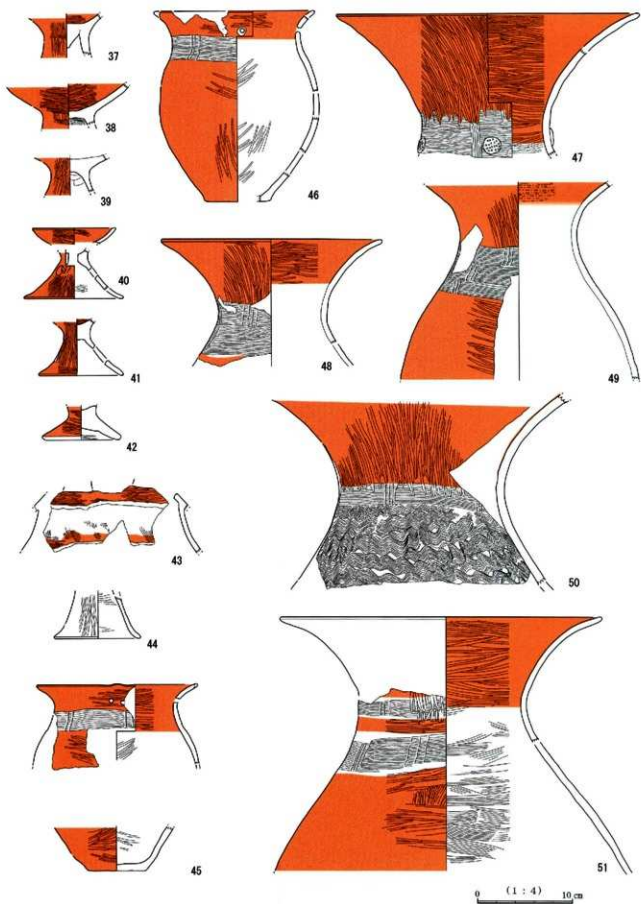
第36図 M5 貝塚址 (1)



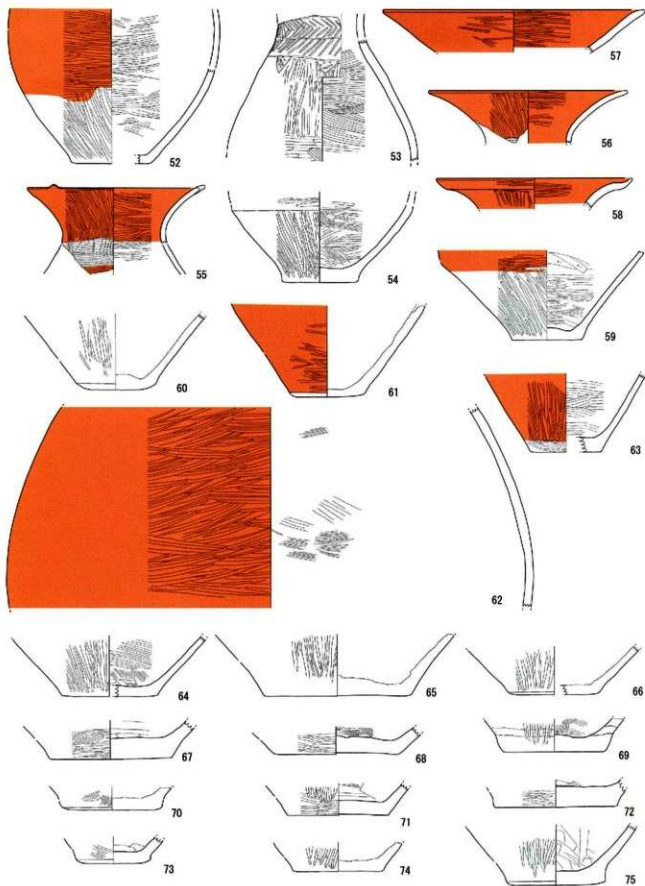
第37図 M5号溝址(2)



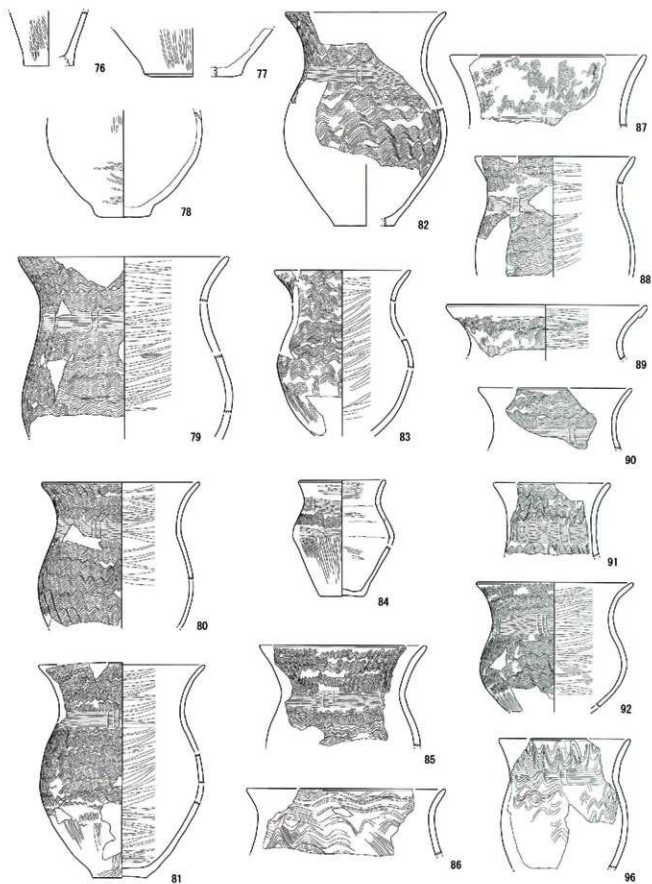
第38图 M5号溝址(3)



第39图 M5号沟址(4)

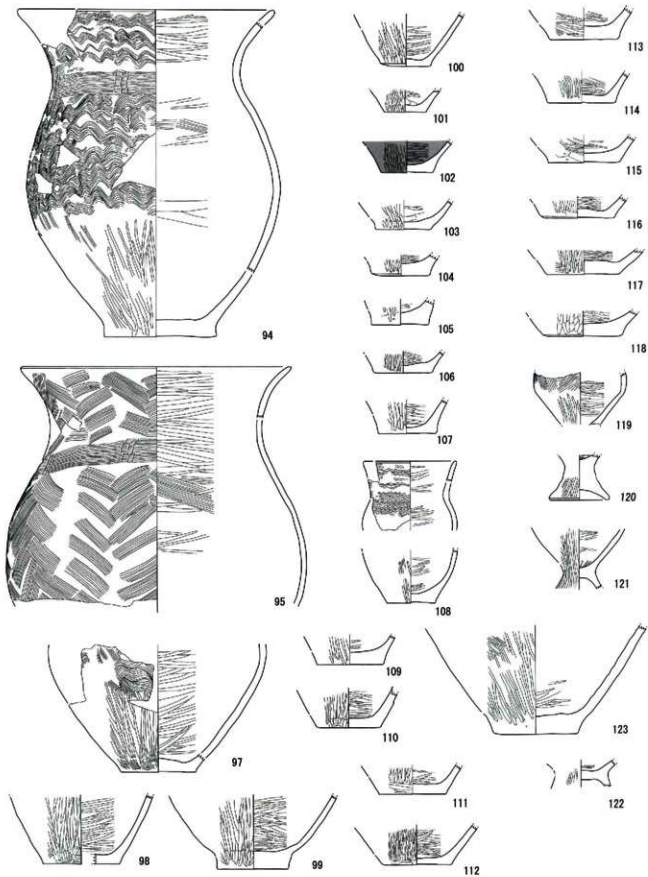


第40图 M5号沟址(5)

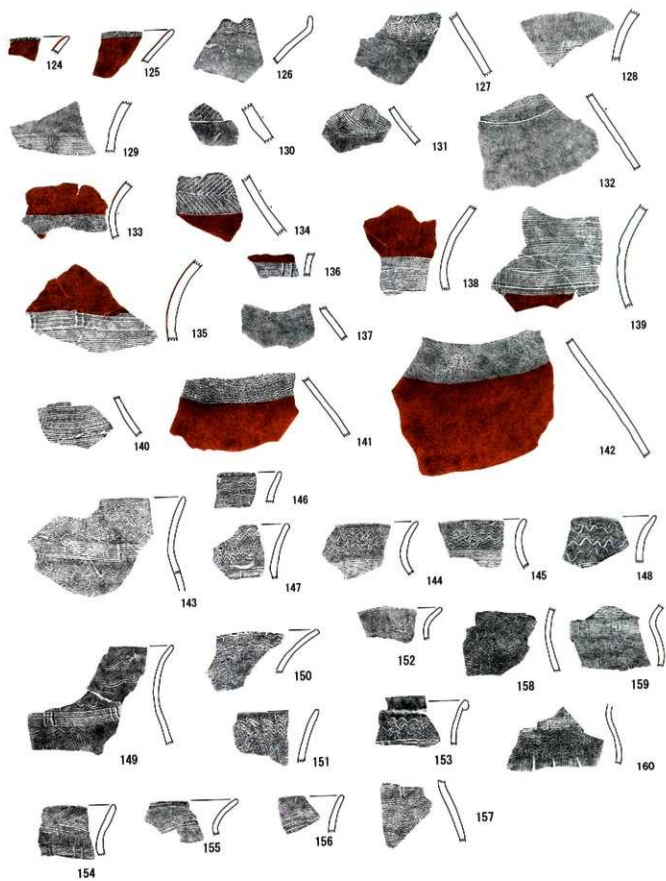


第41图 M5号沟址(6)

0 (1:4) 10cm

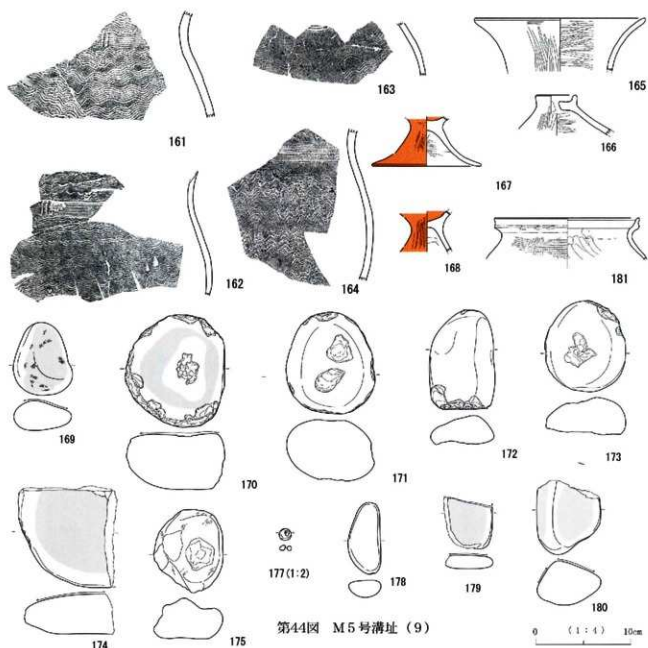


第42图 M5号沟址(7)



第43图 M5号沟址(8)

0 (1:4) 10 cm



第44図 M5号溝址(9)

0 (1:4) 10cm

である。文様は頸部に一連止めの櫛描簾状文、その下に一条の細かい櫛描波状文を施す。拓本の154・157の甕も同期とみられる。今回調査した住居址の時代は弥生後期前葉の後半にあたるが、これらは弥生中期末から弥生後期初頃と言えるもので、住居址の炉に使用したものと近い土器である。

次の弥生後期箱清水期前半とみられる土器は壺では47・49の壺である。47の口縁は外反するが、それほど強くない。頸部文様は櫛描T字文で、円形の貼付文がある。口縁内外赤色塗彩される。

82の甕は口縁が長く外反し、外傾はそれほどせずに、胴最大径と口径が同じである。波状文の複雑な重なりはわずかである。91の甕は口縁がほとんど外傾せず直立気味である。85・87なども箱清水期前半に入れられよう。

箱清水式土器後半では48の壺は口縁が短く強く外反し、頸部には櫛描簾状文と横線文が施される。51の壺は口縁の長さが短く、外反は強くなり端部は内湾気味にである。頸部は櫛描簾状文、赤色塗彩帯、櫛描簾状文とで文様を構成している。装飾性の高い文様である。甕では94・95の甕があり、口縁の外反は強く、胴部が球形を呈する。89の折返し口縁の甕がある。折り返し口縁の甕の波状文と簾縄文は途切れている。

弥生時代後期終末から古墳初頭では58の壺は口縁が強く外反し端部は内に屈曲して受け口状になっている。赤色塗彩されるが塗り込める弥生後期タイプの赤色塗彩ではなく、ハケ塗りの塗彩である。甕では86の口縁は短く、上部のみが外反している。施文される波状文は不規則で浅い。小型品の40の器台がある。浅く丸味のある杯部と長い裾を引く脚である。赤色塗彩されるがやはり塗り込めではない。

181のS字甕は調査区中央区の東端の深さは中程から出土している。薄い甕で口縁が屈曲して短く外反している。胴部外面には縦のハケ目、頭より下に横目のハケ目が施される。口縁の屈曲部に刺突文が巡っている。内面は口縁横ナデ、胴部ナデである。口縁内面に刷の圧痕が残る。

これらのようにM5号溝址には弥生時代後期から弥生時代後期末の土器がみられ、中位層から弥生後期末の遺物がみられることからこの溝の廃絶年代をその頃に求められる。

また甕の底部がたくさんみられたので、底部が完存するものの底径を測ったところ4.4~6.2cmに8個体、6.8~8.0cmに12個体である。94は11.8cmでもっとも大きい。壺は7.4cm前後に4個、9.4~10.5cmに8個、13.0cmに3個、最大は15.5cmである。底部だけで壺か甕かは混同する個体もあろうが、大まかには、甕の底径が小さく、壺の底径が大きいことがわかる。

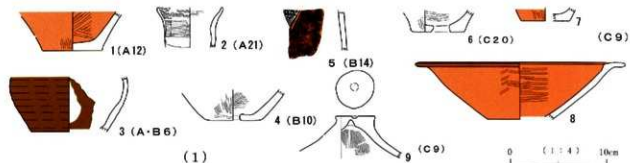
本溝は弥生時代後期の土器を含み、最終は弥生時代後期末の土器がみられた。溝は弥生時代後期後葉の段階の土器が遺物包含層の下層から出土していることから、この弥生時代後期後葉の段階に作られた環濠であるとされよう。なお弥生終末の土器群はその上層にみられ、この頃を最後に環濠は埋められたようである。

第5節 グリッド・表採 (第45~47図、図版14・17)

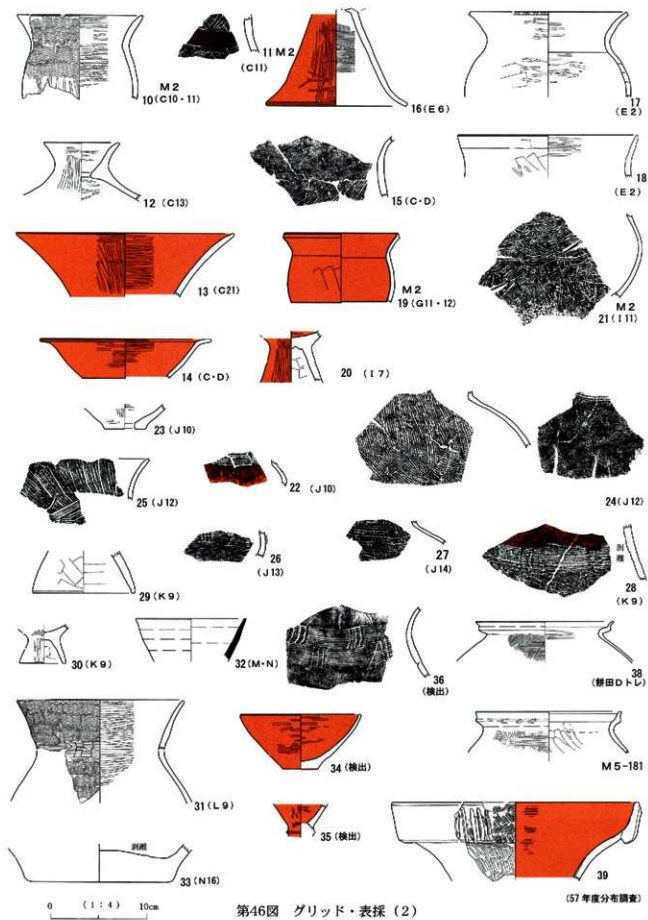
7の壺、8の高杯、9の高杯はM1号溝址またはY5・Y6号住居址、また12の壺はY1号住居址、18はY2号住居址、16の高杯脚は、Y7号住居址と同じグリッドにあり、関連が窺える。

17・18の土器は赤色塗彩されず、17は口唇部に刻みめをのこすが、口縁に文様が施文されていないことから土師器とした。Y5-6の壺と器形が近く古墳前期の土器であろうか。

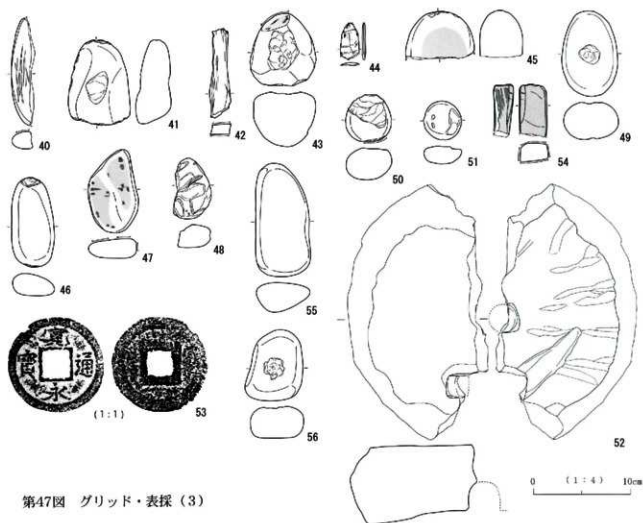
39は57年度の分布調査の際に、採集されたもので、南関東系の装飾壺である。口縁部形はL字形を呈し、口縁の直立部に粘土を貼り肥厚させている。口唇部に縄文、口縁の直立部下端は面取りしてヘラ(棒状)により刻みをいれている。直立部は縄文を4段、綾杉状に横位にまわし、断面三角形の粘土紐を縦に6本(残存値)貼っている。大きく外反する口縁下部は赤色塗彩の痕跡が残っている。内面口縁部は赤色塗彩される。弥生後期とみられる。38は南に隣接する餅田遺跡から出土した「S字甕」であり、砂粒を含み、灰白色を呈すことから、搬入品とみられる。M5-181が口縁に押し引き文があることからS字甕A類、38は口縁の文様はなく胴部球胴形を呈し、B類とされよう。弥生後期後葉と古墳初頭に該期がもとめられようか。



第45図 グリッド・表採 (1)



第46図 グリッド・表採 (2)



第47図 グリッド・表採 (3)

第IV章 総括

第1節 遺構

本調査では以下の遺構が検出された。

竪穴住居址 (Y)	12 棟
弥生時代後期	10 棟—Y1・Y2・Y3・Y5・Y6・Y7・Y8・Y9・Y11
弥生時代中期	1 棟—Y12
弥生後期か後期以前	1 棟—Y4・Y10
土坑 (D)	10 基
弥生時代後期	4 基—D1・D2・D3・D7
弥生時代後期か後期以降	3 基—D8・D9・D10
時期不明	3 基—D4・D5・D6
溝跡 (M)	8 本
弥生時代後期	6 本—M1・M2・M3・M4・M5 (環濠)・M6
時期不明	2 本—M7・M8
単独ピット	5 個

(1) 竪穴住居址

12棟の内10棟が弥生後期の住居址である。出土遺物と重複関係からは

	弥生後期前半古 (吉田式期古)	弥生後期前半新 (吉田式期新)	弥生後期後半古 (箱清水式期古)	弥生後期後半新 (箱清水式期新)
(Y10)	→Y9	→	Y11→	Y8
		Y6→	Y7→	Y5
(Y4)	→Y3	→	→	Y2
				Y1

土器の分類からはこのような図式になる。

弥生時代後期前半新 (吉田式期新)

弥生後期前半の住居址はY6号住居址が形態規模がつかめている。長軸長642cm短軸長472cmを測る隅丸長方形を呈す。長軸方向がほぼ北を指している。Y3・Y9号住居址の全容がわからないが方位は西にふれている。

主柱穴4本で、炉は北側の主柱穴間にあり、やや北に寄っている。炉底には壺胴部の上半の半分近くを置いて、内灣する器形を炉底として利用している。その下には杯と他の壺胴部片入っている。炉の北に棟持ち柱を持ち、壁際には壁柱穴を設けている。南側にある貯蔵穴・出入り口のピットは検出できていないようである。

この期の住居址では西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのH41号住居址が同規模・同形態で、4本柱の北の柱穴間に炉を持っている。やはり貯蔵穴はない。西一本柳遺跡ⅤのH33号住居址もほぼ同規模である。両遺跡には長軸が899cm、短軸が640cmを測る住居址が最大規模とみられる。いずれも隅丸長方形である。北西の久保遺跡に後期前半の住居址新・古があり、北西の久保遺跡Y70 (570×565cm)・Y77号住居址 (401×402cm) は方形を呈し、北の柱穴間に炉をもっている。これらはこの時期でも古い土器様相をもち、方形の住居址である。本報告の西一里塚遺跡Ⅰの後期前半の段階では方形の住居址は姿を消す可能性がある。弥生時代後期後半に設けられる南隅にある貯蔵穴はみられない。

弥生時代後期後半古 (箱清水式期古)

後期後半古の住居址は2棟あり、Y11とY7号住居址であるが、近接しているので、同時期ではない。

Y11号住居址はY6号住居址に近い時期である。炉底に使用した壺は弥生時代後期前半新の様相を

もっている。Y11号住居址は長軸536cm、短軸436cm、主柱は西に振れている。形態は隅丸長方形である。長軸が前代より長くなっている。南は検出されていないが4本柱で北側の柱穴間に炉を持っている。炉の北に棟持ち柱を持つ。Y7号住居址は長軸577cm、短軸480cmを測り、主柱穴は4本であろう。北側の柱穴間に炉を持っている。

弥生時代後期後半新（箱清水式期新）

住居址の形態が2つになる。前代の隅丸長方形と同じY5号住居址、方形に近いY2・Y8・Y1号住居址である。4本柱穴であることは変わりなく炉も柱穴間に設けられている。（Y1・Y2の炉は京複遺構に被せられているとみる）この時期では棟持ち柱は見られなくなっている。北一本柳遺跡にみられた10mを越える住居址は今回は見られなかった。方形の住居址Y1・Y2・Y8号住居址の長軸/短軸の比率は共通して約1.1を測り、炉を枠つ側に長軸をもっている。北一本柳遺跡Ⅲの方形住居址の長軸/短軸の比率は1.1を下まわっており、より方形化傾向がみられる。

北一本柳遺跡Ⅲの隅丸長方形の住居址H51号住居址は長軸/短軸の比率は1.82という細長い形になっている。同遺跡のH30号住居址の床下住居址は1.18、拡張した床土の住居址は1.50を測り、より長くしている。

これらより本遺跡のこの期は北一本柳遺跡ⅢのH51・H30号住居址を弥生時代後期の最終期として比較したところでは少し古めの数値である。

(2) 土坑

土坑10基の内、ほぼ時代の推測が可能なものは7基である。重複関係は、Y1（箱清水式期新）→D1、Y7（箱清水式期古）→D2、Y2（箱清水式期新）→D8・D9・D10である。単独のD3・D7からは弥生後期後半の土器が出土する。これらの土坑D1・D3は隅丸長方形である。D2は角ばった円形、D7は楕円形を呈す。D9・D10は遺物からはわからないので、弥生時代後期後半以降ということになる。

D1は上層に炭化材と骨片を出土する。弥生時代後期の赤色塗彩された杯は、底面より40cmほど上に出土する。骨は細片である。

D2は底面に炭化物層があり、弥生時代後期の赤色塗彩の杯や蓋が炭化物層の上面から出土する。

D3は長軸236cm、短軸221cmの隅丸長方形で、南東から南に小テラスが付いている。弥生後期の蒸・高杯は16cmほど浮いたところから出土している。

D7は長軸199cm、短軸165cmの楕円形を呈す。底面に炭化物層がみられ、弥生時代後期の外反の強い波状文の甕や壺片が多数、細骨片が出土している。

D8は弥生土器の甕片と細骨片が出土する。

D9の底面にはワラ状炭化物が出土している。

これらの土坑は、多くの弥生土器を含み、炭化物層がみられるなどの共通点がある。また深さをもっている。中部横断自動車道建設に先立って発掘調査された西一里塚遺跡群の④-4地区で検出された土坑には、円形同溝墓・方形同溝墓の主体部の土坑、また木棺墓・土器棺墓の土坑が検出されている。SM04の主体部は200×78cmの長方形を呈し、底面に小口のある木棺墓である。本遺跡の土坑は木棺墓のように細長いものではなく、小口も無い。炭化物層のみられる土坑例は近辺にはみられない。

おなじく中部横断自動車道の馬防畑遺跡群の土坑SK5079は長さ183cm、幅139cm、深さ20cmを測る。土坑はテラスを持ち、20cmほど底から上に土器が多くみられ、核桃、植物繊維、細骨片などの出土から土坑墓としている。

西一里塚遺跡Ⅰの土坑も馬防畑遺跡群の形態に近く、浮いた高さに多器種の土器を出土するなど共通点がみられる。

(3) 溝址

本遺跡からは8本の溝が検出された。M5は農溝なので後述する。ここでは5本についてみる。

Y6（弥生時代後期前半新）・Y5（弥生時代後期後半新）→M1

Y1 (弥生時代後期後半) → M3・M4・M6

M2はグリッド10・11付近を南北に伸びている。弥生時代後期の壺・壺・深鉢が同じグリッドで検出されている。

M1はY6・Y5を切っているので、それ以降ということになる。底のレベルは北から南に12cmほど低くなるがそれほどの高低差はない。弥生時代後期前半の壺があるが、Y6の遺物が流々と考えられる。Y5も切っているので、弥生後期後半以降またはそれに近い時期であろう。

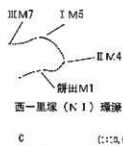
M3・M4・M6は細い溝であるがY1を切っているので、弥生後期後半または近い時期である。これらの溝に特別な性格見受けられない。

(4) 環濠 (M5号溝址)

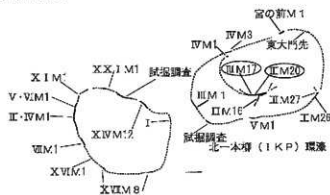
M5は弧状に調査区北側にあり、総延長は64.5mを測る。最大で溝幅は4m、深さ91cmを測る。断面形は逆台形で、南側の傾斜が緩く、北側は急傾斜である。このような溝は西一里塚遺跡の他の地点からも同規模の弥生時代後期の土器を含む溝が検出されている。

遺跡名	規模 (最大値)			溝底深高 (cm)
	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	
NI III M7	3.0	2.0	65	682.65
NI I M5 西トレンチ	3.56	1.8	71	683.16
NI I M5 B地点	3.68	2.64	72	683.24
NI I M5 東トレンチ	3.28	2.56	56	683.20
NI II M4	2.0	1.2	48	681.76

第2表 西一里塚遺跡環濠規模表



第48図 湯川右岸の弥生時代後期後半の環濠



西一本塚 (NP) 環濠

湯川右岸の弥生時代後期後半とみられる環濠について、本遺跡の西一里塚遺跡と西一本柳遺跡・北一本柳遺跡の3遺跡において、その規模や形態が明らかになってきている。

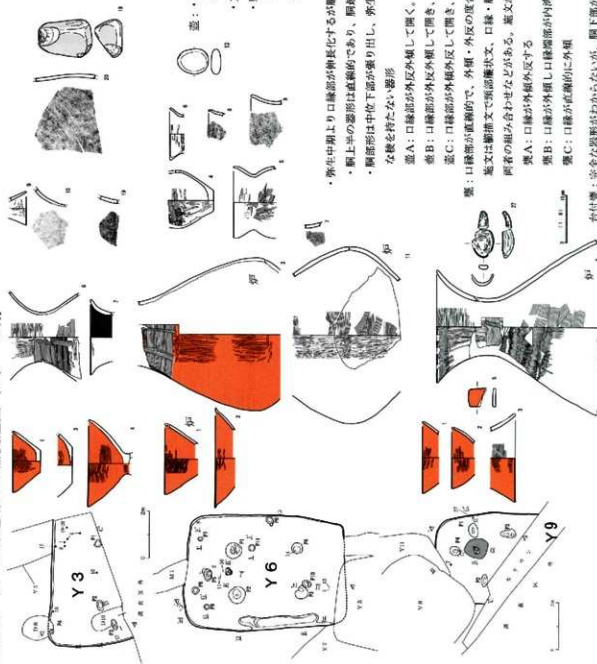
北一本柳遺跡をみるとあくまで推定の域を出ないが、大きな環濠の中に小区画がある。それらは M20(古) → M16 → M17(新)

と3時期に環濠が重複関係をもつことから、後期後半の中でも3時期の形態の環濠が集落を囲んでいるようである。

西一里塚遺跡では中部横断自動車道の環濠域の西一里塚遺跡群①-2 調査地区北端のSD01などが境界の溝と報告している。墓域を含めた西一里塚遺跡の外側の環濠にあたりとみられ、M5の環濠の約100mほど外側で弧状に連なっている。西一里塚遺跡も二重の環濠が推測される。(第5図参照)

西一里塚遺跡	長径 162m	短径 115m	(長径は判明範囲の数値)
西一本柳遺跡	長径 270m	短径 210m	
北一本柳遺跡	長径 360m	短径 200m	

第49図 西一里塚遺跡 I 土器変遷図 (1) I 期



西一里塚遺跡 I 期 (1999 小山福年弥生前期Ⅱ期)

杯：・内外面赤色塗彩

・口縁部は直線的で、大きく外に開かない

・底辺径と口縁部径の比率で底径が大きい

高杯：・内外面赤色塗彩

・口縁部は直線的に外傾して開き、唇が短い

頸付き—口縁の内径が不明なものがある

唇なし—口縁部内湾するが直線的である

壺：・口縁部内外・胴上部が赤色塗彩されるが、赤色塗彩さ

れないもの割合が多い

・文様は頸部に集中し、口縁端部の外面に施文されるものもある

・頸部文様の矢羽根文のみへラ幅であるが壺は壺底文が

主体であるへラ指模様・その間に衝指波状文、衝指丁字文、

衝指隆状文などの組み合わせあり

・弥生中期より口縁部が伸長化するが胴の最大径を上半から下へ

・胴上半の膨形は直線的であり、胴最大径は胴の中部より下にあり、外縁が明確ではない

・胴部形は中位下部が張り出し、弥生中期の壺部形を呈するものが数ある 胴下部の外縁に明確

な縁を持たない膨形

壺A：口縁部が外反外傾して開く。(Y9-4)

壺B：口縁部が外反外傾して開き、頸部が内湾して縁やかな受け口状を呈す

壺C：口縁部が外反外傾して開き、口縁端部に外縁をもつてし字状の口縁形呈す

壺：口縁部が直線的で、外傾・外反の度合いが低い、長さも短い

施文は衝指波状文、口縁・胴上部は衝指波状文または衝指形走文、

両者の組み合わせなどがある。施文が整然としており、波状文は直横や斜定がなく水平である。

壺A：口縁が外傾外反する

壺B：口縁が外傾し口縁部部が内湾する (Y6-5・6)

壺C：口縁が直線的に外傾

台付壺：完全な壺形がわからないが、胴下部が急激に寸ばまり、頸が付く 口縁は壺A・B・Cとありそうである。

Y6の1の杯、Y6の3・11の壺、Y9の4の壺は炉底として使用。

その他 石製品をとまらすが、巖打石または磨石がみられる 磨製石斧は用いられ砥石として使用

西一里塚遺跡 I Ⅱ期 (1998) 小山福年 弥生後葉Ⅲ

杯：赤色塗彩される。

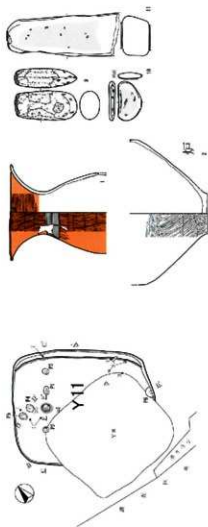
杯A：口縁に内湾傾向が強まり、底径の割合が小さくなるため、下部が外反気味に開く

高杯：赤色塗彩される

杯B：肩付き高杯の踵の内縁が明瞭化し、踵が長くなる

前段階の内縁が明瞭でないものも残る 大型化

杯C：杯下部に外縁をもって屈曲し頸部が外反する



壺：口縁の外反が強くなり、伸長してくる。
壺A：口縁と頸最大径がほぼ同じになる、
胴下部の外縁が明瞭で直線的に窄まるものと
明瞭ではなく下部が膨らみを伴つ二者がある
壺B：口縁の受け口状の内湾が無くなり、
外反器形となる
壺C：口縁のL字が明瞭化し、
L字の口縁の直立部が長くなる

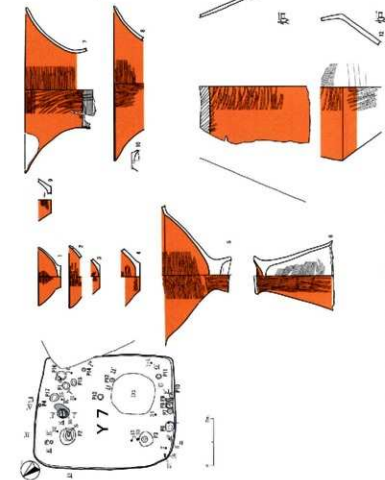


壺：口縁の外反が強くなり、口縁径と頸最大径がほぼ近い

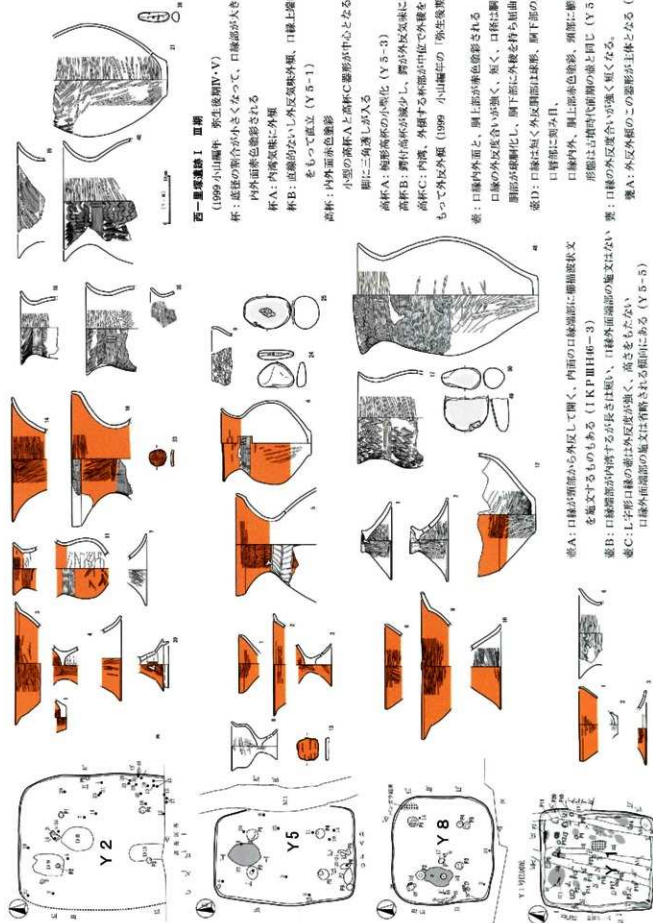
壺A：外反外傾し、口縁部が伸長化

壺B：前代ほど口縁部上半全体の内湾ではなく
頸部がわずかに内湾するのみになる

壺C：口縁が直線的に外傾するものも無くなる



第50図 西一里塚遺跡 I 土器変遷図 (2) Ⅱ期



第51図 西一里塚遺跡 I 土器変遷図 (3) III期

西一里塚遺跡 I III期

(1999 小山燧午 弥生後期IV・V)

杯：直径の割合が小さくなって、口縁部が大きくなり外縁する内外面彩色塗彩される

杯A：内面彩色塗彩

杯B：直線的ないし外反気味の外縁、口縁上端部で外縁をもって直立 (Y 5-1)

高杯：内外面彩色塗彩

小型の高杯Aと高杯Cの器形が中心となる
脚に三角溝が入る

高杯A：輪形高杯の小高化 (Y 5-3)

高杯B：頸付高杯が減少し、頸が外反気味になる

高杯C：内湾、外縁する杯部が中位で外縁をもつて外反外傾 (1999 小山燧午の「弥生後期高杯」)

意：口縁内外面と、胴上部が彩色塗彩される

口縁の外反度合いが強く、短く、口縁は胴径より小さい
胴部が直線的化し、胴下部に外縁を持ち屈曲する器形が顕著

意D：口縁は短く外反胴部は球形、胴下部の屈曲はない、
口唇部に刻み目、

口縁内外、胴上部彩色塗彩、胴部は断縁文を施文

形類は古墳時代前期の態と同じ (Y 5-6)

意：口縁の外反度合いが強く短くなる。

意A：外反外傾のこの器形が主体となる (Y 2-40)

意A：口縁が頸部から外反して開く、内面の口縁部部に断縁波状文を施文するものもある (IKP III 46-3)

意B：口縁部が内湾するが長さは短い、口縁外面端部の施文はない

意C：L字形口縁の態は外反度が強く、高さをとらない、
口縁外面端部の施文は省略される傾向にある (Y 5-5)

北一本柳遺跡では内周する環濠が時期差をもってとらえられている。西一里塚遺跡と西一本柳遺跡とでは80mほど離れている。中間の舌状丘陵上にある北西の久保遺跡は、弥生時代後期後半古までを中心とする遺跡であり、この環濠は弥生時代後期後半新にいたって集落を囲む必要性が生じ、湯川右岸に展開している。

第2節 遺物

西一里塚遺跡Ⅰからは土器、土製品、石製品、古銭、炭化物、骨片、ベンガラが出土している。土器は弥生式土器が大半を占め、縄文式土器はY8号住居址で2点報告。土製品はスプーンと土製円板がある。石製品は磨り面と敷き痕をもつ敲打石である。Y11号住居址の磨製石斧も凹をもつ敲打石に転用されている。

砥石、磨製石鏃の未製品が2点ほどある。

炭化物・骨片などの自然科学分析については機会を得なかったので、他の折にデーターを加えたい。ここでは弥生後期の土器の検討をして、本遺跡の時期変遷について考察してみることにする。

弥生後期の土器変遷については1999 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会を基準として各者が報告をしているのが現状である。佐久地域は小山編年が示されておりこの編年をふまえて本遺跡の弥生時代後期の土器を分類してみる。

西一里塚遺跡Ⅰ Ⅰ期(弥生時代後期前半・1999 小山編年弥生後期Ⅱ期)

本遺跡-NⅠY3・Y9・Y6

炉に使用されている土器は弥生後期前半の吉田式(1999 小山編年弥生後期Ⅰ)の様相をもっている。

他の土器は炉の土器より新しい様相がある。

他の遺跡-北西の久保(KN)Y64・66・104・123 他9棟

西一本柳(ⅠNPⅢ・Ⅳ)H117

周防畑遺跡群SB17・SB21 他にあり

西一里塚遺跡Ⅰ Ⅱ期(弥生時代後期後半古・1999 小山編年 弥生後期Ⅲ)

本遺跡-Y11・Y7

他遺跡-北西の久保(KN)Y100

前段階同様で、炉に使用された土器に古相を持つ 箱清水式期古にあたる

西一里塚遺跡Ⅰ Ⅲ期(弥生時代後期後半新・1999 小山編年 弥生後期Ⅳ・Ⅴ)

本遺跡-Y2・Y5・Y8・Y1

他遺跡-北一本柳(ⅠKPⅢ)H35、西一本柳(ⅠNPⅣ)H1・H9

壺や甕の胴部上半形が球形に近く張る

甕の櫛描波状文の施文が雑で浅くなり、不規則に重なり、ななめに施文

東海系のS字甕や壺Dなど古墳前期の土器の器形の壺を伴う

これらより本遺跡の弥生時代後期は弥生時代後期吉田式期新を炉の土器として使用する箱清水式期古に集落が形成され、そして箱清水式期新に環濠が掘られたようである。

引用参考文献

西一本柳遺跡関係

- 1990 佐久埋蔵文化財調査センター『一本柳遺跡群 東大門』第22集
1995 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡Ⅱ』第37集
1999 佐久市教育委員会『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』第73集
2001 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡群Ⅴ・Ⅵ』第91集
2006 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅢ』第139集
2008 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅥ』第160集
2010 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅣ』第175集
2011 佐久市教育委員会『西一本柳遺跡ⅩⅦ』第190集

北一本柳遺跡関係

- 2006 佐久市教育委員会『宮の前遺跡』第140集
2006 佐久市教育委員会『年報14(北一本柳遺跡Ⅱ)』(P39)
2008 佐久市教育委員会『北一本柳遺跡Ⅳ』第158集
2009 佐久市教育委員会『年報17(北一本柳遺跡Ⅳ)』
2010 佐久市教育委員会『北一本柳遺跡Ⅲ』第175集
2012 佐久市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書2010(西一本柳遺跡ⅩⅨ)』第196集 (P71 M1)
2014 佐久市教育委員会『東一本柳遺跡Ⅱ』第218集 (P25 M2)

西一里塚遺跡関係

- 1973 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡発掘調査概報』-弥生後期環壕集落-
1973 佐久市教育委員会『岩村田餅田』-佐久市岩村田餅田緊急発掘概報-
2009 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡Ⅲ』第165集 (P43~)
2011 佐久市教育委員会『西一里塚遺跡Ⅱ』第188集

中部横断自動車道建設関係

- 2012 長野県埋蔵文化財センター『濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』
2014 長野県埋蔵文化財センター『周防畑遺跡群』
2014 長野県埋蔵文化財センター『森平 寄せ塚遺跡群』

その他

- 1999 長野県考古学会『長野県弥生土器集成図録』・99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』

第3表 西・垣塚遺跡Ⅱ検出遺構一覧表

竪穴住居址

() は推定・() 残存値

遺構名	検出位置	時代	形状	規模 (縦×横×深)			方位	壁	柱穴	備考	
				縦	横	深					
Y1	K13	弥生後期	方形	472	432	4~13	20.39	N-8°-W	主柱4、壁柱3 貯穴1、柱13	D1・K3・4・6に切られる。	
Y2	C21	"	隅丸方形	(609)	(580)	6~20	-	N-0°	-	南側遺構区外 D8-9-10に切られ、Y3-4を切る。	
Y3	A22	"	"	(308)	(564)	5~16	-	N-21°-E	-	主柱2、壁柱1 壁柱1	南東・東側遺構区外 Y2、D8・10に切られる。
Y4	D21	"	"	(48)	(306)	-	-	N-9°-W	-	-	Y2に切られる。
Y5	D9	"	隅丸方形	582	400	4~20	-	N-9°-E	北	主柱4、出入口2 貯穴2	M1に切られ、Y6-7を切る。
Y6	G10	"	"	642	472	3~19	-	N-7°-E	#	主柱5、壁柱1 壁柱1、柱1	Y5・7、M1に切られる。
Y7	E7	"	"	577	480	0~8	-	N-40°-E	#	主柱3、壁柱1 出入口3、他9	Y5・6、D2に切られる。
Y8	C4	"	隅丸方形	412	456	9~16	18.79	N-89°-W	西	主柱5	Y8-11に切られ、Y10を切る。
Y9	C5	"	隅丸方形	(454)	376	5~9	-	N-45°-W	北	主柱8、壁柱1	Y8・9・11に切られる。
Y10	B6	"	-	(456)	402	1~10	-	N-33°-E	-	-	Y8-9に切られ、Y11を切る。
Y11	E2	"	隅丸方形	536	436	3~21	-	N-39°-W	北	主柱2、壁柱2 壁柱2、出入口1	Y8に切られ、Y9・10を切る。
Y12	G6	弥生中期	円形	長軸 242	短軸 217	1~11	-	長軸方位 N-53°-E	中央	柱穴7	-

土坑

遺構名	位置	平面形	長軸長	短軸長	深さ	方位	備考
D1	B14	隅丸長方形	163	118	40	N-89°-E	Y1を切る。
D2	D6	円形	184	176	38	N-48°-E	Y7を切る。
D3	J11	隅丸長方形	287	221	27	N-74°-W	-
D4	J10	円形	80	80	7	-	-
D5	G7	楕円形	75	69	28	N-6°-W	-
D6	K14	長楕円形	264	125	55	N-30°-W	-
D7	I13	楕円形	199	166	46	N-89°-W	-
D8	B21	"	138	106	39	N-7°-E	Y2を切る。
D9	C20	長方形	129	95	20	N-4°-E	#
D10	A20	隅丸長方形	(142)	71	51	N-4°-W	本遺構区外 Y2・3を切る。

単独ピット

遺構名	位置	規模 (長×短×深) (cm)	平面形	備考
P1	C13	28×21×17	楕円形	M6を切る。
P2	C13	23×18×10	#	M4を切る。
P3	D1	26×25×21	円形	-
P4	E2	26×24×37	円形	-
P5	E2	11×8×...	楕円形	-

溝址

遺構名	溝幅 (cm)	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
M1	A9~H9	(14.78)	78~106	26	Y5・6を切る。
M2	B11~I10	(12.2)	(80~100)	-	-
M3	C12~E13	(5.72)	36~58	30	Y1を切る。
M4	C13~E13	(5.76)	36~58	30	P2に切られ、Y1を切る。
M5	O6~A32	(64.5)	300~400	50~91	M7・8に切られる。
M5 西トレンチ	Q7	(1.44)	355	67~71	-
M5 中央	O11~L23	(23.8)	338~306	60~78	-
M5 東トレンチ	A31・32	(2.0)	328	38~58	-
M6	C13~F13	(8.04)	22~38	34	P1に切られ、Y1を切る。
M7	I19~L20	(6.7)	104	49	M5を切る。
M8	O12	(0.48)	132	35	#

第4表 西一巨峰遺跡 I 出土遺物一覽表

遺跡番号	種類	材質	部位	高さ (cm)		内 径	形状・模様	備考	出土位置
				口径 (cm)	厚さ (mm)				
Y1	1	粘土	口縁	(15.5)	(5.9)	ミガキ・赤色胎彩	ミガキ・赤色胎彩	回転文様	W
	2	粘土	底	—	3.9	ミガキ	ミガキ・並輪ミガキ	完全突刺	N I No.13
	3	粘土	口縁	(15.5)	(1.8)	口縁部模ナデ	ハケ目・ミガキ・赤色胎彩	完全突刺	E
	4	粘土	口縁	—	15.3	刺鏝	ミガキ一部突刺	完全突刺	N I No.26
	5	粘土	口縁	(10.4)	(2.1)	ミガキ	ミガキ	刺鏝	刺鏝・刺鏝・刺鏝
	6	粘土	口縁	(19.0)	(4.8)	刺鏝ミガキ	口縁部刺鏝胎彩文・刺鏝	完全突刺	N I No.4
	7	粘土	口縁	(8.9)	(7.5)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	N I No.15
	8	粘土	口縁	—	—	ミガキ・赤色胎彩	口縁部刺鏝胎彩文・ミガキ	刺鏝	W
	9	粘土	口縁	—	(9.0)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	N I No.6
	10	粘土	口縁	—	—	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	11	粘土	口縁	—	—	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	12	粘土	口縁	—	—	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
Y2	1	粘土	口縁	—	—	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	2	粘土	口縁	—	—	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	3	粘土	口縁	(26.0)	(4.7)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	4	粘土	口縁	(26.0)	(5.3)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	5	粘土	口縁	—	(5.5)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	6	粘土	口縁	—	(4.1)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	7	粘土	口縁	(15.2)	(3.9)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	8	粘土	口縁	(14.2)	(3.4)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	9	粘土	口縁	—	(2.7)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
	10	粘土	口縁	—	(6.8)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W
11	粘土	口縁	—	(1.2)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
12	粘土	口縁	(18.2)	(5.0)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
13	粘土	口縁	(18.4)	(5.4)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
14	粘土	口縁	(26.0)	(7.4)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
15	粘土	口縁	(35.4)	(3.5)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
16	粘土	口縁	(28.4)	(10.5)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
17	粘土	口縁	(19.6)	(7.8)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
18	粘土	口縁	(16.6)	(5.7)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
19	粘土	口縁	(24.5)	(3.2)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
20	土器	口縁	—	7.4	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
21	土器	口縁	—	(24.3)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	
22	粘土	口縁	(6.2)	(1.3)	刺鏝ミガキ	刺鏝胎彩ナデ・ミガキ・刺鏝	刺鏝	W	

※出土位置の「N I No」は遺跡全体の測り方による。

清濁	番号	種類	材質	重量 (oz)		内 置	成色 試験	備考	出土位置
				口径 (cm)	底径 (cm)				
Y2	23	弥生	土版	3.6	3.3	0.5	三万中・赤色塗彩 八ケ目・ミガキ 楕円形 口縁部ミガキ	杯底正 新直東須	N1 No.40
	24	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	25	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	26	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	27	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	28	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	29	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	30	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	31	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	32	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	33	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	34	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	35	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	36	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	37	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	38	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	39	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	40	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
Y3	1	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	2	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	3	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	4	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	5	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	6	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	7	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	8	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	9	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	10	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	11	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	12	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	13	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	14	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	15	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	16	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	17	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	18	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	19	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	
	20	弥生	土版	—	—	—	楕円形 口縁部ミガキ	新直東須	

測線 番号	標種	緯度	経度	位置		寸法		内容	形状・用途	備考	出土位置
				口徑(φ)	底徑(φ)	高さ(φ)	重量(φ)				
YG 1	11	赤生	瓦	—	—	—	—	ハケ目	ミガキ	凹底突刺	N・No.13 第1-2
	12	赤生	瓦	—	—	(10.2)	—	刺刺	ミガキ・赤色磁彩	凹底突刺	第3
Y7	13	石磨	磨石	6.5	5.4	2.1	207.53	ミガキ・赤色磁彩	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	N1 No.125
	1	赤生	杯	—	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	N1 No.152
	2	赤生	杯	—	—	(2.7)	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	3	赤生	杯	—	—	(4.6)	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	4	赤生	杯	—	—	5.8	(6.0)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	5	赤生	器台	口一	—	—	(14.7)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	6	赤生	碗	口一	—	—	(16.3)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	7	赤生	碗	口一	34.8	—	(14.5)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	8	赤生	碗	口一	32.5	—	(6.4)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
	9	赤生	碗	口一	—	(6.3)	(2.8)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—
10	赤生	碗	口一	—	3.3	(1.5)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
11	赤生	碗	口一	—	—	(22.5)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
12	赤生	甕	胴一	—	—	(2.9)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
13	赤生	甕	口一	13.3	—	(10.1)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
14	赤生	甕	口一	18.4	—	(6.8)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
15	赤生	甕	口一	—	—	(24.8)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
16	赤生	甕	口一	—	7.5	(2.8)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
17	赤生	甕	口一	—	(8.8)	(2.8)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
18	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
19	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
20	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
21	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
22	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
23	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
24	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
25	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
26	赤生	甕	口一	—	—	(7.1)	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
27	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
28	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
29	赤生	甕	口一	—	—	—	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
30	石磨	磨石	6.2	6.2	3.0	161.03	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
31	石磨	磨石	7.9	3.8	2.5	104.35	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
32	石磨	磨石	10.8	7.8	6.3	498.63	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
33	石磨	磨石	5.7	2.8	0.5	10.00	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
34	石磨	磨石	14.7	8.5	5.7	1137.77	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	
35	石磨	磨石	13.3	8.0	5.1	731.53	口縁	口縁・蓋部ミガキ・赤色磁彩	完全突刺	—	

通稱	番号	種類	材質	形状	法量 (cm)	内 面	外 面	成形・調整	備考	出土位置	
Y8	1	弥生	土	丸口縁 (5.6)	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全美型 天井仁堂丸1		
	2	弥生	土	丸口縁 (19.8)	—	八ツ目→ミガキ	八ツ目→ミガキ	八ツ目→ミガキ	完全美型 天井仁堂丸1	NI No.160	
	3	弥生	土	丸口縁 (23.0)	—	彫削面に腐り加工 彫削	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	完全美型 天井仁堂丸1		
	4	弥生	土	丸口縁 (23.2)	—	八ツ目→ミガキ	八ツ目→ミガキ	八ツ目→ミガキ	彫削面に腐り加工 彫削		
	5	弥生	土	丸口縁 (18.0)	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	彫削面に腐り加工 彫削		
	6	弥生	土	丸口縁 (18.0)	—	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	彫削面に腐り加工 彫削		
	7	弥生	土	丸口縁 (31.0)	—	杯縁ミガキ・赤色焼彩	杯縁ミガキ・赤色焼彩	杯縁ミガキ・赤色焼彩	彫削面に腐り加工 彫削		
	8	弥生	土	丸口縁 (31.0)	—	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	彫削面に腐り加工 彫削		
	9	弥生	土	丸口縁 (31.0)	—	八ツ目	八ツ目	八ツ目	彫削面に腐り加工 彫削		
	10	弥生	土	丸口縁 (18.4)	—	ミガキ	ミガキ・赤色焼彩	ミガキ・赤色焼彩	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.165
	11	弥生	土	丸口縁 (18.4)	—	八ツ目	八ツ目	八ツ目	彫削面に腐り加工 彫削		
	12	弥生	土	丸口縁 (4.0)	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	13	弥生	土	丸口縁 (4.8)	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	14	弥生	土	丸口縁 (8.9)	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.170
	15	弥生	土	丸口縁 (7.8)	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.154
	16	弥生	土	丸口縁 (19.5)	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.166
	17	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.164
	18	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	19	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	20	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	21	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	22	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	23	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	24	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	25	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	26	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	27	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	28	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	29	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	30	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	31	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	32	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	33	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	34	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		NI No.162
	35	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	36	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	37	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		
	38	弥生	土	丸口縁	—	丸口縁	丸口縁	丸口縁	彫削面に腐り加工 彫削		

遺跡 番号	層位	種類	部位	築 造 (m)		内 面	外 面		備考	出土位置	
				口径(幅)	底径(幅)		口縁部形状	口縁部形状			
Y8	39	灰生 甕	口縁	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文	粘土 新面突別			
	40	灰生 甕	口縁	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文	粘土 新面突別			
	41	灰生 甕	口縁	—	—	三片牛	栴檀形定文	粘土 新面突別			
	42	灰生 甕	口縁	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文→栴檀形定文	粘土 新面突別			
	43	灰生 甕	口縁	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文→栴檀形定文(3通止め)	粘土 新面突別			
	44	灰生 甕	胴	—	—	三片牛	栴檀形定文→胴上部薄捲状文	粘土 新面突別			
	45	灰生 甕	胴	—	—	三片牛	栴檀形定文	粘土 新面突別			
	46	縄文 甕	胴	—	—	三片牛	縹文・打滷	粘土 新面突別			
	47	縄文 甕	胴	—	—	三片牛	白帯→縹目→三片牛	粘土 新面突別			
	48	灰生 甕	先形	23.4	7.7	38.1	三片牛	口縁部薄捲状文(理込) 胴上部薄捲状文(理込)	粘土 新面突別	NIM165・157	
Y9	49	石器 磨石	(9.4)	(7.4)	(3.6)	磨盤形?	石制久根 正面に磨り面 縁辺に磨打痕	安山岩		NIM163	
	50	石器 磨石	8.2	4.5	4.3	21.0.83	正面に磨り面 上下端部に磨打痕	安山岩			
	1	灰生 杯	口縁 (15.0)	—	(3.5)	三片牛・赤色陰影	三片牛・赤色陰影	面取突別			
	2	灰生 杯	口縁 (12.8)	—	(4.3)	三片牛・赤色陰影	三片牛・赤色陰影	面取突別			
	3	灰生 甕	胴	—	(18.6)	(5.3)	八ケ目 縹形吹子	三片牛・赤色陰影	面取突別		
	4	灰生 甕	口縁	23.6	—	(34.0)	口縁部三片牛 胴部八ケ目	口縁上部薄捲状文・下部三片牛 縹形薄捲状文(2通止め) → 胴上部薄捲状文→胴部三片牛	既付替 面取突別		
	5	灰生 土瓶	口縁	3.4	3.7	0.6	八ケ目	口縁上部薄捲状文	完全突別		
	6	灰生 土瓶	底	—	(13.8)	(3.0)	絞縁	三片牛	完全突別		
	7	灰生 甕	底	—	1.5	(3.0)	絞縁	三片牛	完全突別	N・No.172	
	8	灰生 甕	底	—	4.9	(3.1)	三片牛	三片牛	完全突別		
9	灰生 甕	胴	—	—	—	八ケ目	口縁部薄捲状文 縹形三片牛・赤色陰影	粘土 新面突別			
10	灰生 甕	胴	—	—	—	八ケ目	縹形定文 三片牛・赤色陰影	粘土 新面突別			
11	灰生 甕	胴	—	—	—	八ケ目	縹形定文→三片牛・赤色陰影	粘土 新面突別			
12	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛・赤色陰影	口縁部薄捲状文	粘土 新面突別			
13	灰生 甕	胴	—	—	—	八ケ目	縹形薄捲状文	粘土 新面突別			
14	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛	縹文→ハコ縹縹縹文(3本)	中層 粘土 新面突別			
15	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文	粘土 新面突別			
16	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文	粘土 新面突別			
17	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文	粘土 新面突別			
18	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文	粘土 新面突別			
19	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文 口縁部薄捲状文	粘土 新面突別			
20	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文 胴上部薄捲状文 縹形薄捲状文	粘土 新面突別			
21	灰生 甕	口縁	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文 口唇部縹目	粘土 新面突別			
22	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文(4通止め) 胴上部薄捲状文	粘土 新面突別			
23	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文 胴下部三片牛	粘土 新面突別			
24	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛	縹形薄捲状文 胴下部三片牛	粘土 新面突別			
25	灰生 甕	胴	—	—	—	三片牛	口縁部薄捲状文 胴上部薄捲状文(縹方向)	中層 粘土 新面突別			

器種	番号	種類	部位	口径(φ)	高さ(φ)	容量(ℓ)	内径	成形・模様	備考	出之位置
Y9	26	弥生 土製 甕	肩	(1.00)	4.7	1.9	三ツガキ	産津波状文 唐胡彫文	中本 新山奥	N1No.101-203 3-4号
			口	—	—	—	—	—	—	
	Y10	弥生 土製 甕	肩	—	—	—	三ツガキ	三ツガキ・赤色彫	完全装束	N1No.177-178-179
			口	—	—	—	—	—	—	
	Y11	弥生 土製 甕	肩	20.0	(20.2)	—	三ツガキ	頸部・胴部・底面 二條・上・下三ツガキ・赤色彫	完全装束	N1No.168 C-D号
			口	8.3	(8.3)	—	三ツガキ	八ツ目→ミツガキ	完全装束	
			肩	1.5	(1.5)	—	三ツガキ	三ツガキ	完全装束	
			口	6.1	(6.5)	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
			肩	—	—	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
			口	—	—	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
肩			—	—	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束		
口			—	—	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束		
肩			—	—	—	三ツガキ	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束		
Y12	弥生 土製 甕	肩	13.1	6.3	4.1	545.45	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	N1No.176
		口	8.3	4.9	1.3	53.32	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
D1	弥生 土製 甕	肩	13.1	6.3	4.1	545.45	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	N1No.204 F-18号
		口	8.3	4.9	1.3	53.32	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
D2	弥生 土製 甕	肩	13.1	6.3	4.1	545.45	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	N1No.187
		口	8.3	4.9	1.3	53.32	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
D3	弥生 土製 甕	肩	13.1	6.3	4.1	545.45	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	N1No.181
		口	8.3	4.9	1.3	53.32	三ツガキ・赤色彫	頸部へラ横穴環状文 胴部へラ三ツガキ	完全装束	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	
		肩	—	—	—	—	—	—	—	
		口	—	—	—	—	—	—	—	

分類	番号	種類	題名	部位	重量 (g)		長さ (cm)		口深 (cm)	口径 (cm)		底径 (cm)	底高 (cm)	器種 (種)	器身 (寸)	内面	外面	成語・題名	備考	出土位置		
					口徑 (cm)	底径 (cm)	口深 (cm)	底高 (cm)														
D8	10	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	11	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	12	養生	甕	胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	13	養生	甕	胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	14	土師	甕	胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ→ミガキ?	—	—	—	—	—	—	—
	D6	1	養生	杯	口縁	—	(2.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—
		2	養生	甕	胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ハゲ目	—	—	—	—	—	—
		3	養生	甕	胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—
		4	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—
		1	養生	作	底	—	(5.4)	(2.1)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—
		2	養生	作	底	—	(9.6)	(3.8)	—	—	—	—	—	—	—	ハゲ目	—	—	—	—	—	—
		3	養生	甕	口・胴	12.9	—	(6.4)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—
		4	養生	甕	底	—	6.5	(2.6)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—
		5	養生	甕	底	—	(6.2)	(9.2)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—
6		養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—	
D7	1	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	2	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	3	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	4	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	5	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	6	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	7	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	8	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	9	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	10	養生	甕	底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
D8	1	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	2	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	3	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	4	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	5	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	6	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	7	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	8	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	9	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	10	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	11	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	12	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	13	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	14	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
D8	15	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	16	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	17	養生	甕	口・胴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	18	養生	甕	口・胴	—	(4.8)	(2.7)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	1	養生	甕	底	—	—	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	
	2	養生	甕	底	—	—	(4.6)	(3.2)	—	—	—	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—	
	3	養生	甕	口縁	(16.6)	—	(6.0)	—	—	—	—	—	—	—	口縁ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—	
	4	養生	甕	底	—	6.2	(6.3)	—	—	—	—	—	—	—	ハゲ目 素焼	—	—	—	—	—	—	
	5	養生	甕	口・底	24.3	9.8	(5.5)	—	—	—	—	—	—	—	口縁ミガキ 胴部ハゲ目	—	—	—	—	—	—	
	6	養生	甕	底	—	6.3	(4.3)	—	—	—	—	—	—	—	ハゲ目	—	—	—	—	—	—	
7	養生	甕	口縁	(22.2)	—	(5.7)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—		
8	養生	甕	底	—	6.3	(3.4)	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—		
9	養生	台付甕	口縁	—	6.9	(6.3)	—	—	—	—	—	—	—	口縁ミガキ 胴部ハゲ目	—	—	—	—	—	—		
10	養生	甕	口縁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ミガキ・赤色塗彩	—	—	—	—	—	—		

通稱	番号	産地	器種	形状	口径(径)	高さ(高)	口径(径)	重量(重)	内 置	成形・装飾	備考	出土位置
M1	11	弥生	羽鉢	胴	—	—	—	—	ミガキ	染朱線文→ミガキ・赤色塗彩	和木 匠百楽製	E-47
	12	弥生	甕	頸	—	—	—	—	刺籠	ハナ半刺籠文	和木 匠百楽製	
	13	石器	磨石	—	(4.4)	(2.4)	(1.7)	(17.0)	—	正面上部 磨りあり?	鹿野島	
	14	石器	磨石	—	15.3	7.1	7.0	882.1	—	正面上部 右側縁に凸部 彫用にもつか	チャート	N T No.206
	15	石器	磨石	—	9.5	5.0	8.5	240.17	刺籠	上下部に改訂標 正面に磨り面	砥岩	F-97?
M3	1	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	三ガキ	風部塗朱線文 口縁部ミガキ・赤色塗彩	和木 匠百楽製	
	2	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	三ガキ	風部塗朱線文→高部斜溝状文	和木 匠百楽製	
	3	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	三ガキ	風部塗朱線文	和木 匠百楽製	
M4	1	弥生	甕	口縁	—	—	—	(4.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	和木 匠百楽製	
	2	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	三ガキ・赤色塗彩	集部指線状文→口縁部ミガキ・赤色塗彩	和木 匠百楽製	
	3	弥生	甕	口縁	—	—	—	—	三ガキ	集部指線状文	和木 匠百楽製	
M5	1	弥生	甕	口縁	—	(20.3)	—	(8.7)	三ガキ	三ガキ	天竺に似し 完全黄銅	D 7土著 No.63
	2	弥生	甕	口縁	—	—	—	(5.1)	三ガキ	三ガキ	完全黄銅	No.112
	3	弥生	甕	口縁	—	—	—	(2.3)	三ガキ	三ガキ	完全黄銅	No.112
	4	弥生	甕	口縁	—	(19.2)	—	(9.4)	ハナナナ	三ガキ・一部黒色塗彩	完全黄銅	No.110
	5	弥生	甕	口縁	—	(21.0)	—	(5.3)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	— 87
	6	弥生	甕	口縁	—	—	—	(4.9)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.84
	7	弥生	甕	口縁	—	—	—	(8.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.2
	8	弥生	甕	口縁	—	—	—	(6.5)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.13
	9	弥生	甕	口縁	—	—	—	(4.8)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.13
	10	弥生	甕	口縁	—	—	—	(3.8)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.13
	11	弥生	甕	口縁	—	—	—	(3.4)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.13
	12	弥生	甕	口縁	—	—	—	(4.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	167
	13	弥生	甕	口縁	—	—	—	4.9	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	197
	14	弥生	甕	口縁	—	—	—	(4.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	227
	15	弥生	甕	口縁	—	—	—	3.7	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.169
	16	弥生	甕	口縁	—	—	—	(5.6)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.169
	17	弥生	甕	口縁	(7.28)	—	—	(2.6)	三ガキ	三ガキ	完全黄銅	167
	18	弥生	甕	口縁	—	(23.2)	—	(15.3)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.93
	19	弥生	甕	口縁	—	—	—	(2.8)	三ガキ	三ガキ	完全黄銅	No.93
	20	弥生	甕	口縁	—	—	—	(6.0)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.62
	21	弥生	甕	口縁	—	22.0	—	(18.6)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.180
	22	弥生	甕	口縁	—	(25.4)	—	(4.6)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.86
	23	弥生	甕	口縁	—	(29.2)	—	(4.5)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	— 57
	24	弥生	甕	口縁	—	(27.6)	—	(4.3)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	217
	25	弥生	甕	口縁	—	(22.4)	—	(3.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	207
	26	弥生	甕	口縁	—	—	—	(5.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.44, 65
	27	弥生	甕	口縁	—	15.8	—	(3.6)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.130
	28	弥生	甕	口縁	—	—	—	(3.2)	三ガキ・赤色塗彩	三ガキ・赤色塗彩	完全黄銅	No.130

項番	種別	性別	部位	重量 (kg)		内 面	外 面	備考	出寸位置
				口徑 (mm)	底徑 (mm)				
M5	28 養牛	鹿	鹿	—	(7.30)	八ヶ岳 紫斑鹿ノ子	三方牛・赤色鹿形	同既交置	鹿5
	29 養牛	鹿	鹿	—	(14.4)	八ヶ岳 青斑鹿ノ子	三方牛・赤色鹿形	同既交置	鹿27
	20 養牛	鹿	鹿	—	(5.8)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿15
	31 養牛	鹿	鹿	—	(2.3)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿156・177・10・57
	32 養牛	鹿	鹿	—	(7.0)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿35
	33 養牛	鹿	鹿	—	(9.3)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿118
	34 養牛	鹿	鹿	—	(11.5)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿154・157
	35 養牛	鹿	鹿	—	(4.0)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿20
	36 養牛	鹿	鹿	—	(4.1)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿53
	37 養牛	鹿	鹿	—	(4.7)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿157
	38 養牛	鹿	鹿	—	(4.8)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿152
	39 養牛	鹿	鹿	—	(4.3)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿15
	40 養牛	鹿	鹿	—	(7.7)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿110
	40-2 養牛	鹿	鹿	—	(10.5)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿15
	41 養牛	鹿	鹿	—	(3.0)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿153
	42 養牛	鹿	鹿	—	(3.7)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿110
	43 養牛	鹿	鹿	—	(5.4)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿90
	44 養牛	鹿	鹿	—	(9.1)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿157 重トレ
	46 養牛	鹿	鹿	—	(10.8)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿145
	46	養牛	鹿	鹿	(17.0)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿15
	47 養牛	鹿	鹿	—	(15.3)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿127・60
	48 養牛	鹿	鹿	—	(13.5)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿27・31・48
	49 養牛	鹿	鹿	—	(20.8)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿15・207
	50 養牛	鹿	鹿	—	(20.7)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿171
	51 養牛	鹿	鹿	—	(27.4)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿208・178 107
	52 養牛	鹿	鹿	—	(16.4)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿6
	53 養牛	鹿	鹿	—	(15.7)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿183 137
	54 養牛	鹿	鹿	—	(9.8)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿123 177
	55 養牛	鹿	鹿	—	(9.4)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿23
	56 養牛	鹿	鹿	—	(6.5)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿1・3
	57 養牛	鹿	鹿	—	(4.5)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿12・26・120・51
	58 養牛	鹿	鹿	—	(3.2)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿161
	59 養牛	鹿	鹿	—	(7.4)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	鹿141・148
	60 養牛	鹿	鹿	—	(8.3)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	
	61 養牛	鹿	鹿	—	(8.0)	坂部ミガキ・赤色鹿形	三方牛・赤色鹿形	完全交置	

測候所	観測	種類	方位	決量 (cm)		内 面	外 面	備考	出立位置
				口径 (mm)	筒長 (mm)				
146	52	弥生	同上	—	(21.2)	ハケ目 銅砲	三刃牛・赤色筋形	回転式測	No.173
	53	弥生	同上	(7.4)	(8.3)	ハケ目 銅砲	胴下蓋ミガキ・赤色筋形 底・胴下部ミガキ	回転式測	No.88 17ノ
147	64	弥生	同上	(10.0)	(6.4)	ハケ目 銅砲	三刃牛	回転式測	No.173
	65	弥生	同上	—	15.4 (6.5)	銅砲	三刃牛	完全式測	No.70・80
148	66	弥生	同上	—	(9.6)	銅砲	三刃牛	回転式測	No.28
	67	弥生	同上	—	12.8 (4.1)	ナ子	三刃牛	完全式測	No.38
149	68	弥生	同上	—	13.2 (2.9)	ナ子・ハケ目	三刃牛	完全式測	No.15
	69	弥生	同上	—	(10.6) (3.5)	ナ子・ハケ目	三刃牛	回転式測	No.125
150	70	弥生	同上	—	10.4 (2.4)	銅砲	三刃牛	完全式測	No.78
	71	弥生	同上	—	10.7 (3.4)	ナ子	三刃牛	完全式測	No.86
151	72	弥生	同上	—	12.9 (2.9)	ナ子・ハケ目	三刃牛	完全式測	No.102
	73	弥生	同上	—	7.8 (2.9)	ナ子	三刃牛	完全式測	No.64
152	74	弥生	同上	—	9.7 (3.1)	銅砲	三刃牛	完全式測	No.181
	75	弥生	同上	—	10.4 (6.6)	ナ子	三刃牛	完全式測	No.39
153	76	弥生	同上	—	(5.2) (6.8)	ナ子	三刃牛	回転式測	No.22
	77	弥生	同上	—	(10.4) (5.1)	銅砲	三刃牛	回転式測	No.165 西トレ
154	78	弥生	同上	—	5.8 (11.3)	銅砲	三刃牛	完全式測	No.140
	79	弥生	同上	22.3	— (19.3)	ハケ目→ミガキ	口蓋・胴上部弾筒状文 胴部弾筒状文 (3重止心) 胴下部ミガキ	完全式測	No.273 No.274 No.275 No.276 No.277 No.278 No.279 No.280 No.281 No.282 No.283 No.284 No.285 No.286 No.287 No.288 No.289 No.290 No.291 No.292 No.293 No.294 No.295 No.296 No.297 No.298 No.299 No.300 No.301 No.302 No.303 No.304 No.305 No.306 No.307 No.308 No.309 No.310 No.311 No.312 No.313 No.314 No.315 No.316 No.317 No.318 No.319 No.320 No.321 No.322 No.323 No.324 No.325 No.326 No.327 No.328 No.329 No.330 No.331 No.332 No.333 No.334 No.335 No.336 No.337 No.338 No.339 No.340 No.341 No.342 No.343 No.344 No.345 No.346 No.347 No.348 No.349 No.350 No.351 No.352 No.353 No.354 No.355 No.356 No.357 No.358 No.359 No.360 No.361 No.362 No.363 No.364 No.365 No.366 No.367 No.368 No.369 No.370 No.371 No.372 No.373 No.374 No.375 No.376 No.377 No.378 No.379 No.380 No.381 No.382 No.383 No.384 No.385 No.386 No.387 No.388 No.389 No.390 No.391 No.392 No.393 No.394 No.395 No.396 No.397 No.398 No.399 No.400 No.401 No.402 No.403 No.404 No.405 No.406 No.407 No.408 No.409 No.410 No.411 No.412 No.413 No.414 No.415 No.416 No.417 No.418 No.419 No.420 No.421 No.422 No.423 No.424 No.425 No.426 No.427 No.428 No.429 No.430 No.431 No.432 No.433 No.434 No.435 No.436 No.437 No.438 No.439 No.440 No.441 No.442 No.443 No.444 No.445 No.446 No.447 No.448 No.449 No.450 No.451 No.452 No.453 No.454 No.455 No.456 No.457 No.458 No.459 No.460 No.461 No.462 No.463 No.464 No.465 No.466 No.467 No.468 No.469 No.470 No.471 No.472 No.473 No.474 No.475 No.476 No.477 No.478 No.479 No.480 No.481 No.482 No.483 No.484 No.485 No.486 No.487 No.488 No.489 No.490 No.491 No.492 No.493 No.494 No.495 No.496 No.497 No.498 No.499 No.500 No.501 No.502 No.503 No.504 No.505 No.506 No.507 No.508 No.509 No.510 No.511 No.512 No.513 No.514 No.515 No.516 No.517 No.518 No.519 No.520 No.521 No.522 No.523 No.524 No.525 No.526 No.527 No.528 No.529 No.530 No.531 No.532 No.533 No.534 No.535 No.536 No.537 No.538 No.539 No.540 No.541 No.542 No.543 No.544 No.545 No.546 No.547 No.548 No.549 No.550 No.551 No.552 No.553 No.554 No.555 No.556 No.557 No.558 No.559 No.560 No.561 No.562 No.563 No.564 No.565 No.566 No.567 No.568 No.569 No.570 No.571 No.572 No.573 No.574 No.575 No.576 No.577 No.578 No.579 No.580 No.581 No.582 No.583 No.584 No.585 No.586 No.587 No.588 No.589 No.590 No.591 No.592 No.593 No.594 No.595 No.596 No.597 No.598 No.599 No.600 No.601 No.602 No.603 No.604 No.605 No.606 No.607 No.608 No.609 No.610 No.611 No.612 No.613 No.614 No.615 No.616 No.617 No.618 No.619 No.620 No.621 No.622 No.623 No.624 No.625 No.626 No.627 No.628 No.629 No.630 No.631 No.632 No.633 No.634 No.635 No.636 No.637 No.638 No.639 No.640 No.641 No.642 No.643 No.644 No.645 No.646 No.647 No.648 No.649 No.650 No.651 No.652 No.653 No.654 No.655 No.656 No.657 No.658 No.659 No.660 No.661 No.662 No.663 No.664 No.665 No.666 No.667 No.668 No.669 No.670 No.671 No.672 No.673 No.674 No.675 No.676 No.677 No.678 No.679 No.680 No.681 No.682 No.683 No.684 No.685 No.686 No.687 No.688 No.689 No.690 No.691 No.692 No.693 No.694 No.695 No.696 No.697 No.698 No.699 No.700 No.701 No.702 No.703 No.704 No.705 No.706 No.707 No.708 No.709 No.710 No.711 No.712 No.713 No.714 No.715 No.716 No.717 No.718 No.719 No.720 No.721 No.722 No.723 No.724 No.725 No.726 No.727 No.728 No.729 No.730 No.731 No.732 No.733 No.734 No.735 No.736 No.737 No.738 No.739 No.740 No.741 No.742 No.743 No.744 No.745 No.746 No.747 No.748 No.749 No.750 No.751 No.752 No.753 No.754 No.755 No.756 No.757 No.758 No.759 No.760 No.761 No.762 No.763 No.764 No.765 No.766 No.767 No.768 No.769 No.770 No.771 No.772 No.773 No.774 No.775 No.776 No.777 No.778 No.779 No.780 No.781 No.782 No.783 No.784 No.785 No.786 No.787 No.788 No.789 No.790 No.791 No.792 No.793 No.794 No.795 No.796 No.797 No.798 No.799 No.800 No.801 No.802 No.803 No.804 No.805 No.806 No.807 No.808 No.809 No.810 No.811 No.812 No.813 No.814 No.815 No.816 No.817 No.818 No.819 No.820 No.821 No.822 No.823 No.824 No.825 No.826 No.827 No.828 No.829 No.830 No.831 No.832 No.833 No.834 No.835 No.836 No.837 No.838 No.839 No.840 No.841 No.842 No.843 No.844 No.845 No.846 No.847 No.848 No.849 No.850 No.851 No.852 No.853 No.854 No.855 No.856 No.857 No.858 No.859 No.860 No.861 No.862 No.863 No.864 No.865 No.866 No.867 No.868 No.869 No.870 No.871 No.872 No.873 No.874 No.875 No.876 No.877 No.878 No.879 No.880 No.881 No.882 No.883 No.884 No.885 No.886 No.887 No.888 No.889 No.890 No.891 No.892 No.893 No.894 No.895 No.896 No.897 No.898 No.899 No.900 No.901 No.902 No.903 No.904 No.905 No.906 No.907 No.908 No.909 No.910 No.911 No.912 No.913 No.914 No.915 No.916 No.917 No.918 No.919 No.920 No.921 No.922 No.923 No.924 No.925 No.926 No.927 No.928 No.929 No.930 No.931 No.932 No.933 No.934 No.935 No.936 No.937 No.938 No.939 No.940 No.941 No.942 No.943 No.944 No.945 No.946 No.947 No.948 No.949 No.950 No.951 No.952 No.953 No.954 No.955 No.956 No.957 No.958 No.959 No.960 No.961 No.962 No.963 No.964 No.965 No.966 No.967 No.968 No.969 No.970 No.971 No.972 No.973 No.974 No.975 No.976 No.977 No.978 No.979 No.980 No.981 No.982 No.983 No.984 No.985 No.986 No.987 No.988 No.989 No.990 No.991 No.992 No.993 No.994 No.995 No.996 No.997 No.998 No.999 No.1000

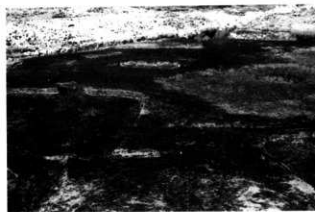
測号	種別	器種	高さ (cm)		外 径	品名、取巻	備考	出土位置
			口径 (径)	高さ (高)				
M6	137 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	138 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.164
	140 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	167
	141 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.80
	142 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.81
	143 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.37・149
	145 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.79
	146 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	148 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.0
	147 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	-97
	149 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.49
	150 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	-57
	152 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	162 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	217
	163 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.77
	154 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	-87
	155 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.103
	156 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	-67
	157 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	158 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.140
	159 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	161 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	157
	162 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	西トレンチ
	163 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.129・132
	164 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.174
	166 弥生	甕	口縁	(3.80)	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	157
	165 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	東トレンチ
	167 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	東トレンチ
	168 弥生	甕	口縁	—	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.10
	169 弥生	甕	口縁	7.7	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.6
	170 弥生	甕	口縁	11.9	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.142
	171 弥生	甕	口縁	10.8	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.172
	172 弥生	甕	口縁	10.6	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.175
	173 弥生	甕	口縁	9.7	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.155
	174 弥生	甕	口縁	(10.8)	ナギ	黒い漆塗の破片文 (3重止心) → 胴部にナギ牛、赤色塗彩	赤土 新田式銅	Ra.103

遺跡番号	種類	種類	神位	遺 集 (m)		内 庭	外 庭	備考	出土品
				二重(5)	三重(5)				
M4	175	石塔		8.9	7.3	4.5	85.14	盛石	30.94
	176	石製		1.2	1.9	0.5	0.43	飯打	6.83
	177	石製	真石	7.6	8.5	1.8	74.32	頭砂岩	
	178	石塔	真石	(5.6)	(5.2)	(1.4)	(70.3)	頭砂岩	
	179	石塔	真石	(7.9)	(5.7)	(4.8)	(30.3)	安山岩	M5裏トレ
	180	石塔	真石	(15.2)				阿波式	6.107
M6	181	瓦葺	S字壁					瓦葺	
	1	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	2	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	3	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	4	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	5	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	6	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	7	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	8	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	9	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	10	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	11	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	12	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	13	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	14	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	15	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	16	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	17	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	18	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	19	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	20	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	21	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	22	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	23	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	24	瓦葺	瓦葺					瓦葺	
	25	瓦葺	瓦葺					瓦葺	

番号	種類	状態	形状	口径(㎜)	高さ(㎜)	重量(㎏)	内面	外形	備考	出土位置
26	弥生	甕	胴	(14.4)	—	(4.4)	ミカキ	頸部縹雲状文・胴部縹雲状文→円形貼付文	拓本 断面実測	J-13ㄱ
27	新石器	甕	胴	(26.2)	—	(8.5)	磨耗	頸部縹雲状文・胴部縹雲状文(口縁止め)	拓本 断面実測	J-14ㄱ
28	弥生	甕	頸	(11.4)	(2.5)	(62.37)	縹雲	頸部縹雲状文・胴部縹雲状文(口縁止め)	拓本 断面実測	K-9ㄱ
29	弥生	台付甕	胴	—	(10.6)	(4.5)	ヘラナナ	頸部縹雲状文・胴部縹雲状文(口縁止め)	拓本 断面実測	K-9ㄱ
30	弥生	台付甕	胴	—	(4.8)	(4.1)	杯部縹雲	ヘラナナ 磨耗	完全実測	K-9ㄱ
31	弥生	甕	口→胴	(17.4)	—	(11.0)	ミカキ	頸部縹雲状文(3連止め)	完全実測	L-9ㄱ
32	須恵	杯	口	(11.4)	—	(4.6)	横ナデ	頸部縹雲状文(3連止め)	完全実測	M-9ㄱ
33	弥生	甕	底	—	15.3	(4.1)	縹雲	横ナデ	完全実測	N-9ㄱ
34	弥生	杯	口→底	(12.6)	3.7	5.8	ミカキ・赤色塗彩	横ナデヘラナナ→横ナデヘラナナ	完全実測	N-16ㄱ
35	弥生	高杯	頸	—	—	(3.1)	ミカキ・赤色塗彩	ミカキ・赤色塗彩 底部ミカキ・赤色塗彩	完全実測	検出
36	弥生	甕	頸	—	—	—	頸部ハケ目→口縁部ミカキ	頸部ハケ目→ミカキ・赤色塗彩(口縁・胴部ミカキ)	完全実測	検出
37									拓本 断面実測	検出
38	東海系	S字甕	口	(14.4)	—	(4.4)	頸部縹雲	頸部縹雲 口縁部横ナデ	拓本実測	御田遺跡Dトレ
39	弥生	甕	口	(26.2)	—	(8.5)	口縁部ミカキ・赤色塗彩	口縁部縹雲 口縁部横ナデ	完全実測	57年度分布調査
40	石器	砥石		(11.4)	(2.5)	(62.37)		右側欠損 正面に糸痕	砂岩	A-6~8ㄱ
41	石器	砥石		9.1	6.5	3.8	257.67	正基・上端部に敲打痕	安山岩	B-13ㄱ
42	石器	磨石		(9.5)	(2.3)	(38.32)		周囲欠損 正基をも磨り面あり	粘板岩	B-22ㄱ
43	石器	磨石・砥石		7.7	7.0	5.7	329.05	正面に敲打痕 上部に磨り面	花崗岩	C-6・7ㄱ
44	石器	磨石・砥石		(3.9)	(2.0)	(0.3)	(2.84)	先端・基部欠損	片岩	C-20ㄱ
45	石器	磨石・砥石		(5.1)	(7.3)	(4.5)	(230.62)	下部欠損 上端部に敲き、正面に磨り面	凝灰岩	C-5ㄱ
46	石器	砥石		9.6	4.6	2.7	162.51	上下端部に敲打痕	凝灰岩	G-8ㄱ
47	石器	磨石		8.9	5.4	2.3	149.73	正面と右側に磨り石	硬砂岩	G-8ㄱ
48	石器	解石製品		6.5	4.1	2.4	23.50	全体に磨り 糸痕あり	軽石	I-18ㄱ
49	石器	砥石		9.0	5.8	4.0	282.88	正面に敲打痕	安山岩	I-20ㄱ
50	石器	解石製品		5.0	4.8	3.6	37.55	全体に磨り 上端部に敲打痕	軽石	Z
51	石器	解石製品		4.1	4.0	1.9	17.54	全体に磨り	軽石	Z
52	石器製品	滑石臼(LH)		(26.3)	(13.5)	(9.6)	(397.0)	径不明 芯軸孔径(3.0) 周囲欠損(㎝)	安山岩	Z
53	石器製品	古銭		2.3		0.1	2.47		寛永通宝	A-1ㄱ
54	石器	砥石		(5.6)	(3.0)	(2.1)	(52.18)	下部欠損 砥面数4 両側に糸痕	凝灰岩	B-9ㄱ
55	石器	磁物石		12.0	5.8	3.2	350.41		安山岩	Z
56	石器	砥石		7.5	6.2	3.5	221.41	正面に敲打痕	安山岩	Z



Y1付近 (南より)



Y6・M1・D3・D7 (南より)



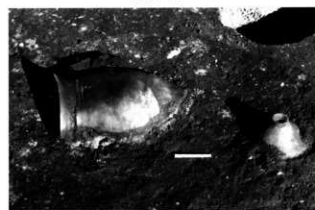
Y8・Y11、Y7・D2 (東より)



Y12完掘 (南より)



M1全景 (南より)



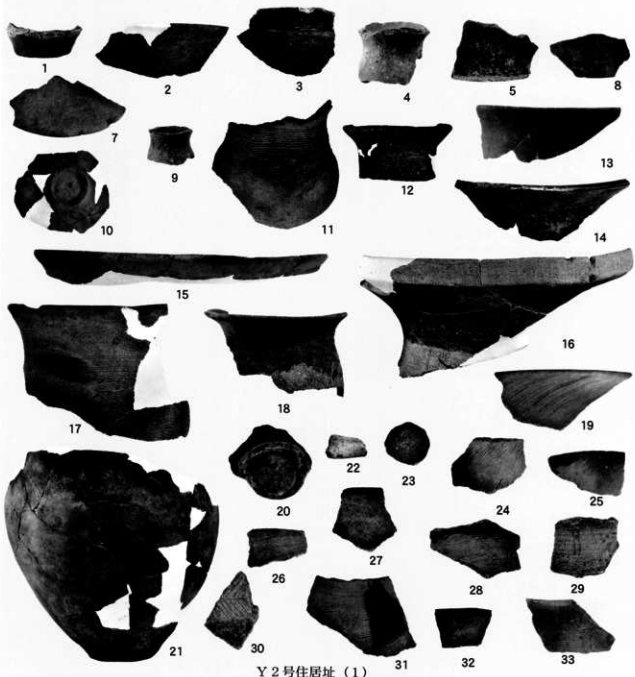
Y8-48・2出土状況 (西より)



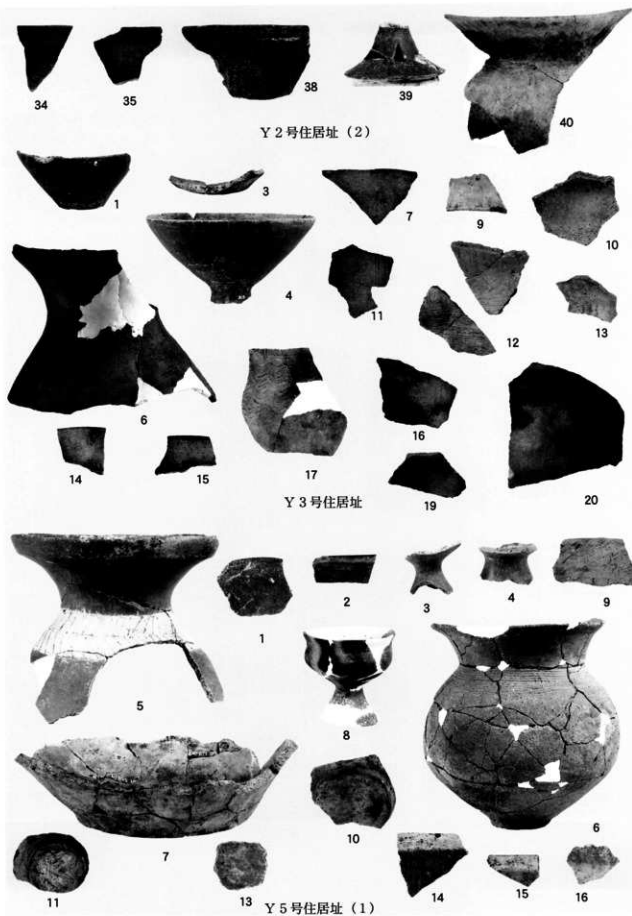
D1プラン検出状況 (北より)



Y 1 号住居址

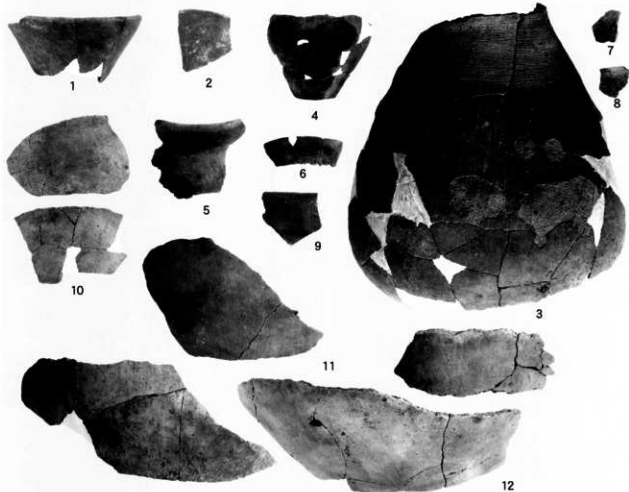


Y 2 号住居址 (1)

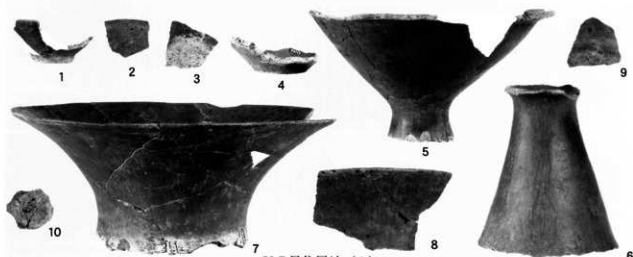




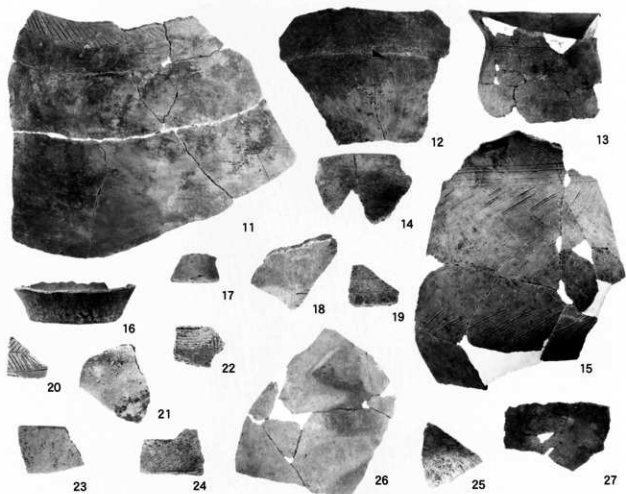
Y 5 号住居址 (2)



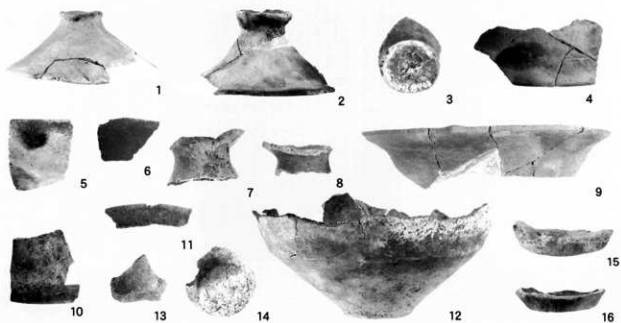
Y 6 号住居址



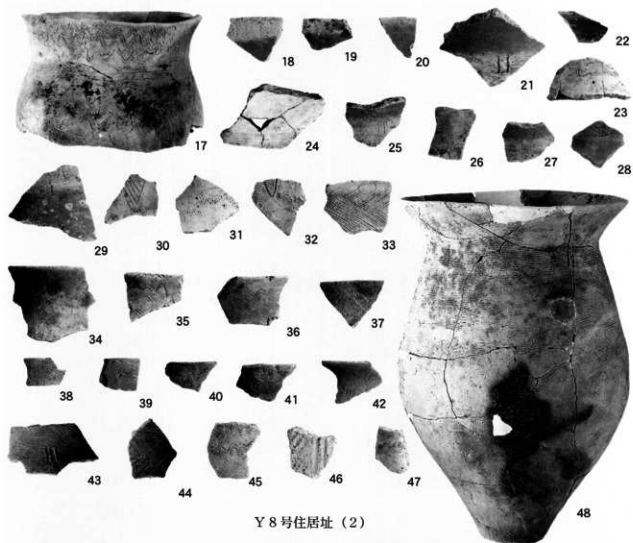
Y 7 号住居址 (1)



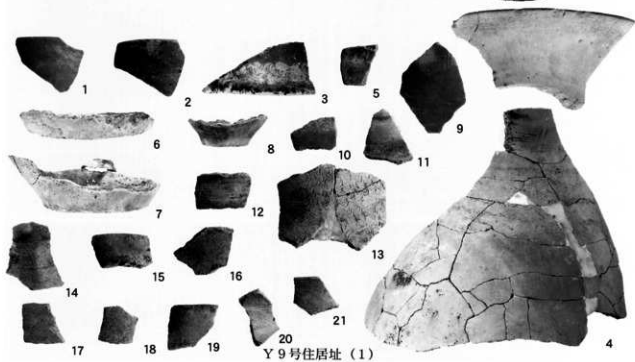
Y 7 号住居址 (2)



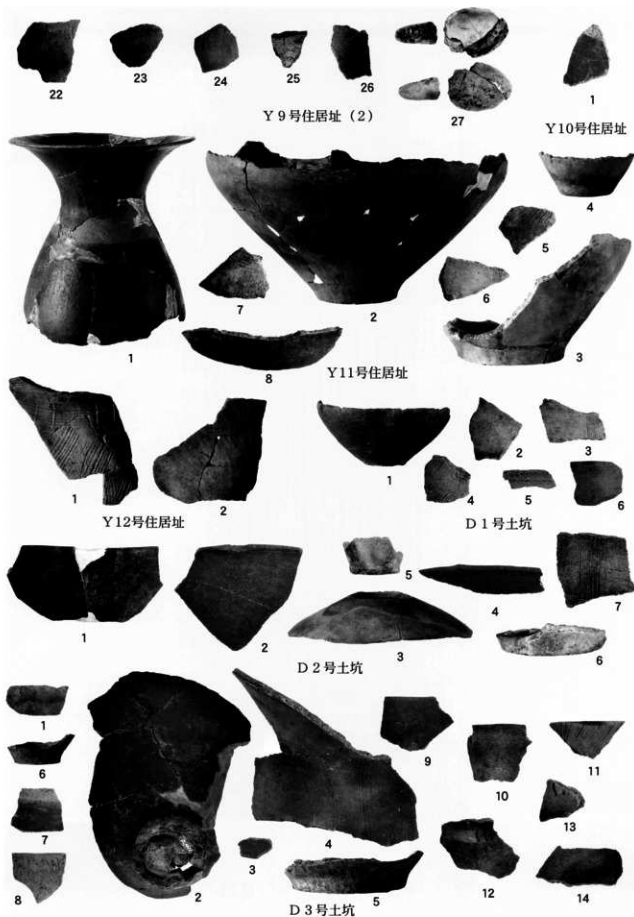
Y 8 号住居址 (1)



Y 8号住居址 (2)



Y 9号住居址 (1)

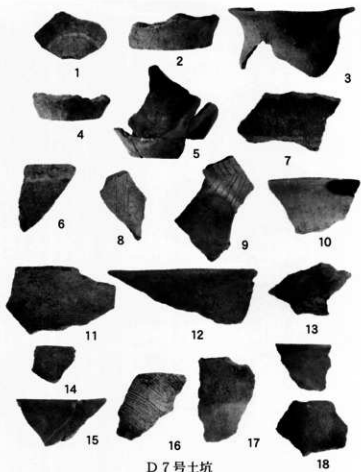
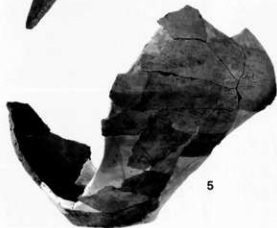




D 6号土坑



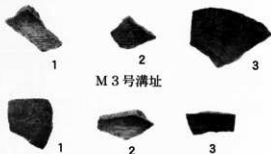
D 8号土坑



D 7号土坑

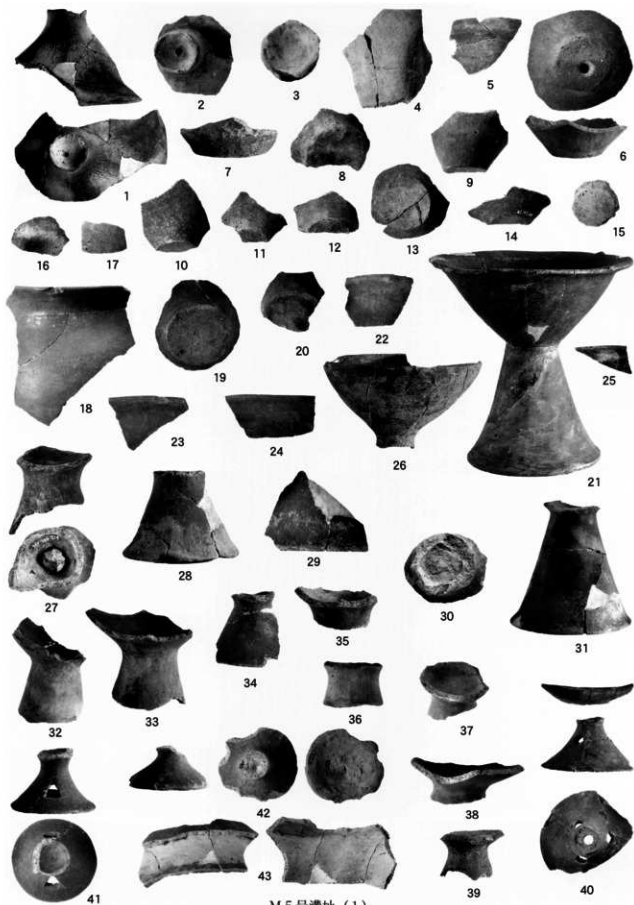


M 1号沟址

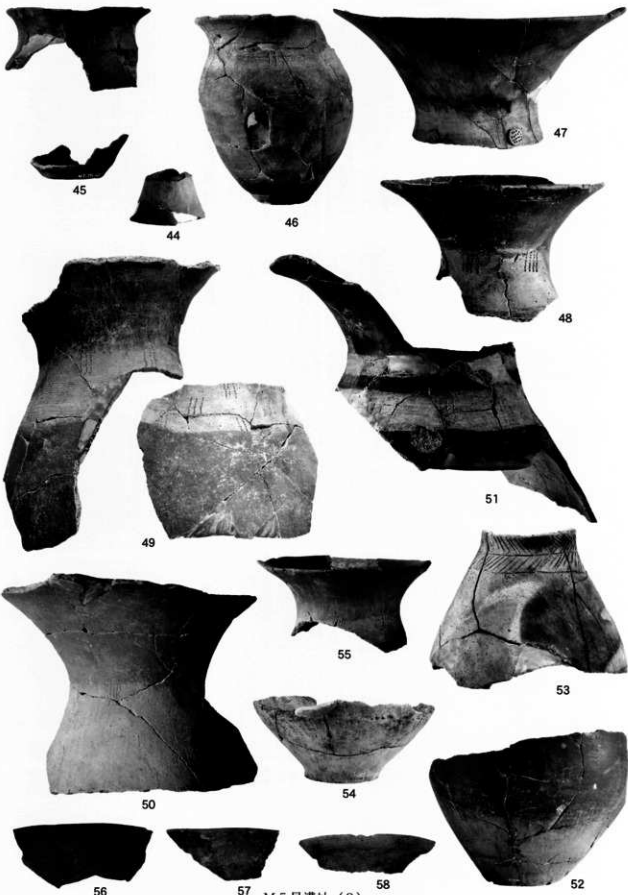


M 3号沟址

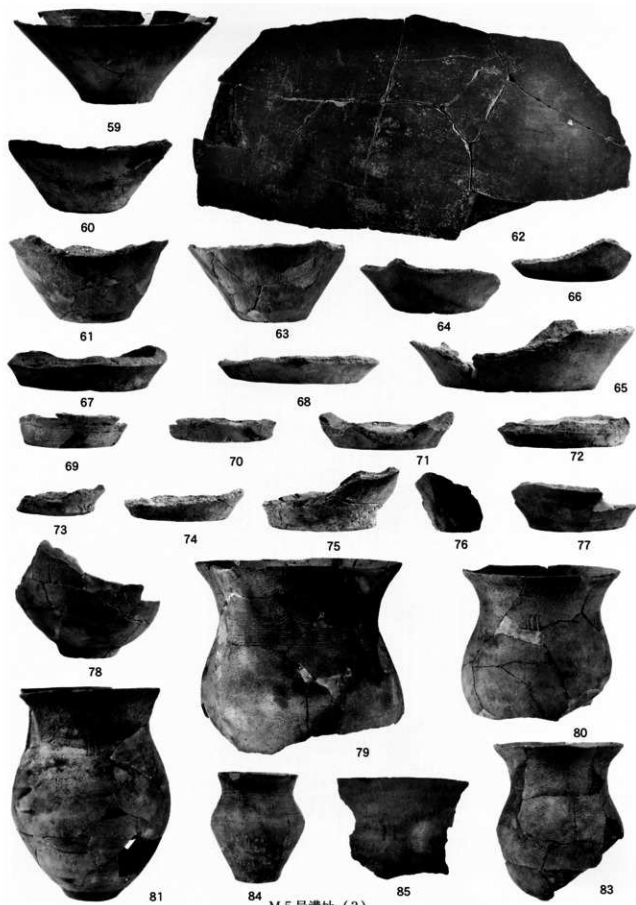
M 4号沟址



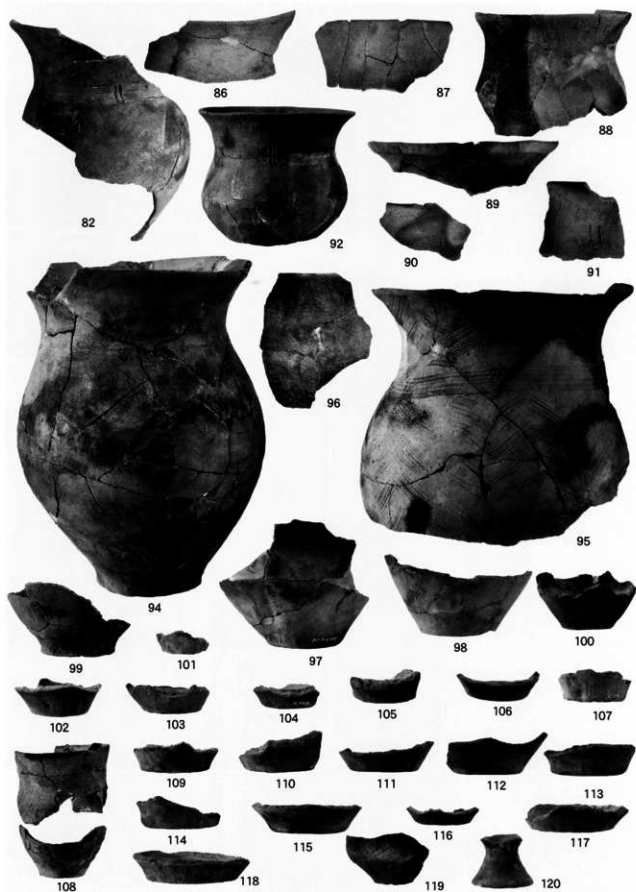
M 5号沟址 (1)



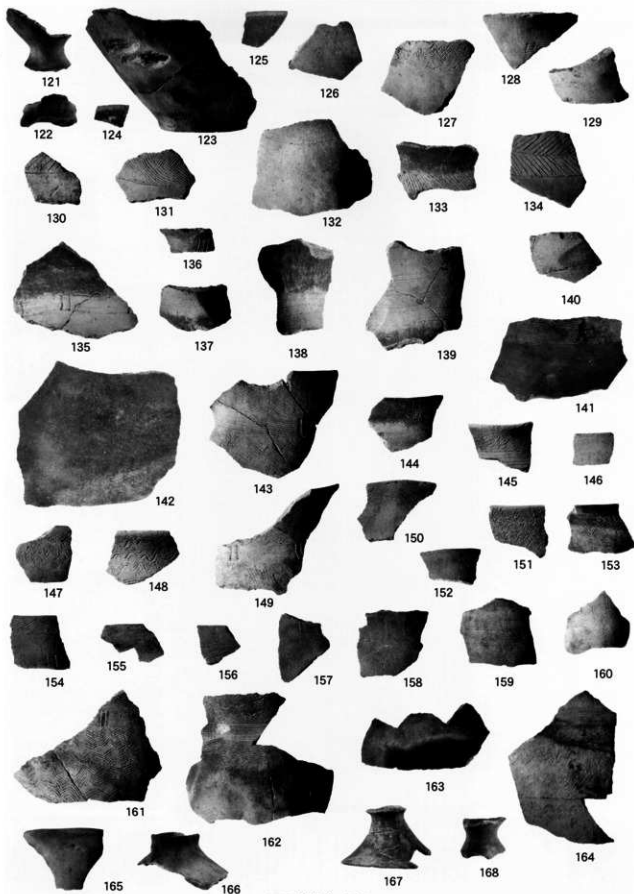
M 5 号沟址 (2)



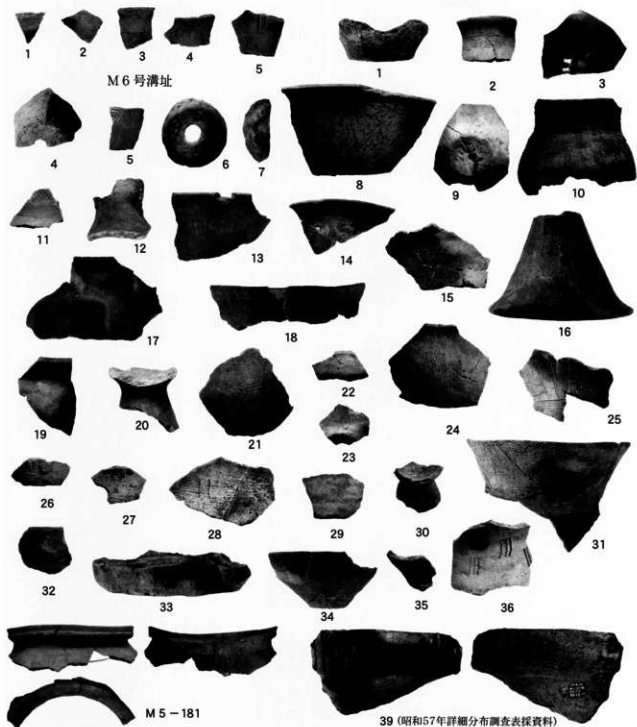
M 5号沟址 (3)



M 5号沟址 (4)

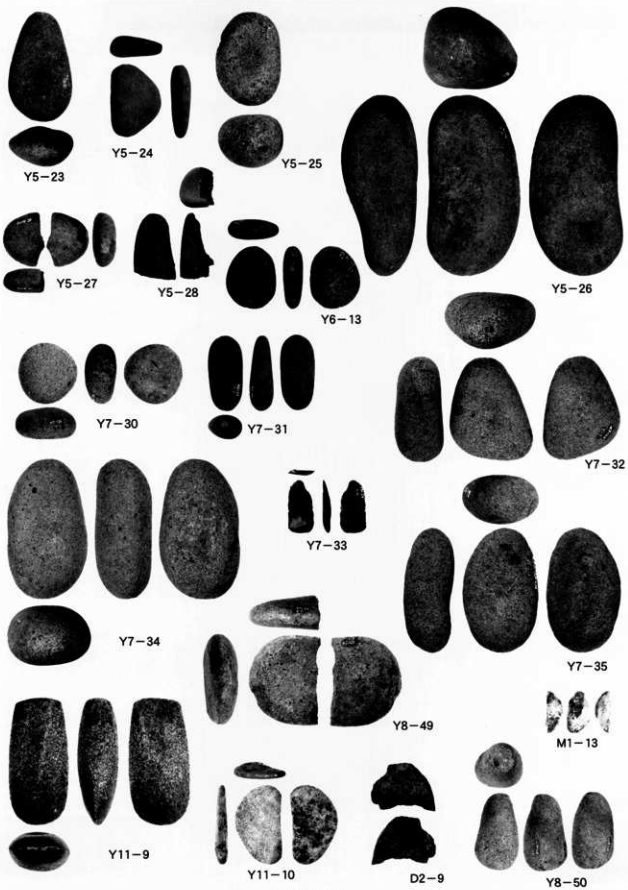


M 5号沟址 (5)

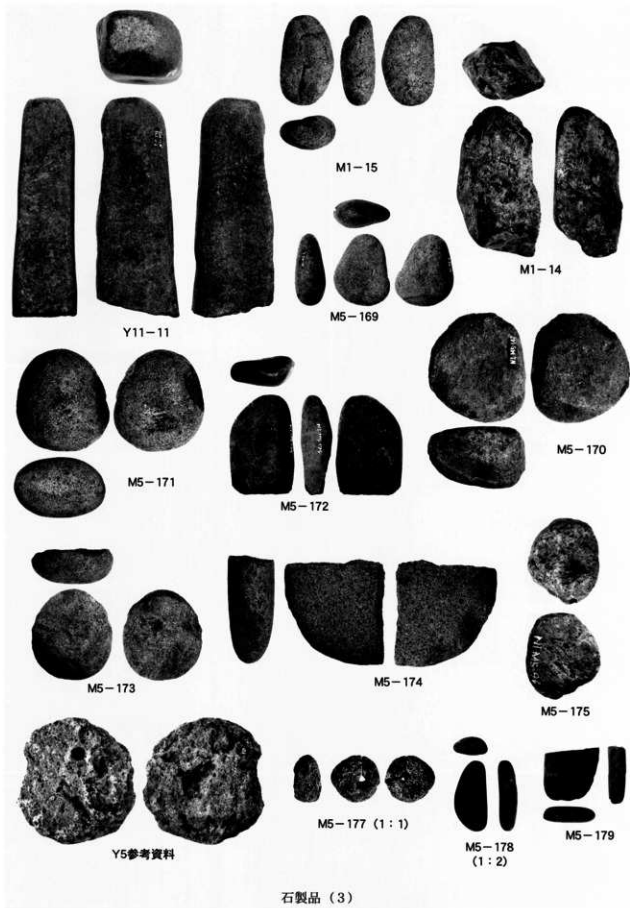


M 5 - 181 ・ グリッド ・ 表採





石製品 (2)



石製品 (3)



M5-180



グリッド-40



グリッド-41



グリッド-42



グリッド-43



グリッド-44 (1:1)



グリッド-45



グリッド-46



グリッド-47



グリッド-48



グリッド-49



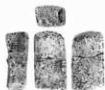
グリッド-50



グリッド-52



グリッド-51



グリッド-54



グリッド-56



グリッド-55



Y2-37



グリッド-53

石製品 (4)

古銭 (1:1)

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

西一里塚遺跡 I

2014年9月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
社会教育部 文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL. 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

報告書抄録

ふりがな 書名	にしいちりづかいせきいち 西・里塚遺跡I
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集
編著者名	森泉かよ子
編集機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20140930
郵便番号	3850002
住所	長野県佐久市志賀5953
電話番号	0267-68-7321
ふりがな 遺跡名	にしいちりづかいせき 西・里塚遺跡I
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしいわむらだあざにしいちりづか 長野県佐久市岩村田字西一里塚
遺跡番号	佐久市 92
北緯	36° - 16' - 2" (世界測地系)
東経	138° - 27' - 24" (世界測地系)
調査期間	昭和48年10月29日～11月30日
整理期間	昭和49年3月20日～29日・昭和49年4月29～5月6日・平成25・26年度
調査面積	960㎡
調査原因	長野県営佐久市北部地区区画整理整備事業及び小規模河川改良事業
種別	集落・環壕
主な時代	弥生時代後期
遺跡の概要	集落-弥生時代後期-竪穴住居址+土坑+溝址+ピット・弥生 後期土器+土製品+石製品 環壕-弥生時代後期-溝址+弥生後期土器+石製品